

卒業論文 2013 年度(平成 25 年度)

脳波計測による演劇作品『わが星』の分析

総合政策学部 4 年  
学籍番号：70900676  
氏名：石井隆介  
指導教員：藁谷郁美

平成25年7月16日

## 本論の概要

劇団ままごとの演劇作品『わが星』をテーマに、本作品の魅力の本質を探る。

MindWave Mobile(Neuro Sky社)を使用し、本作品の映像を鑑賞している時の脳の働きを計測する。計測された脳波データを基に作品中における諸要素を検討し、本作品の特徴を探るとともに、本作品の魅力の本質を考える。

実験では、MindWave Mobileによって計測された脳波データをMyndPlay Pro(MyndPlay社)で分析する。

被験者それぞれの脳波データを分析し、被験者が『わが星』のどういった点に感動したかを探る。

また、すべての被験者に共通して見られる傾向を探ることで、『わが星』が持つ普遍的な魅力を探る。

## 目次

|                                               |    |
|-----------------------------------------------|----|
| 1、はじめに.....                                   | 6  |
| 1-1、作品選定の根拠.....                              | 6  |
| 1-2、作品の紹介.....                                | 6  |
| 1-3、講評の紹介.....                                | 6  |
| 1-4、問題意識の所存.....                              | 7  |
| 1-5、論文の位置づけ.....                              | 8  |
| 2、仮説.....                                     | 8  |
| 3、手法.....                                     | 8  |
| 3-1、柴幸男、宮永琢生へのインタビュー調査.....                   | 8  |
| 3-2、参与観察：ストップウォッチを用いた実験と質的調査.....             | 8  |
| 3-3、脳波計測実験：演劇作品における内的要素の変化の可視化.....           | 9  |
| 3-4、脳波計測実験被験者へのアンケート調査.....                   | 10 |
| 4、調査結果と分析.....                                | 10 |
| 4-1、柴幸男、宮永琢生へのインタビュー調査から得た気づき.....            | 10 |
| 4-2、ストップウォッチを用いた実験と質的調査から得た気づき.....           | 11 |
| 4-3、脳波計測実験の結果.....                            | 12 |
| 4-3-1、被験者別に見た脳波の特徴.....                       | 12 |
| 4-3-2、被験者に共通して見られた特徴.....                     | 23 |
| 4-4、脳波計測実験後のアンケートから得た気づき.....                 | 32 |
| 5、考察.....                                     | 33 |
| 5-1、被験者別の考察.....                              | 33 |
| 5-2、被験者共通の傾向.....                             | 41 |
| 6、結論.....                                     | 48 |
| 6-1、まとめ.....                                  | 48 |
| 6-2、今後の展望と課題.....                             | 49 |
| 7、参考.....                                     | 49 |
| 8、資料.....                                     | 49 |
| 8-1、柴幸男、宮永琢生へのインタビュー調査.....                   | 49 |
| 8-2、ストップウォッチを用いた実験後の質的調査.....                 | 61 |
| 8-3、脳波計測実験のグラフ.....                           | 65 |
| 8-4、脳波計測実験後のアンケート.....                        | 73 |
| 8-5、Attention、Meditation、Zoneデータのまとめ、色分け..... | 75 |
| 8-6、『わが星』章立てと該当ページ、経過時間.....                  | 78 |

## 図表 目次

|                                  |    |
|----------------------------------|----|
| 図1：MyndPlay Proの動作画面.....        | 9  |
| 図2：被験者AのAttention、数値の変動.....     | 12 |
| 図3：被験者AのMeditation、数値の変動.....    | 12 |
| 図4：被験者AのZone、数値の変動.....          | 13 |
| 図5：被験者BのAttention、数値の変動.....     | 13 |
| 図6：被験者BのMeditation、数値の変動.....    | 13 |
| 図7：被験者BのZone、数値の変動.....          | 13 |
| 図8：被験者CのAttention、数値の変動.....     | 14 |
| 図9：被験者CのMeditation、数値の変動.....    | 14 |
| 図10：被験者CのZone、数値の変動.....         | 14 |
| 図11：被験者DのAttention、数値の変動.....    | 15 |
| 図12：被験者DのMeditation、数値の変動.....   | 15 |
| 図13：被験者DのZone、数値の変動.....         | 15 |
| 図14：被験者EのAttention、数値の変動.....    | 15 |
| 図15：被験者EのMeditation、数値の変動.....   | 16 |
| 図16：被験者EのZone、数値の変動.....         | 16 |
| 図17：被験者FのAttention、数値の変動.....    | 16 |
| 図18：被験者FのMeditation、数値の変動.....   | 16 |
| 図19：被験者FのZone、数値の変動.....         | 17 |
| 図20：被験者GのAttention、数値の変動.....    | 17 |
| 図21：被験者GのMeditation、数値の変動.....   | 17 |
| 図22：被験者GのZone、数値の変動.....         | 17 |
| 図23：被験者HのAttention、数値の変動.....    | 18 |
| 図24：被験者HのMeditation、数値の変動.....   | 18 |
| 図25：被験者HのZone、数値の変動.....         | 18 |
| 図26：被験者AのAttention、データのまとめ.....  | 24 |
| 図27：被験者AのMeditation、データのまとめ..... | 24 |
| 図28：被験者AのZone、データのまとめ.....       | 24 |
| 図29：被験者BのAttention、データのまとめ.....  | 24 |
| 図30：被験者BのMeditation、データのまとめ..... | 25 |
| 図31：被験者BのZone、データのまとめ.....       | 25 |
| 図32：被験者CのAttention、データのまとめ.....  | 25 |
| 図33：被験者CのMeditation、データのまとめ..... | 25 |
| 図34：被験者CのZone、データのまとめ.....       | 26 |
| 図35：被験者DのAttention、データのまとめ.....  | 26 |
| 図36：被験者DのMeditation、データのまとめ..... | 26 |
| 図37：被験者DのZone、データのまとめ.....       | 26 |
| 図38：被験者EのAttention、データのまとめ.....  | 27 |
| 図39：被験者EのMeditation、データのまとめ..... | 27 |
| 図40：被験者EのZone、データのまとめ.....       | 27 |
| 図41：被験者FのAttention、データのまとめ.....  | 27 |
| 図42：被験者FのMeditation、データのまとめ..... | 28 |
| 図43：被験者FのZone、データのまとめ.....       | 28 |
| 図44：被験者GのAttention、データのまとめ.....  | 28 |
| 図45：被験者GのMeditation、データのまとめ..... | 28 |
| 図46：被験者GのZone、データのまとめ.....       | 29 |

|                                              |    |
|----------------------------------------------|----|
| 図47：被験者HのAttention、データのまとめ                   | 29 |
| 図48：被験者HのAttention、データのまとめ                   | 29 |
| 図49：被験者HのZone、データのまとめ                        | 29 |
| 図50：わが星『OUR PLANET』より、引越しのシーン                | 33 |
| 図51：わが星『OUR PLANET』より、先生が光速を超える方法を男の子に教えるシーン | 33 |
| 図52：わが星『OUR PLANET』より、タイムカプセルを埋めるシーン         | 35 |
| 図53：わが星『OUR PLANET』より、月ちゃんの手紙のシーン            | 35 |
| 図54：わが星『OUR PLANET』より、家族のラップのシーン             | 37 |
| 図55：わが星『OUR PLANET』より、公転のシーン                 | 38 |
| 図56：わが星『OUR PLANET』より、終末を予感させるオープニングシーン的一幕   | 40 |
| 図57：わが星『OUR PLANET』より、男の子と地球の邂逅              | 41 |
| 図58：Attentionデータのまとめ グループ分け                  | 42 |
| 図59：Attentionデータのまとめ 三つの起伏                   | 44 |
| 図60：Meditationデータのまとめ グループ分け                 | 45 |
| 図61：Meditationデータのまとめ 五つの起伏                  | 46 |
| 図62：Zoneデータのまとめ グループ分け                       | 47 |
| 図63：被験者AのAttention                           | 66 |
| 図64：被験者AのMeditation                          | 66 |
| 図65：被験者AのZone                                | 66 |
| 図66：被験者BのAttention                           | 67 |
| 図67：被験者BのMeditation                          | 67 |
| 図68：被験者BのZone                                | 67 |
| 図69：被験者CのAttention                           | 68 |
| 図70：被験者CのMeditation                          | 68 |
| 図71：被験者CのZone                                | 68 |
| 図72：被験者DのAttention                           | 69 |
| 図73：被験者DのMeditation                          | 69 |
| 図74：被験者DのZone                                | 69 |
| 図75：被験者EのAttention                           | 70 |
| 図76：被験者EのMeditation                          | 70 |
| 図77：被験者EのZone                                | 70 |
| 図78：被験者FのAttention                           | 71 |
| 図79：被験者FのMeditation                          | 71 |
| 図80：被験者FのZone                                | 71 |
| 図81：被験者GのAttention                           | 72 |
| 図82：被験者GのMeditation                          | 72 |
| 図83：被験者GのZone                                | 72 |
| 図84：被験者HのAttention                           | 73 |
| 図85：被験者HのMeditation                          | 73 |
| 図86：被験者HのZone                                | 73 |
| 図87：Attentionデータのまとめ                         | 75 |
| 図88：Meditationデータのまとめ                        | 76 |
| 図89：Zoneデータのまとめ                              | 77 |
| 図90：『わが星』章立てと該当ページ、経過時間                      | 78 |

## 1、はじめに

### 1-1、作品選定の根拠

劇団ままごとの演劇作品『わが星』は、2010年に岸田戯曲賞を受賞した。

この賞は演劇界に新たなる新風を吹き込む新人劇作家の奨励と育成を目的に、1955年に新劇戯曲賞として設置され、1961年には「新劇」岸田戯曲賞、1979年に岸田國土戯曲賞と改称され今日に至る。新人劇作家の登竜門とされることから、「演劇界の芥川賞」とも称される。（註1）

そのような作品であるからこそ、多くの被験者にも受け入れられると考え、『わが星』を選んだ。

### 1-2、作品の紹介

『わが星』は2009年10月8日から12日まで三鷹市芸術文化センター 星のホールにて初演が行われた。作・演出は同劇団主宰の柴幸男（1982〜）。音楽をヒップホップユニットの□□□（クチコロ）の三浦康嗣、製作総指揮を宮永琢生（1981〜）が担当。青木宏幸、大柿友哉、黒岩三佳、斎藤淳子、永井秀樹、中島佳子、端田新菜、三浦俊輔が出演。他に野村政之（ドラマツルク）、佐藤恵（舞台監督）、青木拓也（美術）、伊藤泰行（照明）、星野大輔（音響）、セキコウ（宣伝美術）、横内里穂（当日運営）、平田オリザ（総合プロデューサー）らが参加。主催は三鷹市芸術文化振興財団。2011年4月15日から6月5日まで東京、三重、名古屋、北九州、伊丹、いわきの6都市において再演された。

劇団ままごとは柴幸男の作品を上演するための団体。『演劇を「ままごと」のようにより身近に。より豊かに。』することを目標に活動。

柴幸男は1982年生まれ。愛知県出身。「青年団」演出部所属。「急な坂スタジオ」レジデント・アーティスト。『わが星』にて第54回岸田國土戯曲賞を2010年に受賞。

### 1-3、講評の紹介

『わが星』については、岸田國土戯曲賞の選評において以下のようなことが述べられている。（註2）

岩松了(1952-)「『わが星』（柴幸男）は、ひとつの家庭、ひとりの少女を宇宙の中に放り出し、無用な思い入れなく、人のあわれを描き出している。無常観すら感じさせるその筆致は、A・キアロスタミの映画を観るようで、容易にヒューマニズムなどという言葉に手をのばしてはならぬという警鐘とも感じる。くり返しと少しずつずれてゆくシーンの連らなりも効果的だ。舞台装置や音楽に対する指定も台本には書きこまれているが、個人的には、ちまちました家庭劇もどきが横行してきた演劇シーンに、ひとつの爆破装置を仕掛けたという意味でも評価できるし、歓迎すべき作品と感じた。」

鴻上尚史(1958-)「柴幸男さんの『わが星』は、僕にはどうも、ソートン・ワイルダーの『わが町』の感動をかなりの部分、借りているのではないかと感じて、乗り切れませんでした。僕自身、『わが町』が大好きだというのが、一番の原因だと思います。とても大きなものととても小さなものを同時に扱うと、そこに「詩」が生まれます。刹那と永遠を一度に手の上に乗せようとすれば、そこに切なさが立ち上がります。

『わが星』の感動は、『わが町』の感動ではないのかと僕はずっと思っていました。けれど、他の審査員の方々が受賞作として押しました。柴さんの魅力は、たぶん、演劇の可能性を遊びとケレン味の形で押し広げていくことなのでしょう。」

坂手洋二(1962-)「柴幸男『わが星』は、失礼を承知で言えば、他の候補作との関係では、一種の消去法で一番まともに見えたというのが本当である。「だからなんだ？」と思うことも多々あるし、手垢にまみれたノスタルジア史観だとも思う。それでも作者は自分のスタンスに合わせて新しいことに挑んだ。「上演」を意識した台本であることが、この場合は吉と出た。」

永井愛(1951-)「『わが星』（柴幸男）は、地球と宇宙に流れた時間と、地上の人間に流れた時間を相対化するという、壮大な遠近法で見せる。それは、ワイルダーの『わが町』の本歌取りとして、十分な詩情を獲得しているのだが、人物の会話は平板で物足りない。これが意識的なことなのか、このような描き方しかできないのかという疑問は最後まで私を迷わせた。この作品は最も高い評価を集めたが、受賞作とするかどうかの議論が長引いたのは、ここに起因していたと思う。だが、この立体構造は捨てがたく、設計士としての柴さんが勝利を収めた。舞台を見てみたいと思わせる作品だった。」

野田秀樹(1955-)「寂寥感とか孤独といった、積み上げられた悲しみではなくて、ただ寂しさの様なものを『わが星』を読んだ後に感じた。『今ここに、光が届いているあの星が、とうの昔に消えているかもしれない』という話を誰もが子供のころに聞いた。その時に誰もが感じた《初めての寂しさ》のようなものだ。それは、人が初めて感じる《生き物としての寂しさ》と呼べる。ありふれていると言えばありふれたモチーフだ。だが柴氏は、このモチーフをただありふれたセリフや手法で表現していない。《ずらす》という手法で蘇らせている。韻を踏んだり、或いはラップというセリフの在り方で、コトバを《ずらし》、さらにそのコトバを発する主体を《ずらし》、その《ずれ》から、星の光を絞り出した。読み終わった後に、確かに、その星の光のようなものが零れている。涙を流すような悲しさではない。透き通って寂しい。ここまで徹底して《ずらす》手法は、新しいと呼んでいい。肉声を含めた肉体を使う舞台でしかできないコトバの扱い方である。この《ずらす》手法は数学の問題を美しく解いて見せた時の方法に似ている。答えは、《寂しさ》であり、驚きはない。だが解き方が美しいのである。この手法だけで、今後どれだけのことが表現できるのか、或いはどこかでしか表現できないのか、それは私の預かり知るところではない。でも、今この時点で、この手法はひとつの才能である。この作品をためらわずに推した。」

宮沢章夫(1956-)「世界を、人類を肯定する前向きなメッセージはへたをすれば陳腐なものになっただろう。だが、ヒップホップの方法論を持ちこみ、□□□（クチロロ）というブレイクビーツ・ユニットの音楽も果敢にとりこんだ『建設的』なアプローチは、いわゆる現代口語演劇を再構築する。反復しつつ、微妙な差異によって紡がれる〈世界〉の小さな震えと、その巨大な〈世界〉のなかで、距離を縮小し新しいテレビを買うことを希望する矮小でどうでもいいような細かいディテールと欲望が平行して動くとき、読む者は、そこに自身の存在をあらためて見る。遠い宇宙の彼方からわたしたちらはごく小さい存在であり、しかし、そのカメラを接近すれば、内宇宙がわたしたちのからだの内部で蠢いている。それを人は『セカイ系』と呼ぶだろうか。だが、いま演劇は、これまでとはまた異なる方法によって演劇ならではの新しい地平のひとつを切り開いたと言っているだろう。わたしは『わが星』を推す。」

#### 1-4、問題意識の所存

多くの場合、我々は過去の演劇作品と対照する形で演劇作品を評価している。しかし、そのような評論の多くが私にとって腑に落ちなかった。なぜなら、そのような評論が引用する文脈が恣意的である場合があるように感じられたからだ。

個人の主観をなるべく排し、客観的に読み取れるものから作品を評価することはできないか。そのような問題意識があった。

なぜこの作品は評価されるのか。この作品のおもしろさはどこにあるのか。それを示すために、定量的なデータを用いて論文を作成しようと思った。いわば「感動の定量化」を試みたいと考えたのである。

## 1-5、論文の位置づけ

演劇作品の評価を行うにあたり、脳波データを用いることが本研究の特徴である。あくまで文学研究ではなく、認知科学的アプローチにおいて演劇作品の評価を行う。

定量的に扱える脳波データを用いて、演劇作品『わが星』のおもしろさや作品の価値がどこにあるのかを示すことが本論の目的である。

(註1) 白水社「岸田戯曲賞」<http://www.hakusuisha.co.jp/kishida/>、2013年6月25日アクセス

(註2) 白水社「第54回岸田國士戯曲賞選評(2010年)」<http://www.hakusuisha.co.jp/kishida/review54.php>、2013年6月25日アクセス

## 2、仮説

脳波計測を通して二つの結果が見えてくると考えられる。すなわち、

- 一、各被験者に独特な脳波の起伏がある。
- 二、どの被験者もほぼ同じタイミングで脳波が高くなる(低くなる)瞬間がある。

これらに対し、以下を考えることができる。

一については、脳波が高まるシーンに共通する舞台的要素(テキスト、俳優、照明、音響など)があるのではないか。

二については、そのシーンには鑑賞者の多くに普遍的な何らかの作用があるのではないか。

この二点を仮説として、分析を進める。

## 3、手法

### 3-1、柴幸男、宮永琢生へのインタビュー調査

本論でどのような手法を用いるかを考えるにあたり、プレ調査としてインタビューを行った。

インタビュー対象は『わが星』の脚本と演出を務めた柴幸男氏と、プロデューサーの宮永琢生氏である。

### 3-2、参与観察：ストップウォッチを用いた実験と質的調査

柴幸男、ままごと、三浦康嗣「わが星『OUR PLANET』」(DVD)(2011年5月4日 play/HEADZ)を用いて、作品の鑑賞と30分程度の質的調査を行った。鑑賞の際は4名中2名にストップウォッチを携帯させ、心動かされたシーンがあればストップウォッチのラップタイム機能でタイムコードを取るように指示した。ストップウォッチを携帯させた二人は隣り合わないよう座らせた。

また、作品鑑賞後に質的調査の形で感想を聞いた。男性1名、女性2名、計3名である。



### 3-3、脳波計測実験：演劇作品における内的要素の変化の可視化

『わが星』の魅力を探るために、以下の方法で『わが星』を鑑賞している間の脳波を計測する実験を行った。

- ・ Neuro Sky社のMindWave Mobileを使用し、脳波を測定する。
- ・ 計測にはMyndPlay社のMyndPlay Proを使用。
- ・ 柴幸男、ままごと、三浦康嗣「わが星『OUR PLANET』」(DVD) (2011年5月4日 play/HEADZ)を再生し、脳波記録を開始。作品が終わるまで計測を行う。
- ・ MacBook Pro 13インチを使用。

#### MindWave Mobileとは

脳波測定用のヘッドセット。PC、MACだけでなく、iOSとAndroidでも利用できる。MindWaveとそれらのプラットフォームはBluetoothによって接続する。単四電池で駆動。未加工の脳波、ローアルファ波、ハイアルファ波、ローベータ波、ハイベータ波、ローガンマ波、ハイガンマ波、デルタ波、シータ波を計測できる。また、NeuroSky社独自の規格による集中度、瞑想度、ゾーン度を計測できる。

#### MyndPlay Proとは

脳波データを計測するためのソフトウェア。PC、MACにて利用可能。リアルタイムで脳波データ、アルファ波、ベータ波、シータ波、デルタ波、ガンマ波を計測でき、それをディスプレイに表示できる。脳波データの保存が可能。基礎的な分析ツールが付属。映像の再生と、映像鑑賞中の脳波データを保存できる。データはCSV形式にてエクスポート可能。

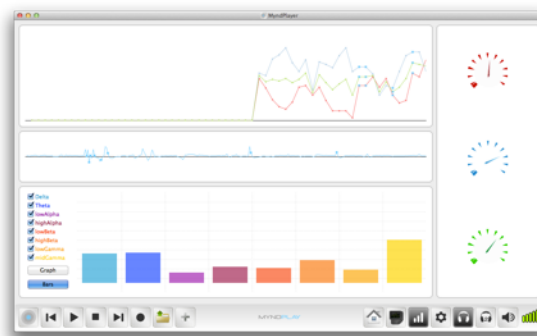


図1：MyndPlay Proの動作画面

#### Attentionとは

Attentionメーターは、直線的な集中度を示す。対象以外の要素を意識から除外する能力である。例えば一点を注視したり、一つのことを考えるときにAttentionメーターをコントロールすることができる。

#### Meditationとは

Meditationメーターは、瞑想度を図る。ストレスのない穏やかな精神の状態を示す。

Zoneとは

Zoneメーターは、どれだけゾーン状態であるかを図る。身体的集中度と精神の落ち着きが両立されていることを示す。感情の制御に必要なものであり、スポーツをしている時や意思決定を行う際に高くなる。

### 3-4、脳波計測実験被験者へのアンケート調査

上記の脳波計測実験の被験者に対し、実験実施直後にアンケート調査を行った。  
質問項目は以下の通りである。

- ・年齢
- ・舞台鑑賞の頻度
- ・印象に残ったシーンや感想

## 4、調査結果と分析

### 4-1、柴幸男、宮永琢生へのインタビュー調査から得た気づき

インタビューの終盤では、『わが星』のおもしろさはどこにあるのか、という話題になった。  
その中でこんなやり取りがあった。8-1、柴幸男、宮永琢生へのインタビュー調査に全文を掲載してある。

柴：音楽との同期性ということだと思います。それは単純にラップで言葉が同期してるというだけでもありますけど、ストーリー自体が同期しているので。音楽に。

石井：ええ。

柴：だから、すごくよく出来たPVを観ているようなものだと思うんですね。しかもそれは身体と音と、あと歌詞世界というか、言葉の世界観とかいわゆる戯曲がやっていた世界の同期と、音楽というか時間そのものと音楽の快感みたいなものが全部偶然にも一致して、波状で襲ってくるので。ある種の快感スイッチみたいなものが押されてると思います。脳波とか見た方がいいと思います。

意味と音楽のフレーズが100%ばっちり合わさりながら、長時間こっち側に来るとするのは、

石井：他でなかなかない体験。

柴：だと思います。僕自身そう思います。

(中略)

柴：僕は多分足りてないというか、誰もそこを言及してないと思う。音楽の同期性というか、快感とか。マジックとか。言葉のダンスみたいなものなので。『わが星』は。演劇のダンスと言ってもいいですけど。単純に何の音楽を同期すれば気持ちいいのかもよく分からない。不同期と同期の交互にくるだけで人は喜んじゃうと思いますけどね。ということは別にわざわざ分析しないですね。演劇評論家は。そんなことは誰も今後調べずに行くんだろうなと思うんですけど。

戯曲が作る世界に加えて、音楽がストーリーと一致することで快感を得ているのではないか。そのようなコメントを柴氏から頂いた。

また、脳波を調べることによって作品の魅力の本質を突き止められるのではないかという気づきを得ることができた。

#### 4-2、ストップウォッチを用いた実験と質的調査から得た気づき

以下が実験によって得られたタイムコードの一覧である。

##### 一人目

05:44 オープニングの中で日常の風景描写が行われるシーン。  
10:58 オープニング終わり  
26:51 ちいちゃんとおばあちゃんの会話  
41:46 ちいちゃんと月ちゃんのままと  
55:42 男の子が光速を超えようと試みるシーン。ベースが入るシーン。  
61:53 ちいちゃんとお姉ちゃんの会話  
80:24 ラストシーン。男の子が合流するシーン。

##### 二人目

00:57  
05:16 オープニング。立ち止まって手を叩くシーン。  
06:15 オープニング。照明がぐるぐる回るシーン。  
10:05 オープニング終わり  
25:26 ちいちゃんとおばあちゃんの会話  
44:09 ちいちゃんと月ちゃんのままと  
51:58 男の子が光速を超えようと試みるシーン  
79:03 ラストシーン。男の子が合流するシーン。

ストップウォッチを用いた実験において、二人の被験者に共通して見られた以下の傾向があった。

・オープニングシーン、ちいちゃんとおばあちゃんの会話のシーン、ちいちゃんと月ちゃんのままとのシーン、男の子が光速を超えようと試みるシーン、ラストシーン中男の子が合流するシーンの5つについては二人ともタイムコードを取っている。

・ちいちゃんとおばあちゃんの会話、ちいちゃんと月ちゃんのままとのシーンを除くと、他の全ては舞台上で音楽が鳴っている。その二つのシーンは時報のみ鳴っている。

また、作品鑑賞後に行った質的調査では、こんなやり取りがあった。8-2、ストップウォッチを用いた実験後の質的調査に全文を掲載してある。

B：ピッピッピっていう時報の音に合わせて、音が、ベースとかギターとかピアノとかシンセとか入ってくるのが、音が楽しくて、ライブ観てる感覚で。ずっと足でこうやって。

A：あはは。

B：下でこうやってリズムとりながら観てて。

B：さっきちょろっと喋って、彼女が泣いたって言ってて。

A：へへへ。

B：逆に、泣く要素を感じなくて。すごい最後に死んでいっちゃうとか、月ちゃんの手紙とかが感動的なのは分かるんですけど、リズムに合わせてセリフ言ったりとか、本当に演劇よりもライブに近い感覚で、ノリ

ノリになっちゃって楽しくなっちゃって。これすごい楽しい、って思って観ていたので、あまり泣くって感じじゃなかったです。感動的だなとは思ってたけど、泣かなかった。

以上から、物語の中で音楽が効果的に使用されているシーンにおいて興奮や感動が生まれているのではないかと考えることができる。

一方で、この手法では被験者が強く感動したシーンのみを抽出できるに過ぎず、被験者も自覚することができない反応まで調査する必要性を痛感した。

#### 4-3、脳波計測実験の結果

全てのグラフは8-3、脳波計測実験のグラフを参照のこと。

ただし、被験者Dの0～500秒のデータ、被験者Hの4600～5200秒のデータには欠損が認められるため、考察から除外する。また、映像開始と同時にデータを計測しており、作品終了時以降のデータは考察に含めない。この場合、5056秒以降のデータがそれに当たる。

##### 4-3-1、被験者別に見た脳波の特徴

被験者別に脳波の特徴を見る。実験によって得られた脳波をグラフ化し、数値が大きく変動した部分に着目すると、以下のような結果が得られる。数値が大きく変動した部分に矢印を書き入れている。

被験者AのAttention、Meditation、Zone

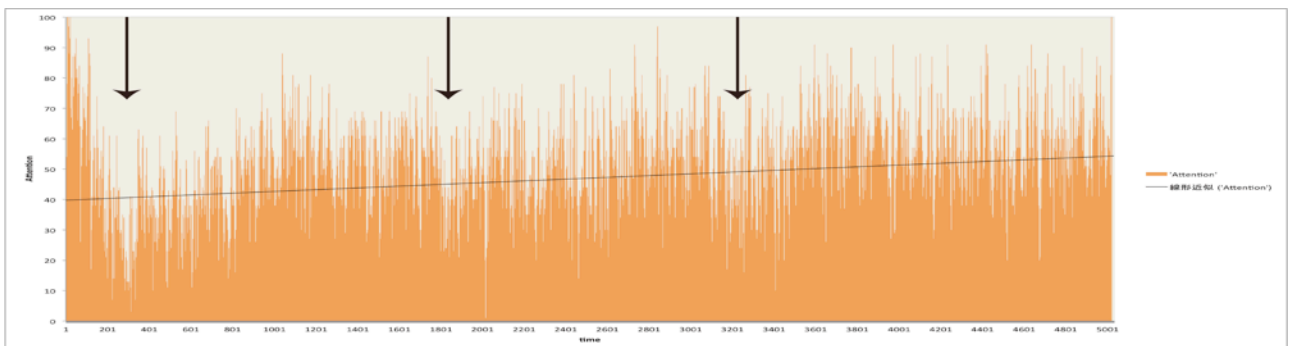


図2：被験者AのAttention、数値の変動

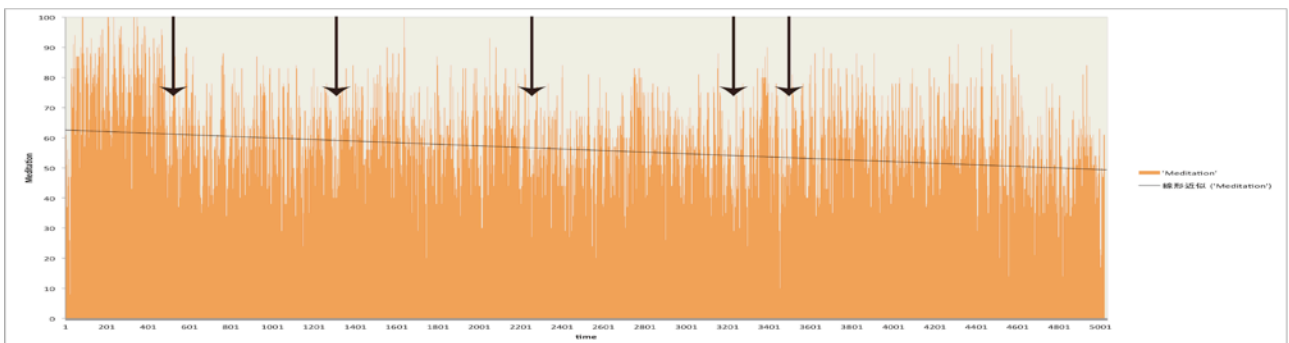


図3：被験者AのMeditation、数値の変動

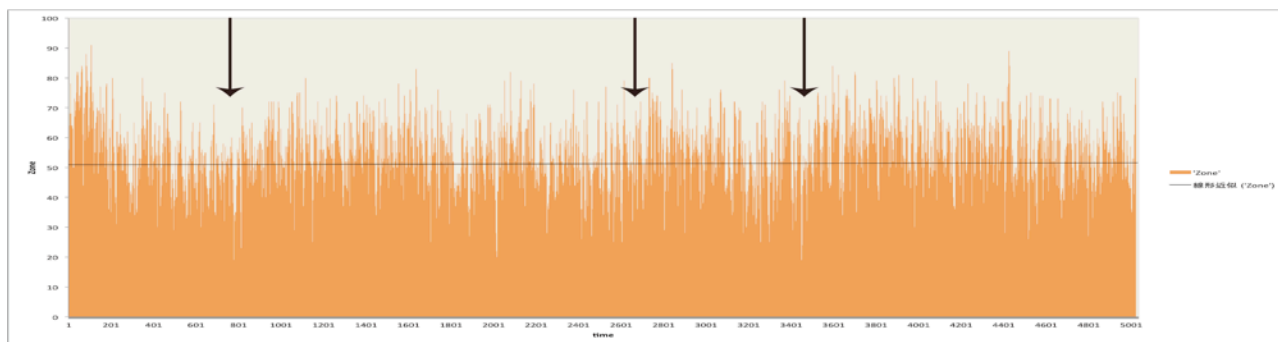


図4：被験者AのZone、数値の変動

被験者BのAttention、Meditation、Zone

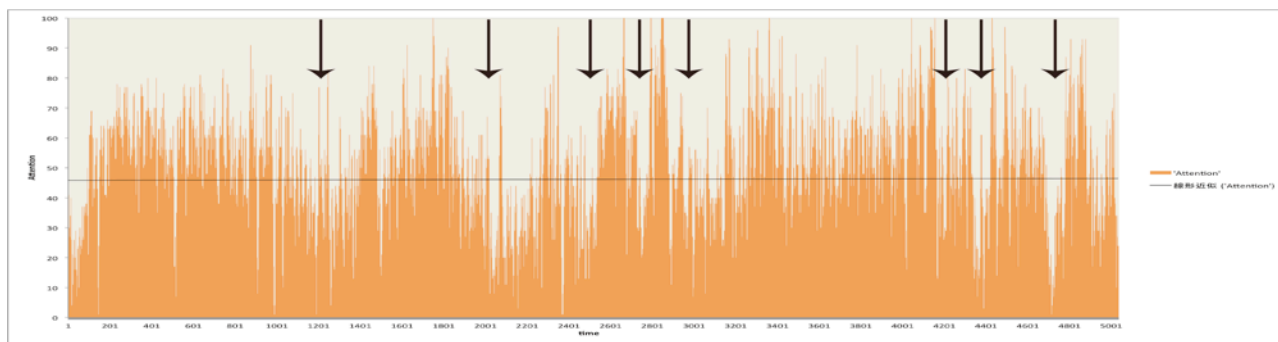


図5：被験者BのAttention、数値の変動

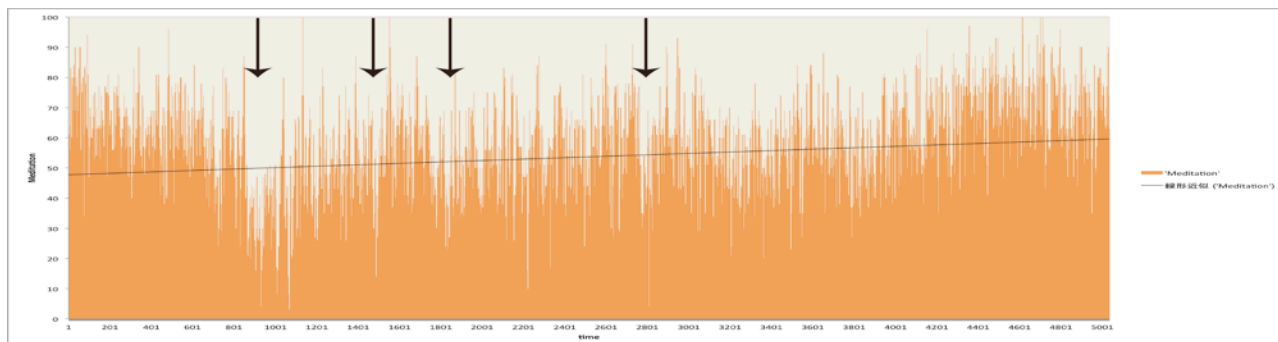


図6：被験者BのMeditation、数値の変動

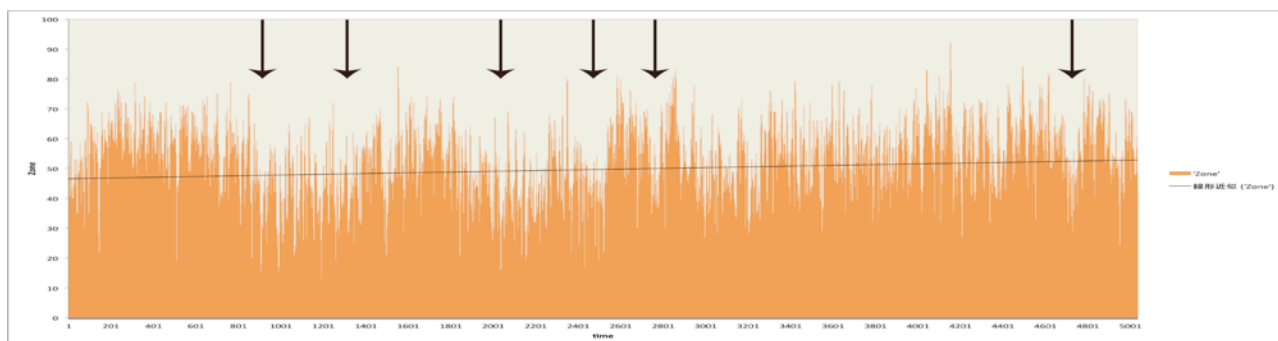


図7：被験者BのZone、数値の変動

## 被験者CのAttention、Meditation、Zone

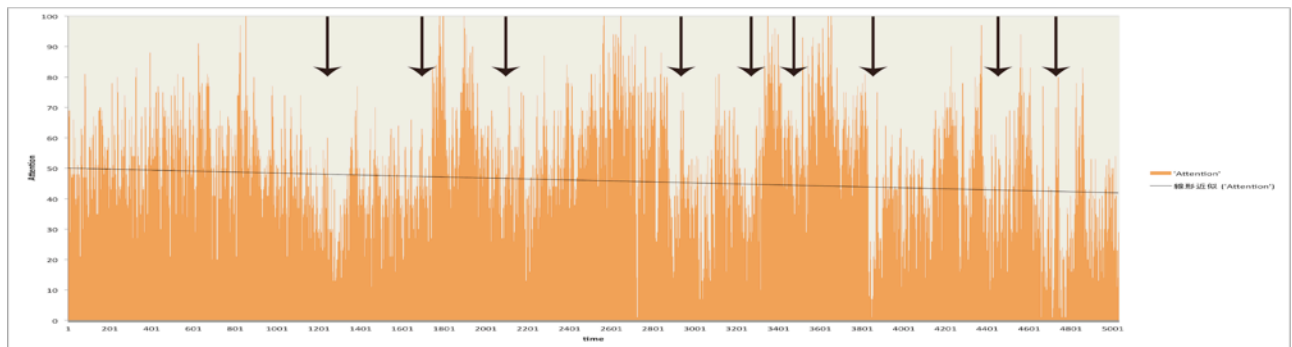


図8：被験者CのAttention、数値の変動

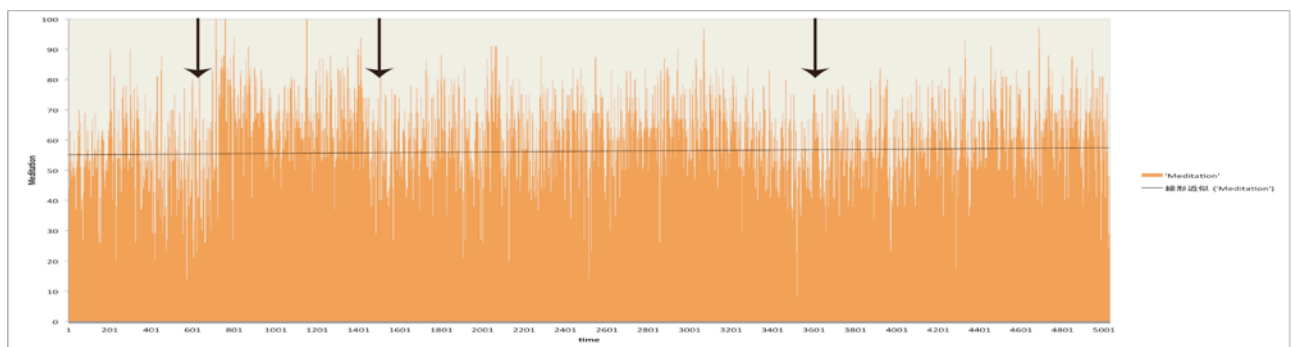


図9：被験者CのMeditation、数値の変動

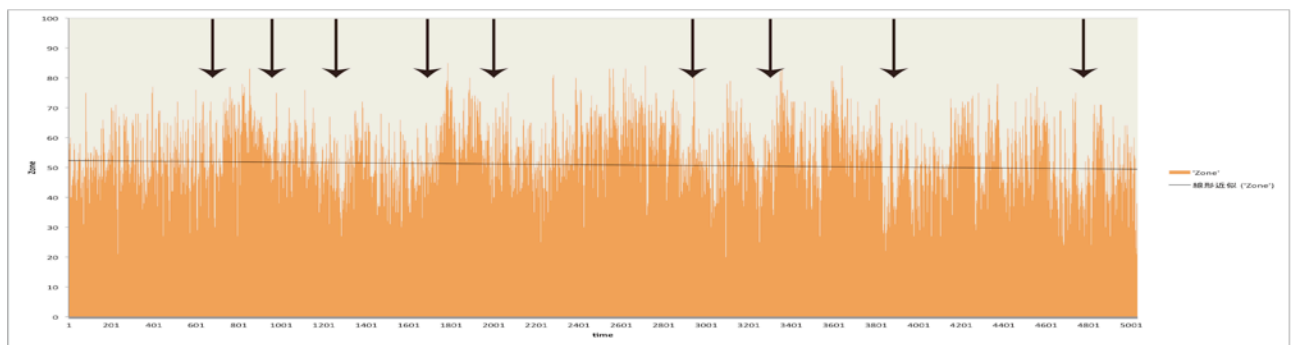


図10：被験者CのZone、数値の変動

## 被験者DのAttention、Meditation、Zone

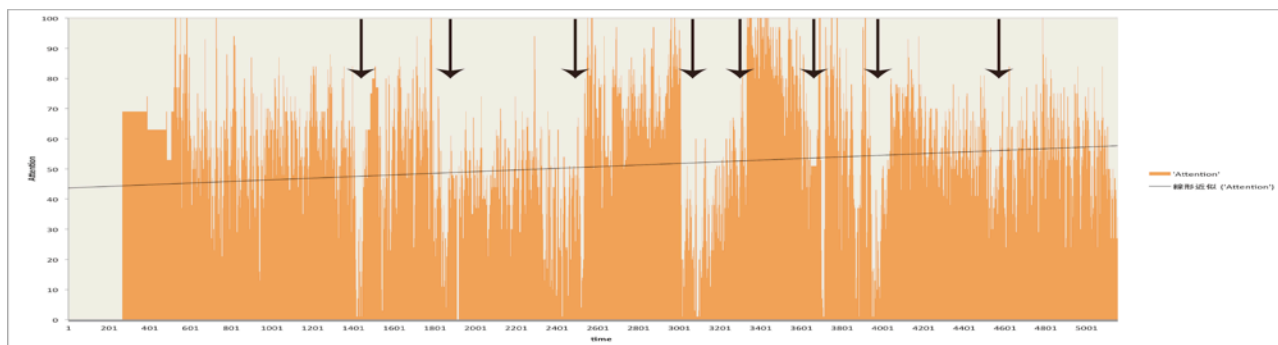


図11：被験者DのAttention、数値の変動

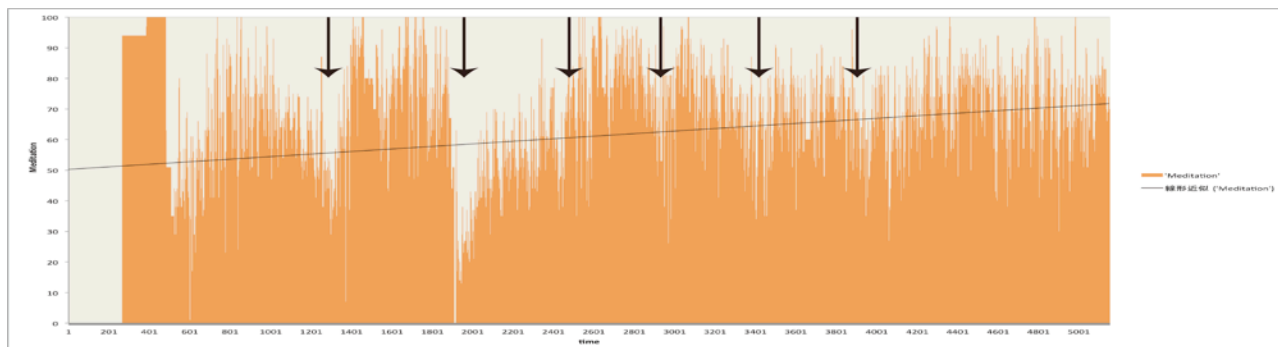


図12：被験者DのMeditation、数値の変動

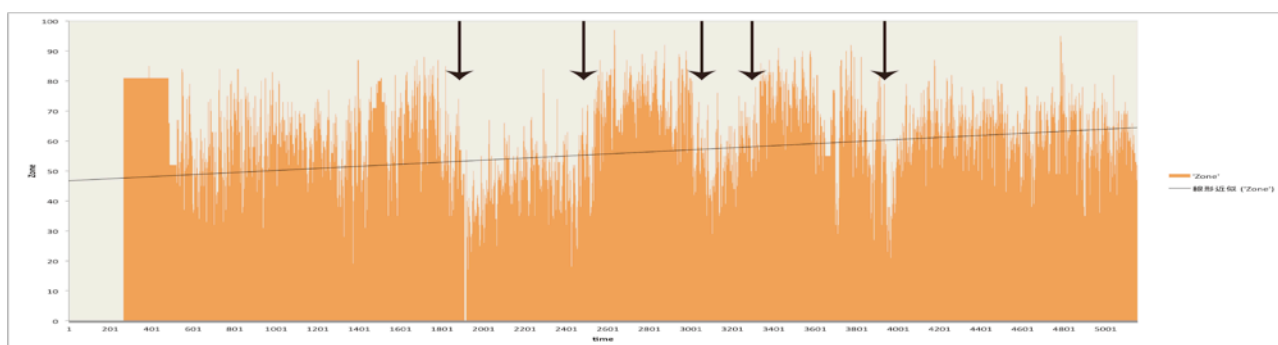


図13：被験者DのZone、数値の変動

被験者EのAttention、Meditation、Zone

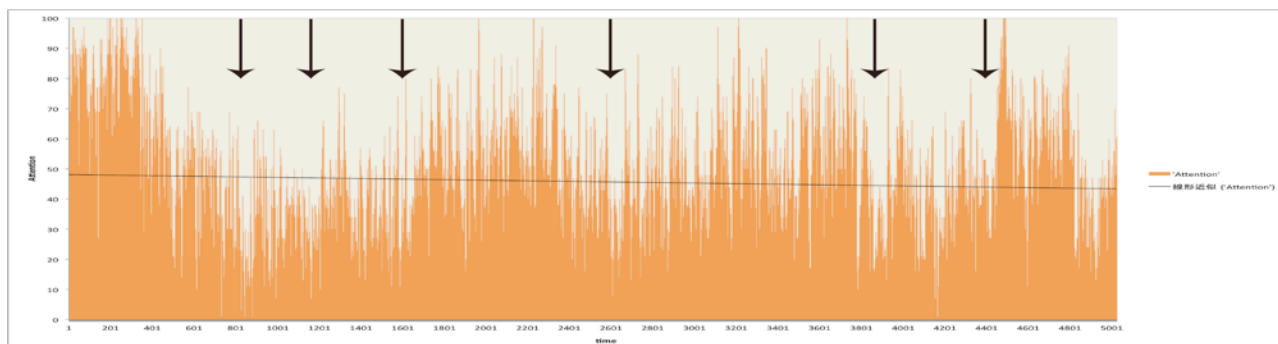


図14：被験者EのAttention、数値の変動

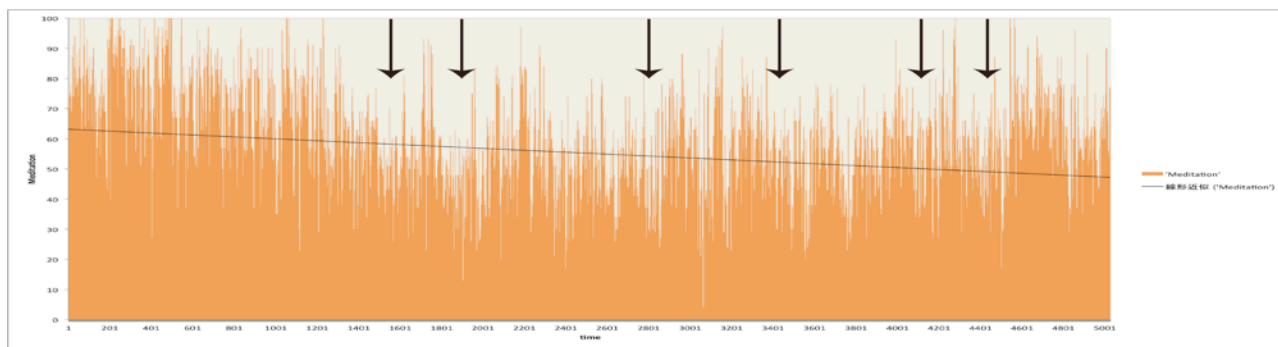


図15：被験者EのMeditation、数値の変動

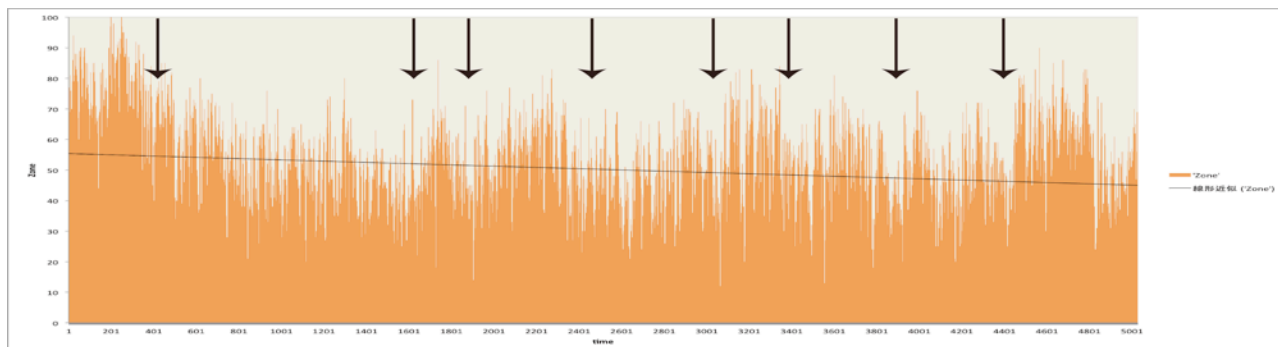


図16：被験者EのZone、数値の変動

被験者FのAttention、Meditation、Zone

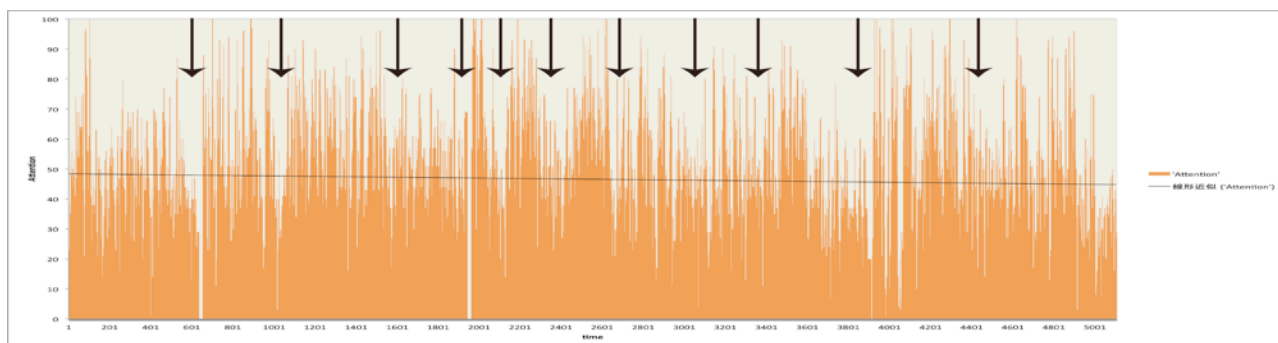


図17：被験者FのAttention、数値の変動

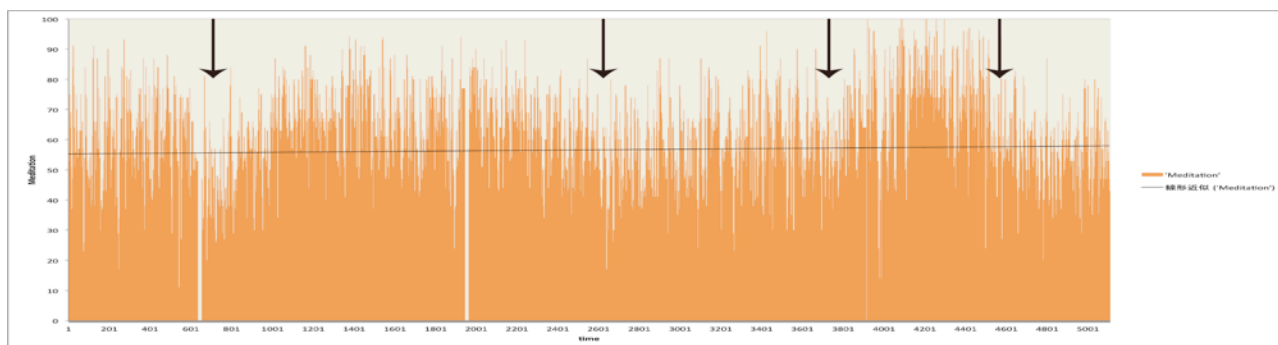


図18：被験者FのMeditation、数値の変動



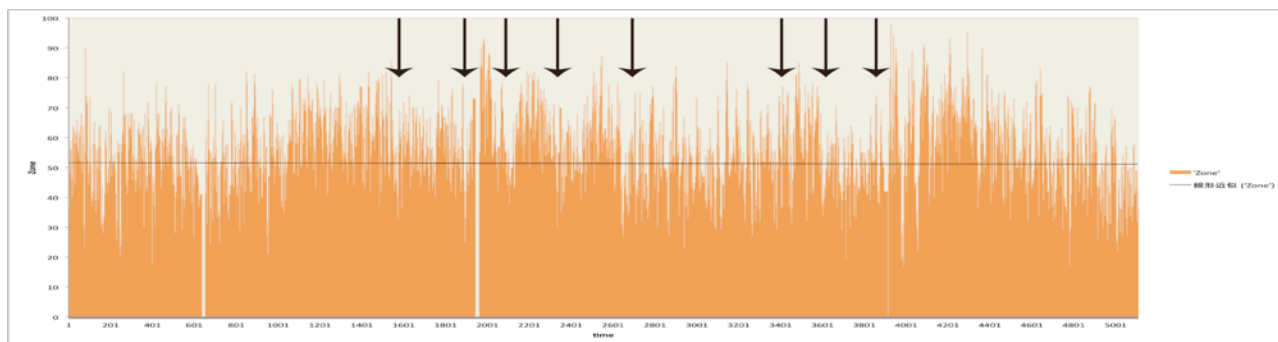


図19：被験者FのZone、数値の変動

被験者GのAttention、Meditation、Zone

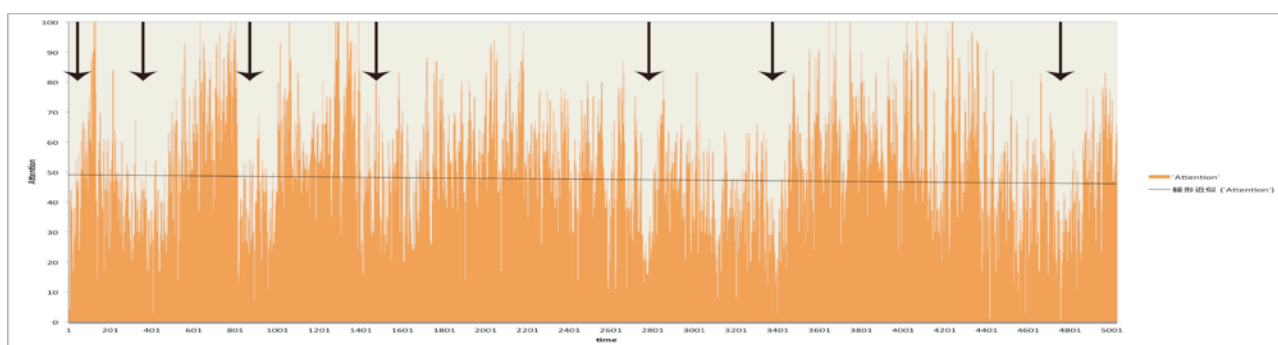


図20：被験者GのAttention、数値の変動

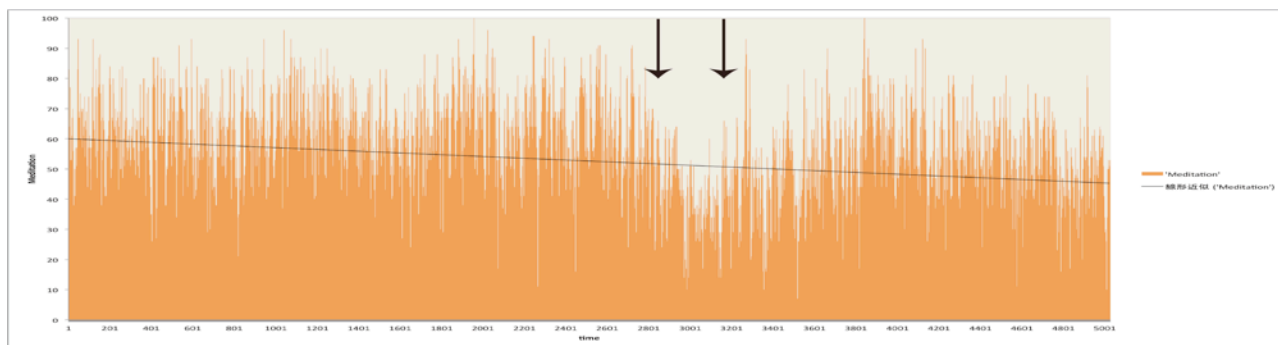


図21：被験者GのMeditation、数値の変動

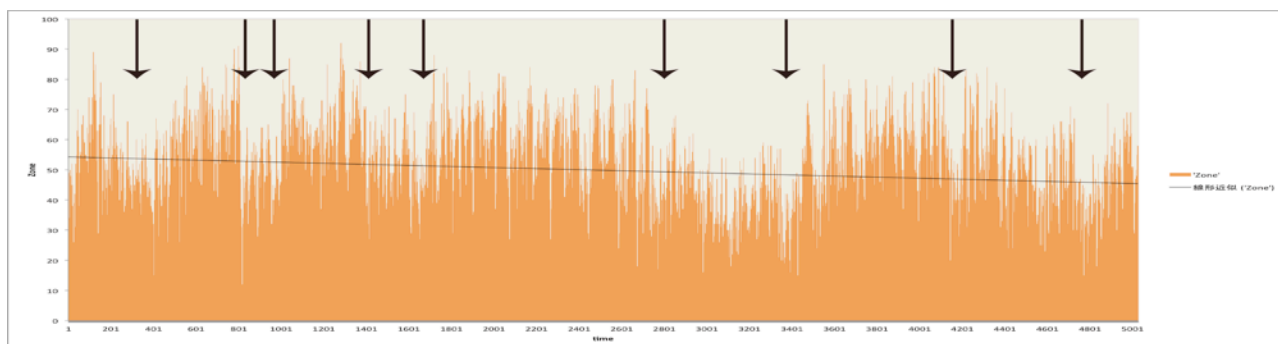


図22：被験者GのZone、数値の変動

## 被験者HのAttention、Meditation、Zone

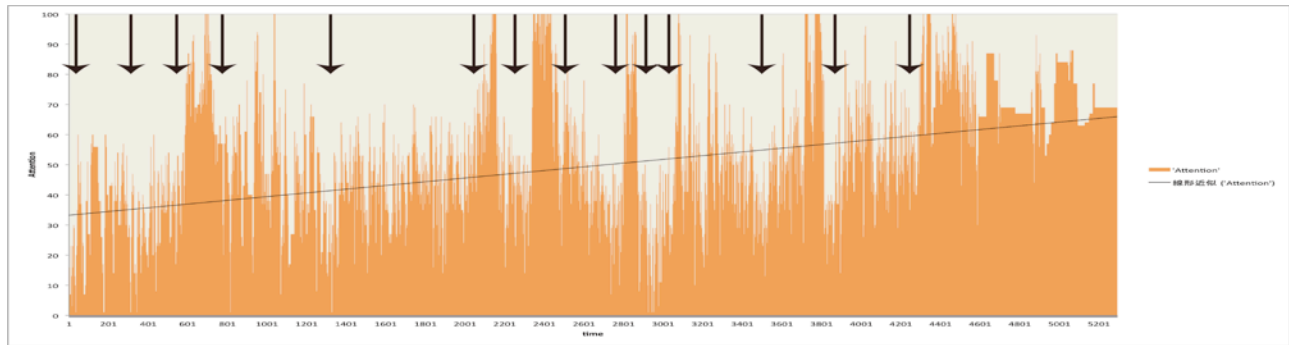


図23：被験者HのAttention、数値の変動

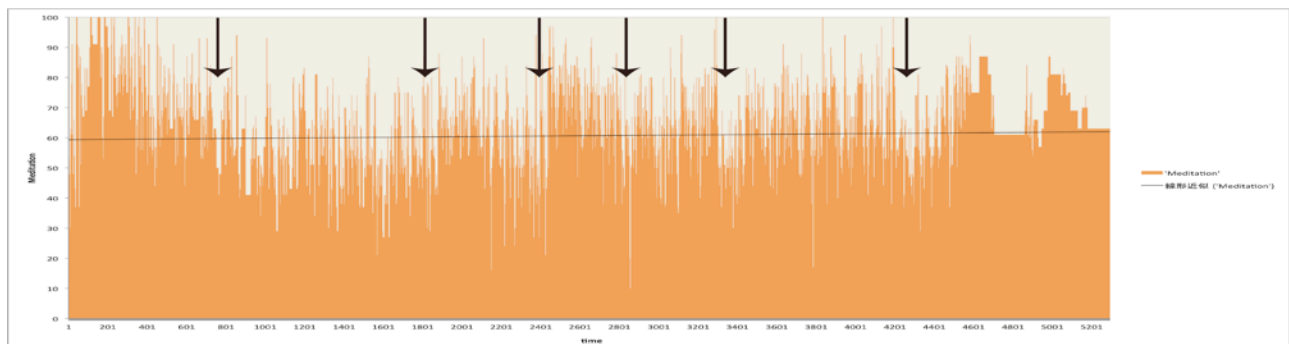


図24：被験者HのMeditation、数値の変動

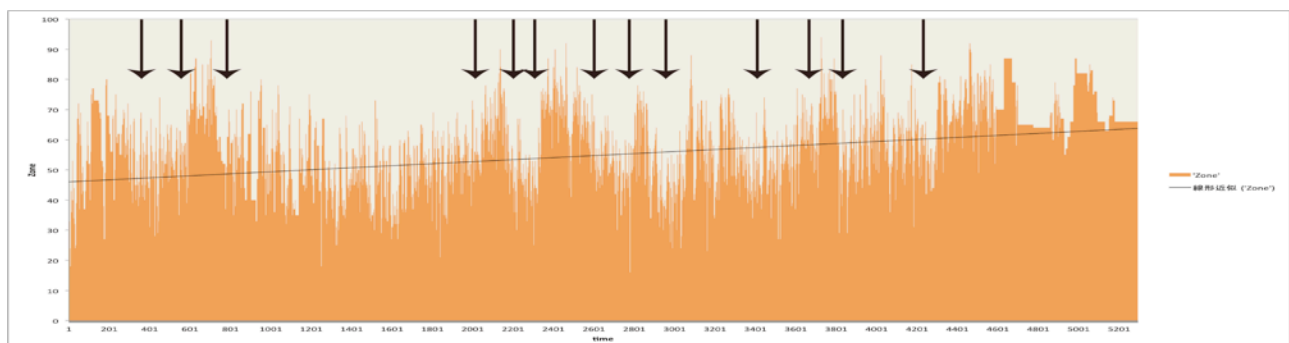


図25：被験者HのZone、数値の変動

被験者AのAttentionは、200秒ごろから低くなり初め、300秒ごろから急速に高くなる。その後緩やかに高くなった後、1800秒ごろ一度低くなる。その後緩やかに高くなり、3200秒ごろに低くなる。（図2）

最初の盛り上がり落ち着くのがオープニングの途中。そこから少しずつ集中度が増加する。次に集中度が低下するのは、引越しのシーンである。また少しずつ集中度が増加する。次に集中度が低下するのは先生が光速を超える方法を男の子に教える、連続したシーンである。

Meditationは、500秒ごろに低くなり、1400秒ごろ高くなる。2200秒ごろに低くなり、緩やかに高くなった後、3200秒ごろに低くなる。その後急速に高くなり、3600秒ごろ一度低くなる。その後は緩やかな変化が続く。（図3）

瞑想度が最初に低くなるのはオープニング途中のちいちゃんと母の会話のシーンである。ここは本編開始後初めて時報以外の音がなくなる箇所である。その後、瞑想度は繰り返される家族の会話のシーンで高くなる。これが月ちゃんとちいちゃんの最初のままごとのシーンで低くなる。その後緩やかに瞑想度が上がるが、先生が光速を超える方法を男の子に教えるシーンで低くなる。その後瞑想度が上がる。ちいちゃんとお姉さんの会話、お姉さんの独白のシーンで瞑想度が下がる。

Zoneは、最初の高まりが600秒から800秒ごろに収まり、緩やかな変化が続く。2800秒ごろ急速な高まりを見せ、3500秒ごろに一度低くなる。以降は緩やかな変化である。（図4）

ゾーン度はオープニングの終わりとともに低下し、緩やかに変化する。男の子がちいちゃんに会いに行くことを決意するシーンで急速に高まる。最後の家族の会話のシーンで一度低くなる。

被験者BのAttentionは、100秒ごろに高まった後、1200秒ごろに低くなる。1400秒ごろに急速に高くなった後、1900秒ごろに急速に低くなる。2200秒ごろに一度高くなった後、2400秒ごろに急速に低くなる。2500秒ごろに急速に高くなり、2700秒ごろに一度低くなった後に再び高くなる。2900秒ごろに数値が低くなり、3200秒ごろに高くなる。緩やかな変化が続き、4200秒ごろから急速に下がり、4400秒ごろから再び高くなる。4800秒ごろに一度急速に下がり、その後高くなる。（図5）

最初に集中度が高まるのは最初の明転の前、暗転の中で出演者が会話するシーンである。繰り返される家族の会話のシーンで集中度が低くなる。音楽が流れてラップが始まるシーンで急速に高くなる。月ちゃんとちいちゃんの出会いのシーンで急速に低くなる。月ちゃんとちいちゃんのままごとのシーンが始まると、集中度が高くなる。月ちゃんとちいちゃんが人生に関するままごとをするシーンで集中度が急速に下がるが、再び急速に高くなる。月ちゃんが死ぬシーンで一度集中度が下がり、ままごとが終わると再び高くなる。家庭訪問のシーンで集中度が下がる。先生が男の子に光速を超える方法を教えるシーンで集中度が上がる。月ちゃんの手紙のシーンで急速に集中度が下がる。最後の家族の会話のシーンで再び高くなる。ラストシーン、皆で歌を歌うシーンで集中度が急速に下がる。

Meditationは、最初の高まりが低くなるのが900秒ごろ。その後徐々に高くなるが、1800秒ごろに低くなる。その後は緩やかに高くなり、2800秒ごろに一度低くなる。その後は緩やかに上昇していく。（図6）

瞑想度が最初に下がるのは、オープニングシーンが終わって家族のシーンに移行する箇所である。引越しのシーンで瞑想度が低くなる。その後緩やかに瞑想度が上がるが、「でも、もし」のシーンで低くなる。

Zoneは、100秒ごろに最初の高まりを見せ、900秒ごろに低くなる。1300秒ごろから高くなり、1900秒ごろに低くなる。2400秒ごろに急速に高くなるが、2700秒ごろに一度低くなり、直後に再び高くなる。その後緩やかに上昇していくが、4700秒ごろに一度低くなり、直後に急速に高くなる。（図7）

最初にゾーン度が高くなるのは最初の明転の前、暗転の中で出演者が会話するシーンである。男の子と先生の会話の後、最初の家族の会話のシーンで低くなる。家族の会話が繰り返される中で高くなり、月ちゃんとちいちゃんの出会いのシーンで低くなる。月ちゃんとちいちゃんのままごとのシーンの中で急速に高くなる。月ちゃんが死ぬシーンで一度低くなり、ままごとが終わるとともに高くなる。最後の家族の会話のシーンで一度低くなるが、直後の先生とちいちゃんの電話のシーンで急速に高くなる。

被験者CのAttentionは、1000秒ごろから低くなり始め、1200秒ごろに急速に上昇傾向になる。1800秒ごろに急速に高くなり、2000秒ごろに急速に低くなる。その後緩やかに高くなった後、2900秒ごろに急速に低くなる。3300秒ごろから急速に高くなるが、3500秒ごろに一度低くなる。3800秒ごろに急速に低くなり、

4200秒ごろから少しずつ高くなるが、4400秒ごろに一度低くなり、4700秒ごろに急速に低くなる。(図8)

最初の家族の会話のシーンから集中度が下がり始める。二回目の家族の会話のシーンから上昇傾向になる。引越しのシーンで急速に高くなる。月ちゃんとちいちゃんの出会いのシーンで急速に低くなる。その後緩やかに上昇した後、家庭訪問のシーンで急速に低くなる。男の子が光速を超えるシーン、時報の音が四分の一になるころに急速に高くなるが、ちいちゃんとお姉ちゃんの会話のシーンで一度低くなる。お父さんとお母さんの会話のシーンで急速に低くなる。月ちゃんの手紙のシーンから高くなるが、最後の家族の会話のシーンで一度低くなる。ラストシーンの途中から急速に低くなる。

Meditationは、700秒ごろから急速に高くなり、1600秒ごろに一度低くなる。その後緩やかな変化が続く、3600秒ごろに少し低くなる。その後は緩やかに上昇する。(図9)

瞑想度はオープニングシーンの終わりとともに高くなり始め、おばあちゃんが死について語るシーンで低くなる。その後緩やかに変化し、ちいちゃんとお姉ちゃんが会話するシーンで少し低くなる。

Zoneは、800秒ごろに高くなる。1000秒ごろに低くなり、1300秒ごろに一度高くなる。その後低くなるが、1800秒ごろに急速に高くなる。2000秒ごろに低くなるが、その後は緩やかに高くなる。2900秒ごろに一度低くなる。3400秒ごろに急速に高くなり、3500秒ごろ一度低くなるが直後に高くなる。3900秒ごろに急速に低くなり、4800秒ごろに一度低くなる。(図10)

最初の家族の会話のシーンが始まる箇所でゾーン度が高くなる。家族の会話の中で低くなり、自転のシーンで一度高くなる。その後低くなるが、引越しのシーンで急速に高くなる。月ちゃんとちいちゃんの出会いのシーンで一度低くなり、その後緩やかに高くなる。家庭訪問のシーンで一度低くなる。男の子が光速を超えるシーンで急速に高くなる。ちいちゃんとお姉さんの会話のシーンで一度低くなるが直後に高くなる。お父さんとお母さんの会話のシーンで急速に低くなる。輪から一人ずつ抜け、男の子とちいちゃんが残るシーンでまた低くなる。

被験者DのAttentionは、1400秒ごろにごく短い間急速に低くなるが、直後に高くなる。1800秒ごろに急速に低くなり、緩やかな変化が続いた後に、2600秒ごろに急速に高くなる。再び緩やかな変化が続いた後、3000秒ごろに急速に低くなる。その後上昇傾向を見せ、3400秒ごろに急速に高くなる。3700秒ごろに急速に低くなるが、直後に高くなる。4000秒ごろに急速に低くなり、直後に高くなる。その後緩やかな変化が続くが、4600秒ごろに一度低くなる。(図11)

集中度は家族のラップのシーンでごく短い間急速に低くなるが、直後に高くなる。引越しのシーンで急速に低くなり、緩やかに変化した後、月ちゃんが死ぬシーンで急速に高くなる。緩やかに変化した後、家庭訪問から男の子と先生の会話の辺りで急速に低くなる。その後上昇し、男の子が光速を超えるシーンで急速に高くなる。お姉さんの独白で急速に低くなるが、直後に高くなる。お父さんとお母さんの会話が終わると急速に低くなるが、直後に高くなる。緩やかな変化が続く、ラストシーンの途中で一度低くなる。

Meditationは、1400秒ごろに急速に高くなる。その後1900秒ごろに急速に低くなる。緩やかに上昇した後、2500秒ごろに急速に高くなる。3000秒ごろに一度低くなり、再び高くなる。3200秒ごろに一度低くなり、3400秒ごろに高くなる。3900秒ごろに再び低くなるが、直後に高くなる。(図12)

瞑想度は、二回目の家族の会話の中で急速に高くなる。月ちゃんとちいちゃんの出会いのシーンで急速に低くなる。緩やかに高くなり、月ちゃんとちいちゃんのままとのシーンで急速に高くなる。家庭訪問の後、先生と男の子の会話のシーンで一度低くなるが、再び高くなる。先生が光速を超える方法を伝えるシーンで

一度低くなり、男の子が光速を超えるシーンで高くなる。お父さんとお母さんの会話のシーンで低くなり、直後に高くなる。

Zoneは、最初の高まりが1900秒ごろに低くなる。緩やかな変化が続き、2600秒ごろに急速に高くなる。3000秒ごろに一度低くなるが、3400秒ごろに再び高くなる。4000秒ごろに一度急速に低くなる。（図13）

ゾーン度が最初に低くなるのが月ちゃんとちいちゃんの出会いのシーン。月ちゃんが死ぬシーンで急速に高くなる。家庭訪問の後、先生と男の子の会話のシーンで一度低くなる。男の子が光速を超えるシーンで高くなる。お父さんとお母さんの会話のシーンの後、急速に低くなる。

被験者EのAttentionは、最初の高まりが500秒ごろから低くなっていく。800秒ごろに最も低くなり、1300秒ごろに急速に高くなる。一度低くなるものの、1700秒ごろに急速に高くなる。2600秒ごろに一度低くなり、再び上昇傾向である。その後3900秒ごろに一度低くなり、4400秒ごろに急速に高まる。（図14）

集中度はオープニングの途中、ちいちゃんとお母さんの会話の箇所から低くなっていく。先生と男の子の最初の会話で最も低くなる。照明が渦を巻く公転のシーンで急速に高くなる。一度低くなり、お婆ちゃんが死について語るシーンで急速に高くなる。月ちゃんが死ぬシーンで集中度が下がり、その後上昇傾向である。お父さんとお母さんの会話のシーンで一度低くなり、最後の家族の会話のシーンで急速に高くなる。

Meditationは、最初の高まりが1600秒ごろに一度落ち着く。その後2100秒ごろに高くなり、2800秒ごろに再び高くなる。3400秒ごろに一度低くなる。その後緩やかな変化が続く。4300秒ごろに一度急速に高くなる。4600秒ごろに再び急速に高くなる。（図15）

瞑想度は最初の高まりが落ち着くのが、お婆ちゃんが死について語るシーン。月ちゃんとちいちゃんのままごとのシーンで高くなり、その後の先生と男の子のシーンでさらに高くなる。男の子が光速を超えるシーンで一度低くなる。その後緩やかに変化し、月ちゃんの手紙のシーンで急速に高くなる。ラストシーンの途中でさらに急速に高くなる。

Zoneは、500秒ごろに低くなる。緩やかに低くなり、1600秒ごろに高くなる。1900秒ごろに一度低くなり、再び高くなる。2300秒ごろに低くなり、緩やかな変化が続いた後、3100秒ごろに高くなる。3400秒ごろに一度低くなる。4500秒ごろに急速に高くなる。（図16）

ゾーン度が最初に低くなるのは、オープニングの途中、ちいちゃんとお母さんが会話するシーンである。その後緩やかに低くなり、お婆ちゃんが死について語るシーンで高くなる。月ちゃんとちいちゃんの出会いのシーンで一度低くなり、直後に高くなる。月ちゃんとちいちゃんのままごとのシーンの序盤で低くなり、緩やかに変化する。先生が男の子に光速を超える方法を伝えるシーンで高くなる。男の子が光速を超えるシーンで低くなる。ラストシーンで急速に高くなる。

被験者FのAttentionは、600秒ごろに一度低くなる。その後高くなるが、1000秒ごろに再び低くなる。直後に高くなり、1600秒ごろに低くなる。1900秒ごろに急速に高くなる。2100秒ごろに一度低くなり、2300秒ごろに再び低くなる。2500秒ごろから上昇傾向を見せる。3100秒ごろに低くなる。3500秒ごろに高くなり、3700秒ごろに低くなる。3900秒ごろに急速に高くなる。（図17）

集中度は、オープニングの終わりとともに一度低くなる。その後高くなるが、最初の家族のシーンで低くなる。直後に高くなり、お婆ちゃんが死について語るシーンで低くなる。月ちゃんとちいちゃんの出会いのシ

ーンで急速に高くなる。月ちゃんとちいちゃんのままごとのシーンで一度低くなり、ままごとの中でさらに低くなる。二人のままごとの終盤から上昇傾向になる。家庭訪問の後の先生と男の子の会話のシーンで低くなる。男の子が光速を超えるシーンの終わりに高くなり、お姉さんの独白のシーンで低くなる。お父さんとお母さんの会話のシーンで急速に高くなる。

Meditationは、最初の高まりが600秒ごろに一度低くなる。直後から上昇傾向である。緩やかな変化が続き、3700秒ごろから急速に高まり、4600秒ごろに低くなる。（図18）

瞑想度は、最初の高まりがオープニングの終わりとともに一度低くなる。直後から上昇傾向になる。緩やかに変化した後、お姉さんの独白のシーンから急速に高まり、ラストシーンで低くなる。

Zoneは、1600秒ごろに一度低くなる。1900秒ごろに急速に高くなり、2100秒ごろに急速に低くなる。2200秒ごろに再び上昇し、2400秒ごろに低くなり、2600秒ごろに高くなる。3700秒ごろに急速に低くなり、3900秒ごろから急速に高くなる。その後は緩やかに低くなる。（図19）

ゾーン度が最初に低くなるのは、お婆ちゃんが死について語るシーン。月ちゃんとちいちゃんの出会いのシーンで急速に高くなり、月ちゃんとちいちゃんのままごとと序盤で急速に低くなる。二人の最初のままごとが終わると上昇し、人生についてのままごとの途中で低くなり、月ちゃんが死ぬシーンで高くなる。ちいちゃんとお姉さんの会話のシーンで急速に低くなり、お父さんとお母さんの会話のシーンで急速に高くなる。

被験者GのAttentionは、100秒ごろから高まりを見せ、300秒ごろに低くなる。500秒ごろから急速に高くなり、900秒ごろに急速に低くなる。1100秒ごろから急速に高くなり、1500秒ごろに低くなる。2800秒ごろに一度低くなる。3400秒ごろに急速に高くなり、4700秒ごろに一度低くなる。その後は上昇傾向である。（図20）

集中度はオープニングの明転とともに高まりを見せ、途中で一度低くなるものの、オープニング終盤、照明が赤くなる箇所では急速に高くなる。最初の家族の会話のシーンで急速に低くなる。二回目の家族の会話のシーンで急速に高くなり、お婆ちゃんが死について語るシーンで低くなる。月ちゃんとちいちゃんのままごとが終わりと、先生と男の子が会話するシーンで一度低くなる。男の子が光速を超えるシーンで急速に高くなる。ラストシーンの途中（男の子到着前）で一度低くなり、以降上昇傾向である。

Meditationは、非常に緩やかな変化である。2800秒から3000秒ごろに低くなるが、3200秒ごろから再び高くなる。（図21）

瞑想度は非常に緩やかに変化している。月ちゃんとちいちゃんの会話の後、先生と男の子の会話のシーンで一度低くなるが、先生が男の子に光速を超える方法を伝えるシーンから再び高くなる。

Zoneは、100秒ごろから高まりを見せ、300秒ごろに低くなる。500秒ごろから急速に高くなり、800秒ごろに急速に低くなる。1000秒ごろに急速に高くなる。1400秒ごろに低くなり、1700秒ごろに高くなる。緩やかな変化が続き、2800秒ごろに低くなる。3400秒ごろに高くなる。4200秒ごろに一度低くなる。4800秒ごろに急速に低くなり、その後は上昇傾向である。（図22）

ゾーン度はオープニングの明転後から高くなる。途中で一度低くなるものの、オープニング終盤、照明が赤くなる箇所では急速に高くなる。先生と男の子の最初の会話のシーンで急速に低くなる。最初の家族の会話のシーンで急速に高くなる。家族のラップのシーンで低くなり、お婆ちゃんが死について語るシーンで高くなる。緩やかに変化し、月ちゃんとちいちゃんのままごとのシーン終盤で低くなる。男の子が光速を超えるシ

ーンで高くなる。最後の月ちゃんとの会話の始まりに低くなる。ラストシーン終盤、輪から一人ずつ抜けていくところで急速に低くなる。以降は上昇傾向である。

被験者HのAttentionは、開始直後から高くなり、400秒ごろに低くなる。600秒ごろに急速に高くなるが、800秒ごろに急速に低くなる。1300秒ごろに低くなる。2000秒ごろに急速に高くなった後に、2300秒ごろに急速に低くなる。2400秒ごろに急速に高くなり2600秒ごろに急速に低くなる。2800秒ごろに急速に高くなる。2900秒ごろに急速に低くなり、3100秒ごろから高くなる。3700秒ごろに急速に高くなった後、3900秒ごろに急速に低くなる。4400秒ごろから急速に高くなる。(図23)

集中度は最初の高まりが低くなるのが、オープニング中盤、青い渦巻きの照明で時報のみ鳴っているシーン。オープニングの終わりに急速に高くなるが、最初の先生と男の子の会話で急速に低くなる。最初の家族の会話のシーンで低くなる。月ちゃんとちいちゃんのままごと序盤に急速に高くなり、二人のままとの中盤(タイムカプセルを埋めるシーン辺り)に急速に低くなる。連続したままとのシーンで急速に高くなり、月ちゃんが死ぬシーンで急速に低くなる。ままとの後の先生と男の子の会話のシーンで急速に高くなる。家庭訪問のシーンで急速に低くなり、先生が光速の超え方を男の子に教えるシーンで高くなる。お姉さんの独白のシーンで急速に高くなった後、お父さんとお母さんの会話のシーンで急速に低くなる。最後の家族の会話のシーンから急速に高くなる。

Meditationは、最初の高まりが900秒ごろに落ち着く。1800秒ごろに高くなる。2400秒ごろに高くなり、緩やかな変化が続き、3400秒ごろに一度低くなる。4400秒ごろに再度低くなる。(図24)

瞑想度が最初に落ち着くのは、オープニングの後、最初の家族のシーンである。引越しのシーンで高くなる。月ちゃんとちいちゃんの連続したままとのシーンで高くなり、緩やかに変化する。男の子が光速を超えるシーンで一度低くなる。最後の家族の会話のシーンで再度低くなる。

Zoneは、開始直後から高くなり、最初の高まりが400秒ごろに低くなる。600秒ごろに急速に高くなり、800秒ごろに急速に低くなる。緩やかな変化が続き、2100秒ごろに高くなる。2200秒ごろに一度低くなり、2300秒ごろに急速に高くなる。2600秒ごろから低くなり、2800秒ごろに急速に高くなる。一度低くなった後、3100秒ごろ高くなる。3800秒ごろに高くなり、緩やかな変化が続く。(図25)

ゾーン度は開始直後から高くなり、オープニング中盤、青い渦巻きの照明で時報のみ鳴っているシーンに低くなる。オープニングが終わると急速に高くなる。最初の家族のシーンで急速に低くなる。緩やかに変化し、月ちゃんとちいちゃんのままとのシーン序盤で高くなる。最初の高まりが終わると一度低くなり、人生に関するままとが始まると急速に高くなる。ままと終盤、月ちゃんが死ぬシーンから低くなり、ままと終わり、先生と男の子が会話するシーンで急速に高くなる。一度低くなるが、男の子が光速を超えるシーンで高くなる。お父さんとお母さんの会話のシーンでさらに高くなり、以降緩やかに変化する。

#### 4-3-2、被験者に共通して見られた特徴

次に、多くの被験者に共通して見られた傾向を挙げる。

上昇傾向と下降傾向に注目すると、ほぼ全ての被験者のAttention、Meditation、Zoneのグラフにおいて、データのまとまりが4つから5つできている。

被験者AのAttention、Meditation、Zone、データのまとまり

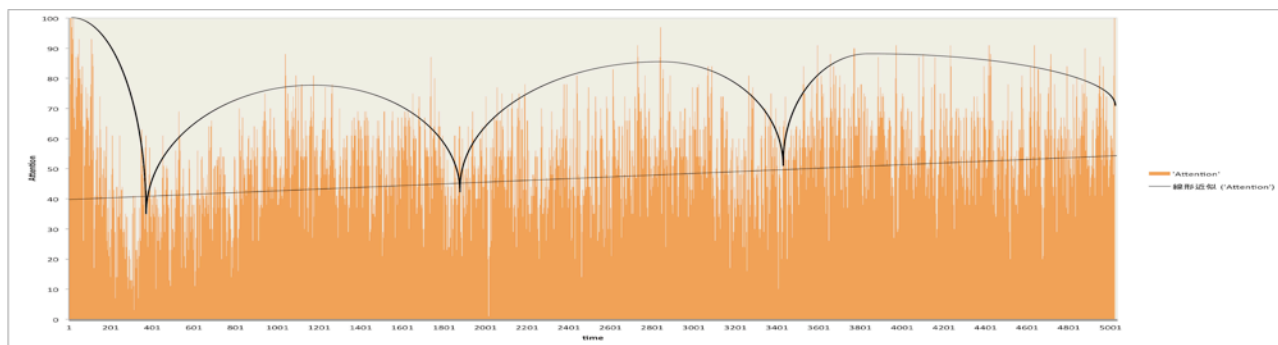


図26：被験者AのAttention、データのまとまり

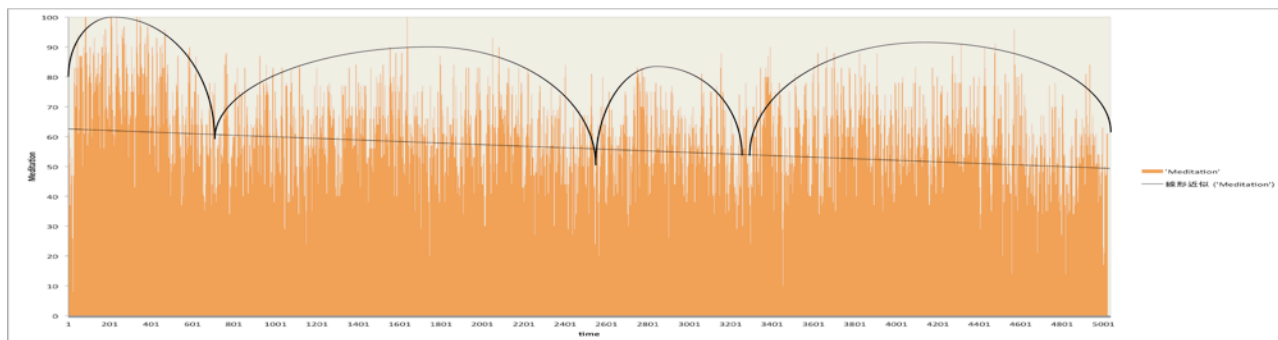


図27：被験者AのMeditation、データのまとまり

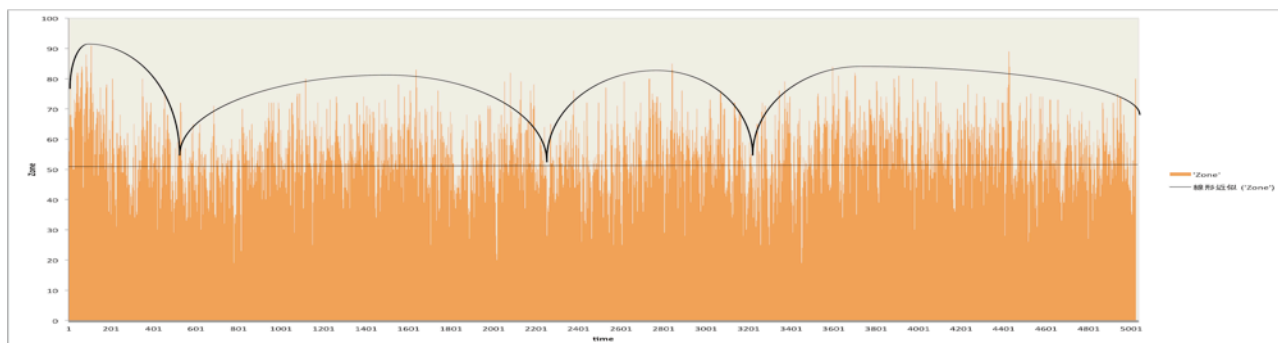


図28：被験者AのZone、データのまとまり

被験者BのAttention、Meditation、Zone、データのまとまり

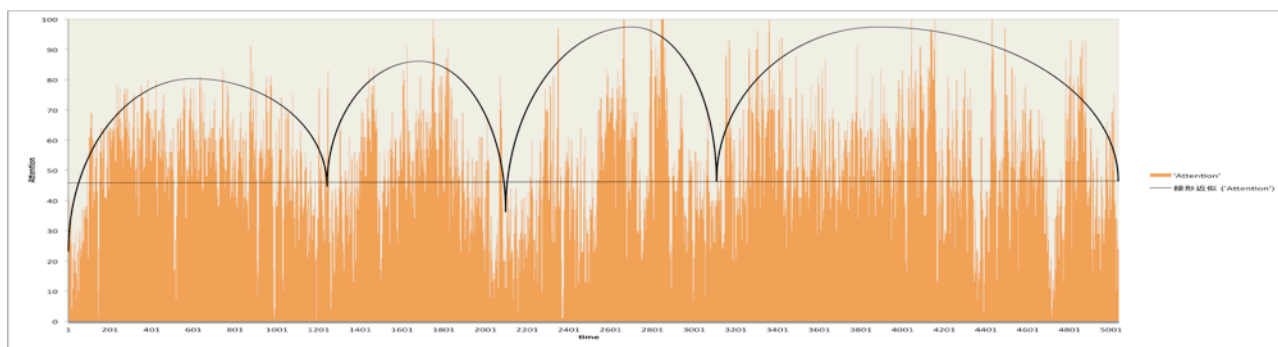


図29：被験者BのAttention、データのまとまり





図30：被験者BのMeditation、データのまとめ

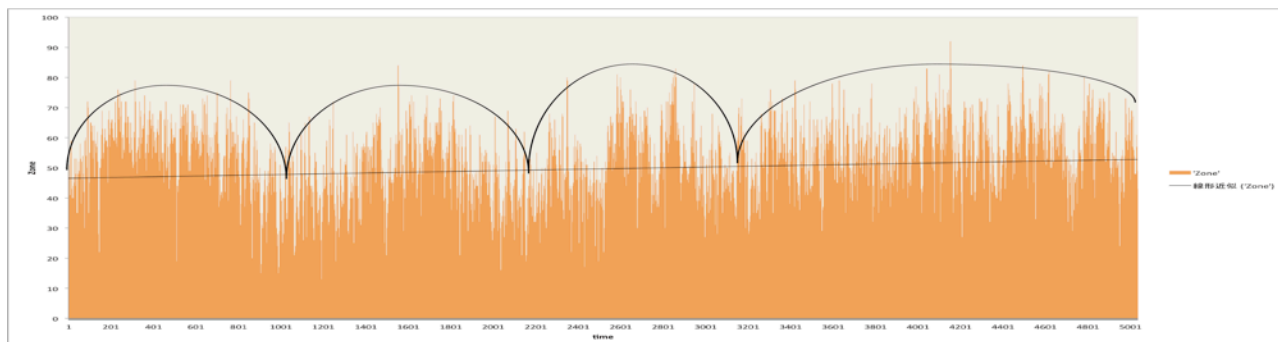


図31：被験者BのZone、データのまとめ

被験者CのAttention、Meditation、Zone、データのまとめ

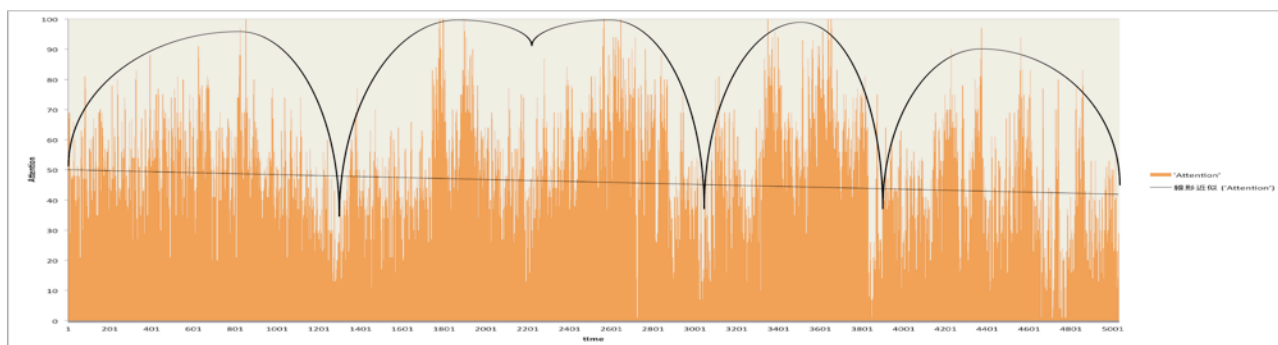


図32：被験者CのAttention、データのまとめ

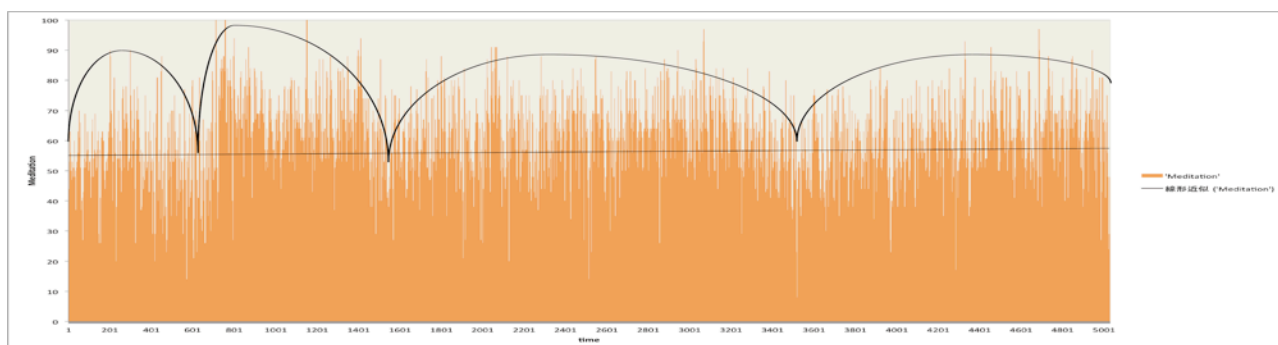


図33：被験者CのMeditation、データのまとめ

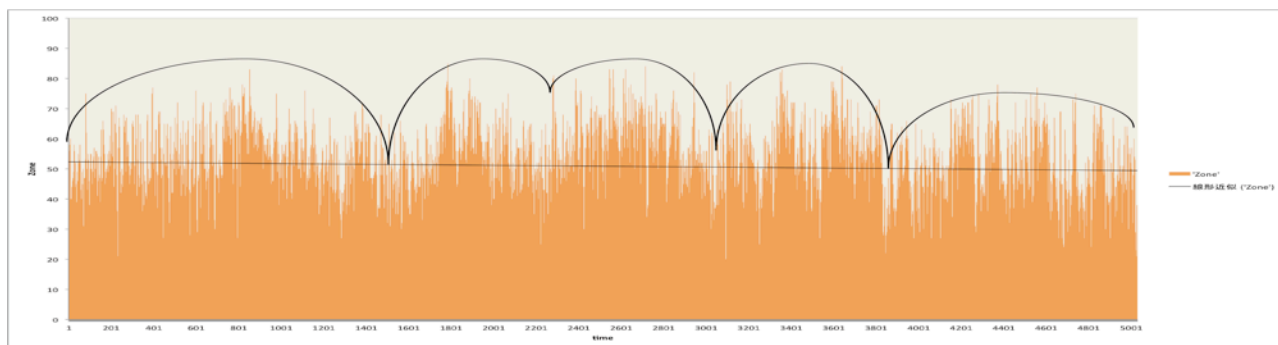


図34：被験者CのZone、データのまとまり

被験者DのAttention、Meditation、Zone、データのまとまり

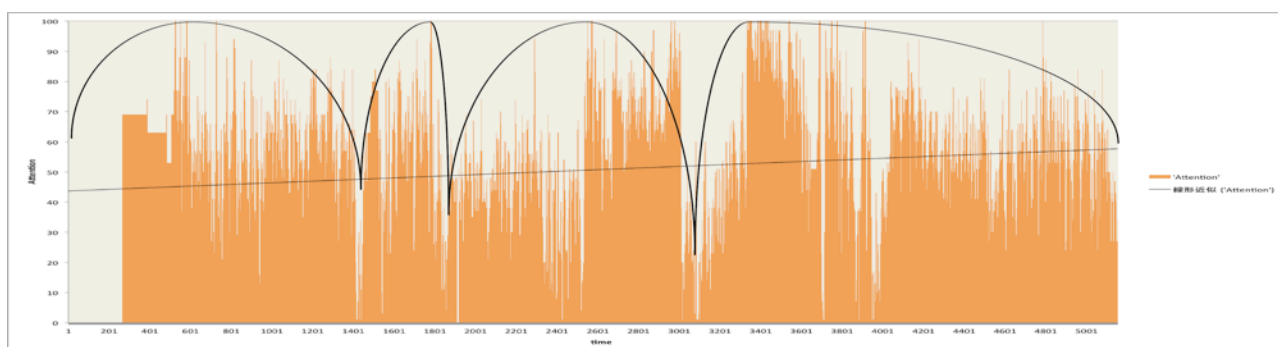


図35：被験者DのAttention、データのまとまり

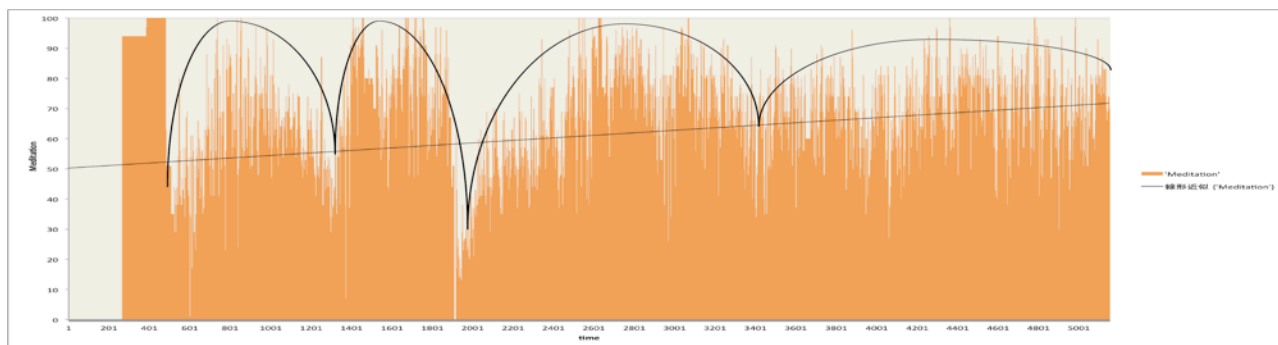


図36：被験者DのMeditation、データのまとまり

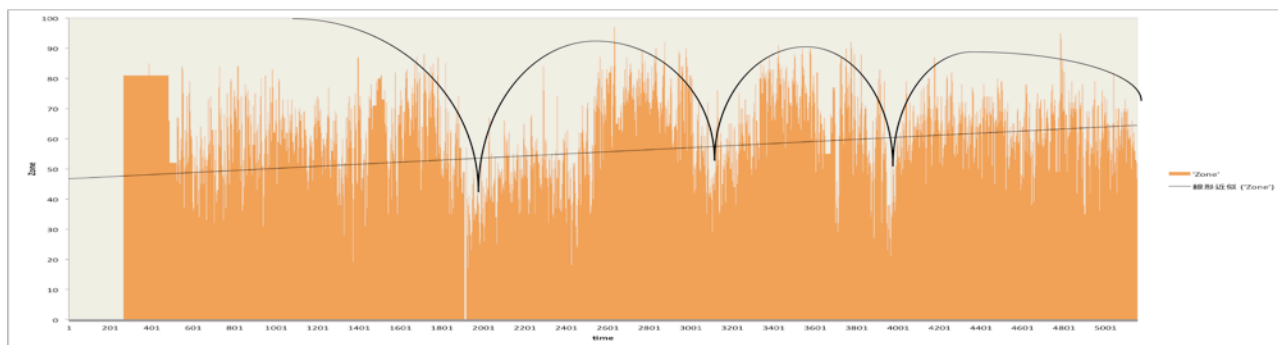


図37：被験者DのZone、データのまとまり

被験者EのAttention、Meditation、Zone、データのまとまり

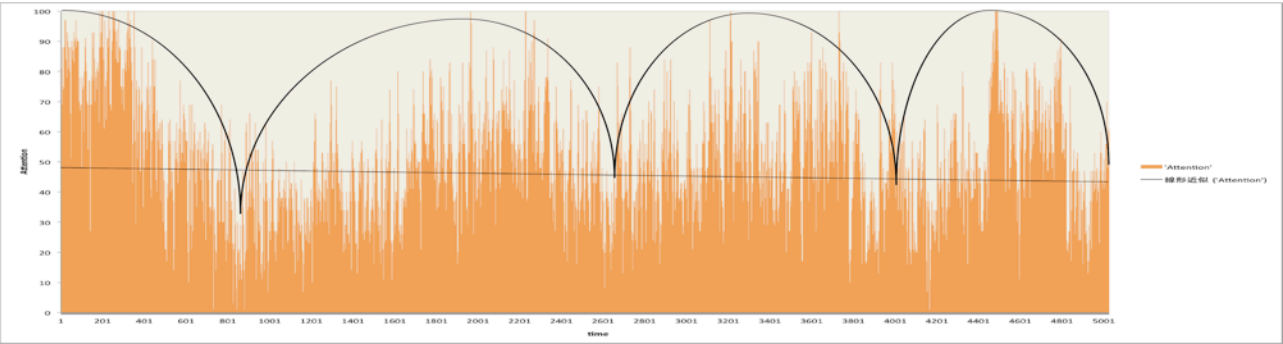


図38：被験者EのAttention、データのまとまり

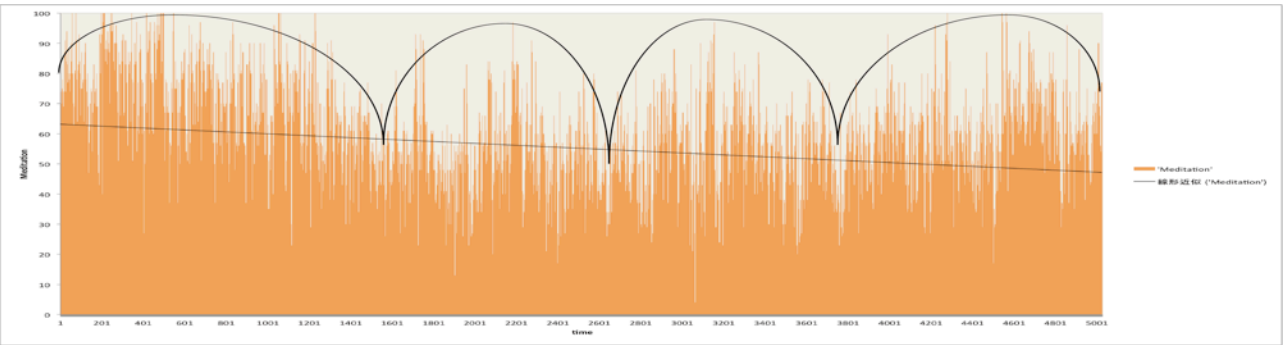


図39：被験者EのMeditation、データのまとまり

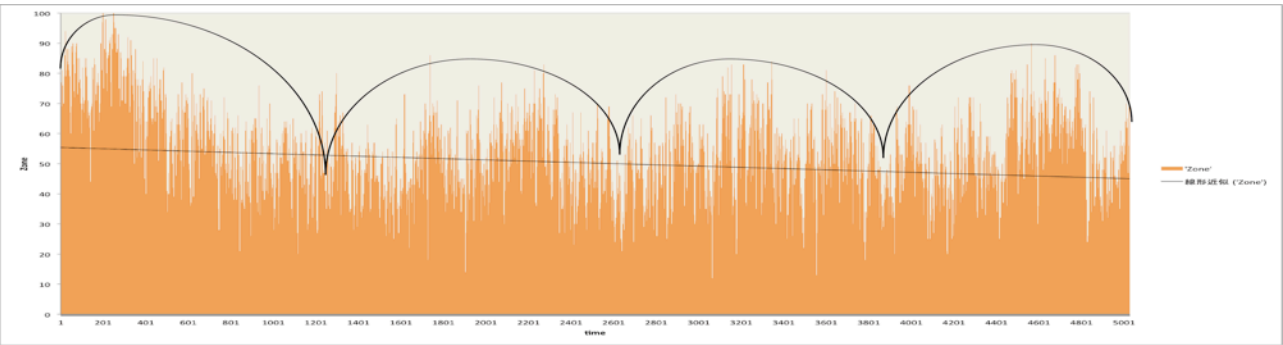


図40：被験者EのZone、データのまとまり

被験者FのAttention、Meditation、Zone、データのまとまり

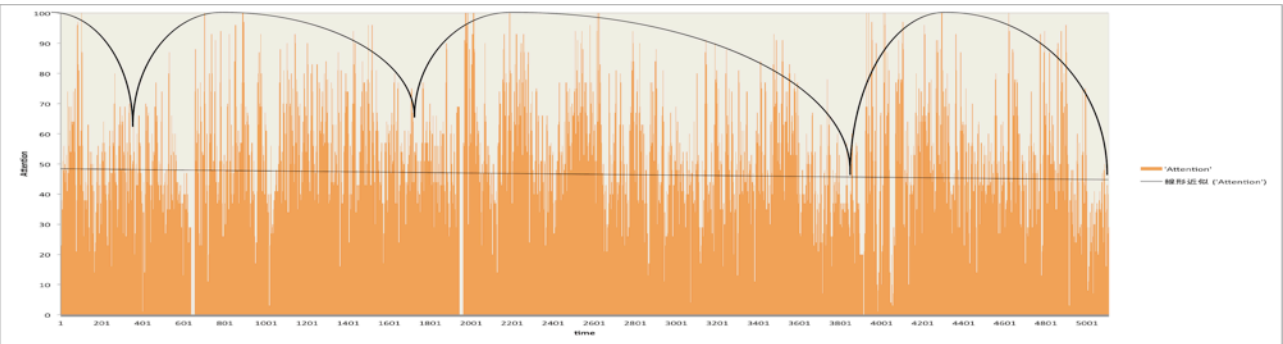


図41：被験者FのAttention、データのまとまり

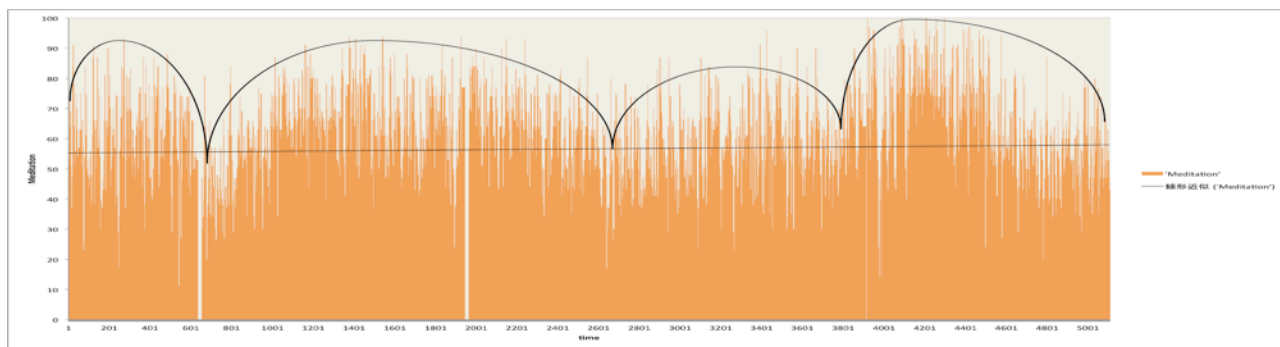


図42：被験者FのMeditation、データのまとめ

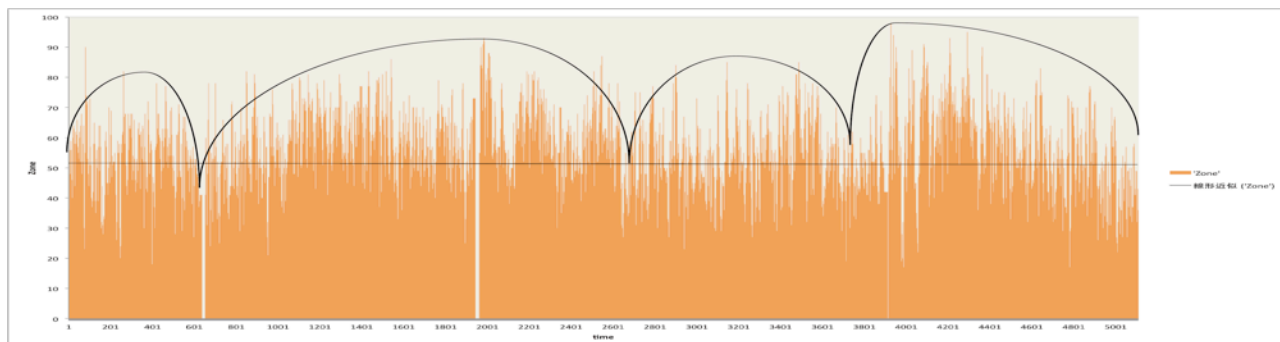


図43：被験者FのZone、データのまとめ

被験者GのAttention、Meditation、Zone、データのまとめ

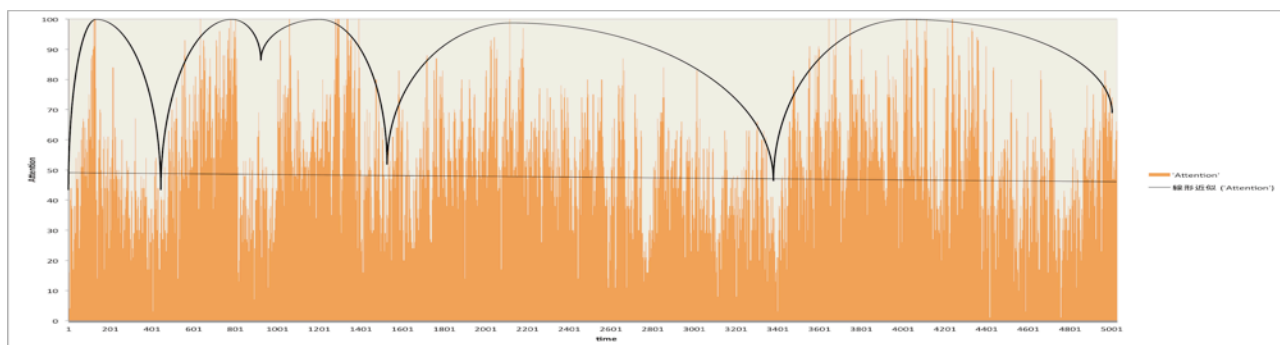


図44：被験者GのAttention、データのまとめ

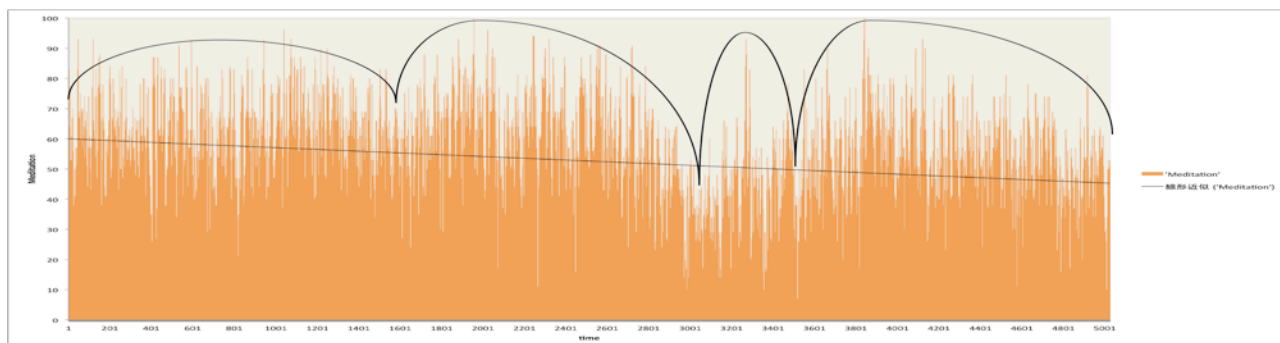


図45：被験者GのMeditation、データのまとめ

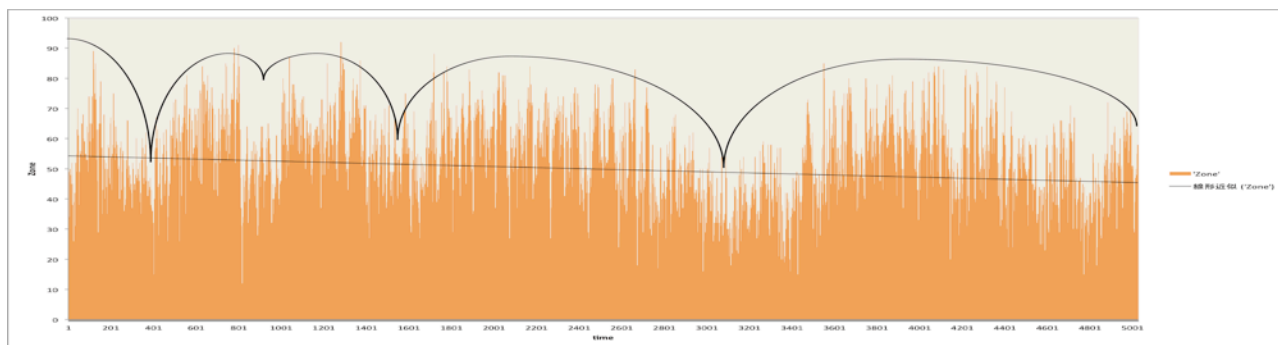


図46：被験者GのZone、データのまとまり

被験者HのAttention、Meditation、Zone、データのまとまり

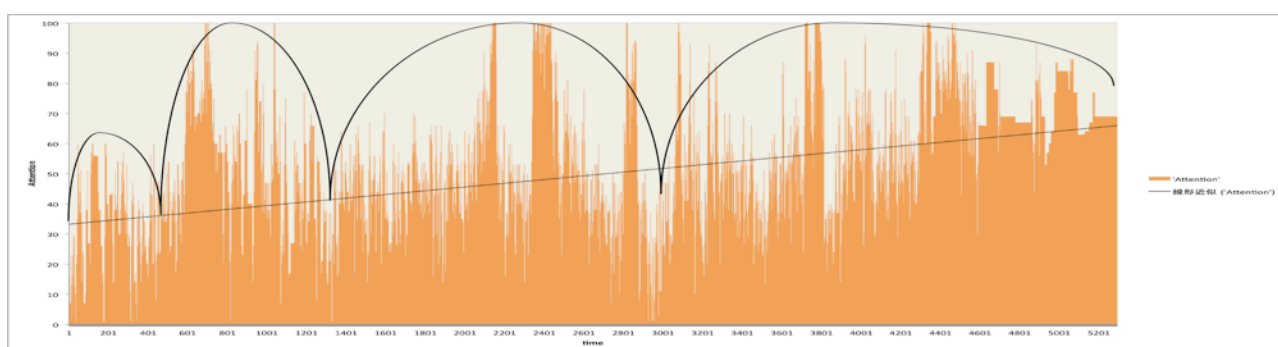


図47：被験者HのAttention、データのまとまり

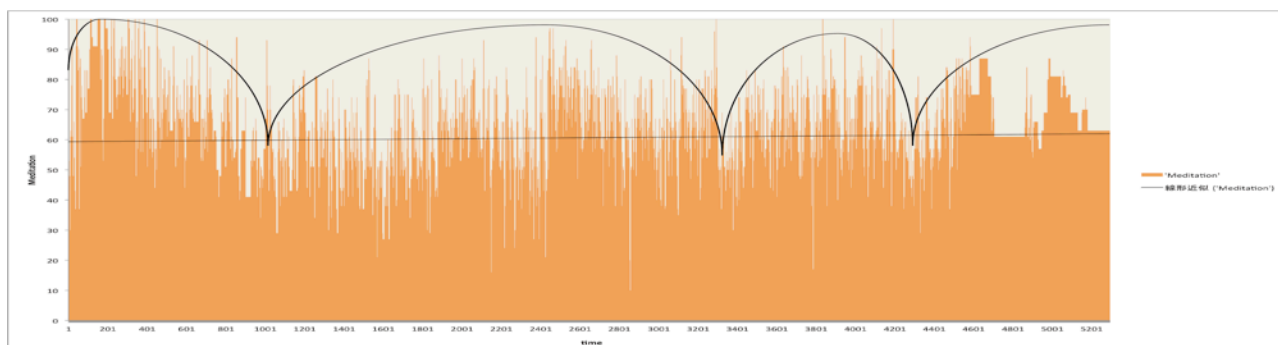


図48：被験者HのAttention、データのまとまり



図49：被験者HのZone、データのまとまり

以上から、ほぼ全ての被験者において、脳波データのまとまりが4つから5つあることが分かる。  
データのまとまりはおよそ以下の秒数において区切られる。

#### Attentionデータのまとまりの区切り（単位：秒）

##### 一つ目のまとまり

被験者A：0~400  
被験者B：0~1200  
被験者C：0~1300  
被験者D：0~1500  
被験者E：0~900  
被験者F：0~400  
被験者G：0~500  
被験者H：0~500

##### 二つ目のまとまり

被験者A：400~1900  
被験者B：1200~2100  
被験者C：1300~3000  
被験者D：1500~1900  
被験者E：900~2700  
被験者F：400~1800  
被験者G：500~1500  
被験者H：500~1400

##### 三つ目のまとまり

被験者A：1900~3400  
被験者B：2100~3200  
被験者C：3000~3800  
被験者D：1900~3100  
被験者E：2700~4000  
被験者F：1800~3900  
被験者G：1500~3400  
被験者H：1400~3000

##### 四つ目のまとまり

被験者A：3400~  
被験者B：3200~  
被験者C：3800~  
被験者D：3100~  
被験者E：4000~  
被験者F：3900~  
被験者G：3400~  
被験者H：3000~

#### Meditationデータのまとまりの区切り（単位：秒）

##### 一つ目のまとまり

被験者A：0~700  
被験者B：0~900  
被験者C：0~600  
被験者D：0~1400  
被験者E：0~1600  
被験者F：0~700  
被験者G：0~1700  
被験者H：0~1100

二つ目のまとめ

被験者A：700~2600  
被験者B：900~1800  
被験者C：600~1600  
被験者D：1400~2000  
被験者E：1600~2700  
被験者F：700~2700  
被験者G：1700~3100  
被験者H：1100~3400

三つ目のまとめ

被験者A：2600~3300  
被験者B：1800~3300  
被験者C：1600~3600  
被験者D：2000~3400  
被験者E：2700~3800  
被験者F：2700~3800  
被験者G：3100~3600  
被験者H：3400~4400

四つ目のまとめ

被験者A：3300~  
被験者B：3300~  
被験者C：3600~  
被験者D：3400~  
被験者E：3800~  
被験者F：3800~  
被験者G：3600~  
被験者H：4400~

Zoneデータのまとめの区切り（単位：秒）

一つ目のまとめ

被験者A：0~500  
被験者B：0~1100  
被験者C：0~1500  
被験者D：0~1900  
被験者E：0~1300  
被験者F：0~600

被験者G：0~400  
被験者H：0~1600

#### 二つ目のまとめ

被験者A：500~2300  
被験者B：1100~2200  
被験者C：1500~3100  
被験者D：1900~3100  
被験者E：1300~2700  
被験者F：600~2700  
被験者G：400~1500  
被験者H：1600~3000

#### 三つ目のまとめ

被験者A：2300~3300  
被験者B：2200~3200  
被験者C：3100~3900  
被験者D：3100~4000  
被験者E：2700~3900  
被験者F：2700~3800  
被験者G：1500~3100  
被験者H：3000~3500

#### 四つ目のまとめ

被験者A：3300~  
被験者B：3200~  
被験者C：3900~  
被験者D：4000~  
被験者E：3900~  
被験者F：3800~  
被験者G：3100~  
被験者H：3500~

以上の結果から、Attention、Meditation、Zoneのデータのまとめを色分けした図を作成した。  
8-5、Attention、Meditation、Zoneデータのまとめ、色分けを参照のこと。

#### 4-4、脳波計測実験後のアンケートから得た気づき

アンケートの質問項目及び回答は、巻末に掲載してある。8-4、脳波計測実験後のアンケートを参照のこと。

印象に残ったシーンとして多く挙げられたのは以下のシーンである。

- ・オープニングシーン
- ・月ちゃんとちいちゃんのままごと
- ・ラストシーン

多くの被験者において、舞台の円周を回る演出そのものが印象に残っていると回答されている。



## 5、考察

### 5-1、被験者別の考察

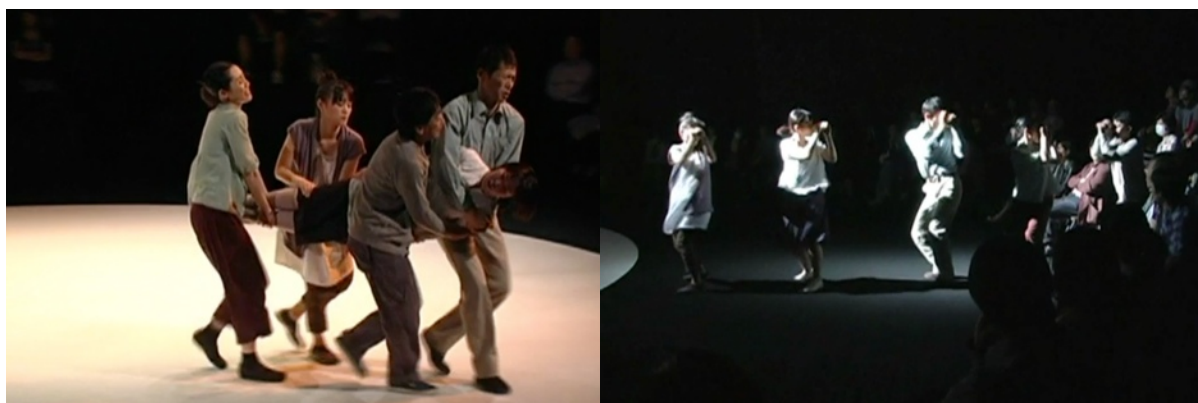
4-3-1の分析結果から、被験者別の考察を行う。

被験者Aは、引越しのシーンと、先生が光速を超える方法を男の子に教えるシーンにおいて、集中度が下がっている。特に後者においては、瞑想度も下がっている。

これらは、特に演劇的な演出手法が用いられたシーンである。

引越しのシーンは、演劇における「見立て」の演出が用いられている。役者の身体を家具に見立て、役者の身体を抱えて運ぶことで引越しを表現している。

先生が光速を超える方法を男の子に教えるシーンでは、男の子が光速を超えてちいちゃんに会いに行こうと試みる。このシーンでは、先生以外の全ての役者が男の子として演技し、連続したシーンを演じるという演出がされている。



左 図50：わが星『OUR PLANET』より、引越しのシーン

右 図51：わが星『OUR PLANET』より、先生が光速を超える方法を男の子に教えるシーン

これらのシーンが、被験者Aにとって馴染みのない”演劇的な”シーンだったと考えることができる。演劇の中では比較的良好に見られるものであるが、被験者Aは舞台鑑賞の頻度が年に二、三回（アンケートより。巻末参照。）程度であり、そのような”演劇的な”シーンに対して、すんなりと受け入れられなかったと考えられる。その結果、この二つのシーンにおいて、集中度が下がっていたのではないかな。

また、被験者Aはオープニング途中のちいちゃんと母の会話のシーンで瞑想度が下がっている。これは、本編開始後初めて時報以外の音がなくなる箇所である。それまでは時報に加えてドラムやベースの音が鳴っている。瞑想度とは、落ち着いた精神状態であればあるほど高い値を示す。これが低いのは、心がざわついている状態と言える。このシーンでは、それまで大きく鳴っていた音楽が小さくなり、時報の音だけになることで、期待感や不安感などによって心がざわついている状態に陥っていると考えられる。

被験者Aは、男の子がちいちゃんに会いに行くことを決意するシーンでゾーン度が高くなっている。このシーンの序盤は、時報のみ鳴っている。シーンが進むにつれてドラムがフェードインしてくる。その後先生と男の子以外の役者全員が「でも、もし」という掛け声をかけると同時に、ドラムが二倍の速さになる。そういった音の重なりが高揚感を生み、ゾーン状態に入っていると考えられる。

被験者Bは、最初の明転直前に集中度が高くなっている。ここはゾーン度も同様に高くなっていることから、作品が始まることへの高揚感により、集中度が高まっていると考えられる。

オープニングシーンの中では、家族が喋るシーンで集中度が低くなっている。一方、オープニングシーンの家族の会話の中でも、ラップで会話をしていくシーンは集中度が高い。前者は時報の音しか鳴っておらず、後者は多くの音が鳴っている。音楽のある、なしで、集中度に差が出ていると考えられる。

オープニングシーンが終わり、家族の会話に移行すると、ゾーン度が低くなる。オープニングシーンの盛り上がりが終わり、一転して静かな進行になることで、身体的集中と精神の落ち着きが乱れているからだと考えられる。

月ちゃんとちいちゃんの出会いのシーンでは、集中度、ゾーン度ともに低い状態にある。一方、直後に月ちゃんとちいちゃんのままごとのシーンが始まると集中度は高くなる。この二つのシーンには、会話量の差がある。前者は二人が初めて会うシーンであるため、会話が少ない。後者は二人が打ち解けて、一緒に遊ぶシーンであるため、会話量が多い。先ほどの音楽のある、なしの例と同様、舞台上の音の情報量（この場合、セリフである。）の違いから、集中度に差が出ていると考えられる。

二人の最初のままごとのシーンは集中度が高いが、一方、直後の人生に関わるままごとのシーンでは一度集中力が下がっている。前者のままごとのシーンは、「些細なきっかけでお互いの気持ちがすれ違って、一度できてしまった心のささくれが邪魔して、どうしても素直になれない少女たちが、罪悪感を抱きつつも、子供ながらの残酷さで傷つけ合い、小さなわだかまりを残したまま、別れの挨拶をする」というままごとであり、いわば制作者が観客を笑わせようと作ったシーンである。後者のままごとのシーンは、少しずつ離れていってしまう二人の少女の関係を、毎年少しずつ離れていってしまう地球と月の関係になぞらえて演じるままごとのシーンである。この面白さの違いが、この箇所における集中度に影響したと考えられる。

人生に関わるままごとのシーンが終わる直前までは、ゾーン度も高い状態にある。しかし、ままごとの最後、月ちゃんが死ぬシーンでは、集中度、ゾーン度ともに低くなる。このシーンは月ちゃんが病床にあり、見舞いに來たちいちゃんとともに幼い頃を振り返る、少々長めのシーンである。このシーンでは、被験者が展開に飽きており、集中度とゾーン度ともに低くなったと考えることができる。ままごとが終わると、集中度が高くなる。これは、展開が次に進んだことによるだろう。

被験者Bも、先生が男の子に光速を超える方法を教えるシーンで集中度が上がる。これは、被験者Aと逆の状態である。先ほどの被験者Aと比べて、被験者Bの方が普段の舞台鑑賞の頻度が多い。被験者Bは一ヶ月に一回程度舞台を鑑賞している。この違いから、被験者Bはこのシーンの演出をすんなり受け入れて、むしろ集中して鑑賞できているのではないか。

先生とちいちゃんの電話のシーンではゾーン度が高くなっている。このシーンでも、時報の音に加えて、音楽が鳴っている。また、電話の音も鳴っている。上述した理由と同様、音楽のある、なしがゾーン度に影響を与えていると考えられる。

被験者Bは音楽のあるシーンで集中度やゾーン度が高くなる傾向がある。一方、音楽が鳴っているのにも関わらず、集中度が低くなるシーンが二つある。月ちゃんの手紙のシーンと、ラストシーンの歌を歌うシーンである。

月ちゃんの手紙のシーンは、幼少期に埋めたタイムカプセルの中の光が溢れ出したことを示すために、埋める際は直径20センチほどであったミラーボールが、手紙のシーンでは直径60センチほどになっているという「見立て」の演出が用いられている。この見立ての演出が、被験者Bにとっては違和感を感じられた可能性がある。



左 図52：わが星『OUR PLANET』より、タイムカプセルを埋めるシーン

右 図53：わが星『OUR PLANET』より、月ちゃんの手紙のシーン

ラストシーンの歌を歌うシーンであるが、このシーンは音楽を使う他のどのシーンとも異なり、音楽に合わせて役者が歌を歌う。これまでのシーンでは音楽にセリフを乗せることこそすれ、歌を歌うことはなかった。

4-2で行った質的調査の中でも、こんな一節がある。

石井：最後にミュージカルシーンみたいなのがあるじゃない。あれは賛否両論なのかなって。

B：私は正直無くていいかなって。

石井：僕も観てる時はなんか違うんじゃないかって思った。

B：あれ無くてそのまま語りとセリフがリズムに乗って行く感じだけで終わっても。突然ミュージカルになって、「あれ？」って。そこにいくまで気持ちが乗ってたけど、「あれ、歌っちゃった」って。

C：一番最後ですよ。

B：そう。

一見ミュージカルのようなこの演出が、被験者Bにとって集中度を下げる一因になった可能性がある。

被験者Cは、最初の家族の会話のシーンで集中度が下がり、瞑想度が下がる。被験者Bと同様、オープニングシーンの盛り上がりが終わわり、一転して静かな進行になることで、集中度と瞑想度が下がっていると考えられる。一方、被験者Bとは対照的に、ゾーン度が高くなっている。被験者Cは、オープニングシーンよりも最初の家族の会話のシーンの方が身体的集中と精神的落ち着きが両立されている状態にある。

二回目の家族の会話のシーンから集中度が上がる。オープニングから一転して静かな会話劇になり、一度観劇する姿勢が乱れるが、家族の会話が繰り返される中で集中力が高まっている。

ちいちゃんの自転のシーンでゾーン度が一度高くなる。このシーンは、先生と男の子の会話を背景に、家族の会話が繰り返される。作品中で初めてちいちゃんが地球を表現していると気が付きうるシーンでもあり、この作品をどうやって鑑賞していけばよいかを理解するシーンと言える。これがゾーン度を高めた一因となった可能性がある。

お婆ちゃんが死について語るシーンで瞑想度が低くなる。このシーンは、作中初めて「死」をどう考えるかが提示される箇所でもある。以下の様なやりとりが行われる。

わたし「え、お婆ちゃんまた死んじゃったの？」

お婆ちゃん「死んじゃいましたよ」

わたし「ちょっと待って、ちょっと待って、もっと戻るから、」

お婆ちゃん「しょうがないねえ、でもね、忘れちゃいけないよ、あともうちよつともしたら、みんな死んじゃうんだからね、これだけはどうしてもないんだからね」

被験者Cは、被験者Aとは対照的に、引越しのシーンで集中度が高くなる。これは前述したように、演劇らしい見立ての演出が用いられるシーンである。被験者Cにとり、このシーンはむしろ集中力を増して観ることができている。

月ちゃんとちいちゃんの出会いのシーンで集中度が下がる。これは被験者Bにも見られた傾向である。前述したように、会話量の低下によって集中度が低くなっていると考えられる。

家庭訪問のシーンでは、集中度、ゾーン度ともに低くなる。このシーンの直前には、先生と男の子の会話がある。男の子が光速を超える可能性を模索するシーンであり、時報の音に加えて少しずつドラムの音が大きくなる。また、先生と男の子以外の役者が「でも、もし」と合いの手を入れる、リズムカルなシーンである。一方、家庭訪問のシーンになると、小さな時報の音だけになる。音楽のある、なしによって集中度とゾーン度が低くなったと考えられる。

男の子が光速を超えるシーンで集中度、ゾーン度ともに急速に高くなる。このシーンは中盤の山場である。男の子が少しずつ加速し、地球にたどり着かんとするシーンである。これの演出として、このシーンでは時報の音が四分の一に早まる。音楽のテンポの早まりとともに、集中度とゾーン度が上がっていると考えられる。

男の子が光速を超えるシーンが終わると、一転して静かなシーンになる。ちいちゃんとお姉さんの会話である。このシーンでは集中度、瞑想度ともに低くなる。男の子が光速を超えるシーンでの盛り上がりが一度落ち着く箇所であり、それによって集中度、瞑想度が下がっていると考えられる。

お父さんとお母さんの会話のシーンで集中度、ゾーン度が下がる。このシーンはお姉さんの独白のシーンの直後、リズムカルで音楽が多用されているシーンである。それにも関わらず、集中度とゾーン度が下がっている。これの原因として考えられるのが、映像データの音声聞き取りづらいということである。このシーンは、お父さんとお母さんが円周を回りながら、それぞれの一日を表現し合う。例えば以下の様な具合である。

お父さん「目が覚めて、体起こして、顔を洗って、ゴハン食べて、歯を磨いて、ネクタイしめて、玄関開けて、見送られて」

お母さん「目が覚めて、家族起こして、お弁当用意して、ゴハンよそって、靴を磨いて、ネクタイ渡して、玄関開けて、見送って」

(柴幸男「わが星」 158ページより)

こういったセリフを同時に発話するシーンであるため、映像では、非常に音声不明瞭になっている。これが原因になっている可能性がある。

月ちゃんの手紙のシーンでは集中度が高くなる。これは被験者Bと対照的である。そもそもこのシーンはラストシーン直前の山場であり、非常に大きく音楽が鳴っている。被験者Bの考察で述べたような見立ての演出に違和感を感じることなく、被験者Cは鑑賞できていると考えられる。

最後の家族の会話のシーンでは、集中度が下がる。このシーンは、ラストシーン直前で家族の未来を表現する静かな会話である。会話そのものは非常にスリリングではあるものの、会話量は相対的に少ない。会話量が少なくなることがこの場合の原因になっていると考えられる。

ラストシーンの途中から集中度、ゾーン度ともに低くなっている。ラストシーンは音楽が多用されるシーンであるが、被験者Bと同様、歌を歌う箇所でも集中度、ゾーン度が低くなった可能性がある。

被験者Dは、家族のラップのシーンでごく短い間急速に低くなるが、直後に高くなる。このシーンは、劇中で最も直接的にラップの手法を取り入れているシーンである。ちゃぶ台をお立ち台に見立て、出演者が次々にラップを重ねる。セリフはそれまで繰り返される家族の会話と大差ないが、この一見奇抜な展開が、被験者Dにとって集中度を下げる原因になったと考えられる。

また、直後に集中度が高くなるのは、このシーンの演出を受け入れ、再び集中して鑑賞する姿勢に戻ったからであると考えられる。



図54：わが星『OUR PLANET』より、家族のラップのシーン

繰り返される家族の会話の中で瞑想度が急速に高くなる。静かな会話によって展開される一連のシーンであり、落ち着いた精神状態を獲得していると考えられる。

引越しのシーンで集中度が急速に低くなる。これは被験者Aの結果と同様である。

月ちゃんとちいちゃんの出会いのシーンで瞑想度が急速に低くなる。ゾーン度も下がる。被験者B、Cに反応が見られたシーンと同じであるが、被験者Dは瞑想度が低くなっているため、展開が変わったことに対して精神の落ち着きを失い始めていると考えられる。

月ちゃんが死ぬシーンで集中度、ゾーン度が急速に高くなる。このシーンは月ちゃんとちいちゃんのままとの最後であり、非常に静かなシーンであるものの、月ちゃんの死という大きな展開（それはままとの一部ではあるものの、非常に静謐なシーンである）に対し、注目していると考えられる。

家庭訪問のシーンの終盤から、集中度、瞑想度、ゾーン度が急速に下がる。これは被験者Cと同様である。被験者Cと比べると、このシーンで瞑想度も下がっているのが特徴である。家庭訪問のシーンの終盤から、男の子は光速を超えて地球を見に行くことを決意し始める。物語の中でひとつの意思決定が行われる重要なシーンであり、心がざわついていると考えられる。

男の子が光速を超えるシーンで集中度、瞑想度、ゾーン度が高くなる。直前のシーンで瞑想度が下がり、ざわついた心が、このシーンの注目に繋がっている。被験者Cと同様の心的状態になっている。

お姉さんの独白のシーンで集中度が下がる。男の子が光速を超えるシーンを終え、一転して静かなシーンになることが原因と考えられる。

お父さんとお母さんの会話のシーンで瞑想度が低くなる。すなわち、心がざわついていると言える。一方、集中度やゾーン度が目立った変化はない。被験者Dも被験者Cと同様、今ひとつ音声を聞き取れていない可能性がある。

被験者Eはオープニングシーンの途中から集中度が下がり始めることが特徴である。オープニングシーンの中のちいちゃんとお母さんの会話の箇所から低くなり始め、先生と男の子の最初の会話のシーンで下がりきる。集中度が下がり始めるきっかけであるちいちゃんとお母さんの会話のシーンは、オープニングシーンの中で何度かある、比較的静かなシーンである。この時下がった集中度はその後オープニングシーンが続いても戻らない。被験者Eはオープニングシーンで今ひとつ作品に入り込めていないということが見て取れる。次に集中度が急速に高くなるのは、ちいちゃんの公転のシーンである。ちいちゃんが舞台の円を太陽に見立て、円周を走ることで公転を表現するシーンである。被験者Cの考察でも見られたように、ちいちゃんが地球を表現していると気が付きうるシーンである。これが集中度を急速に高めた可能性がある。





図55：わが星『OUR PLANET』より、公転のシーン

お婆ちゃんが死について語るシーンで集中度とゾーン度が急速に上がり、瞑想度が下がる。このシーンで瞑想度が下がるのは被験者Cと同様である。被験者Eはさらに集中度とゾーン度が上がり、このシーンに注目していることが分かる。

月ちゃんとちいちゃんのままごとのシーンで集中度が上がる。これは被験者Bにも見られた傾向である。

月ちゃんが死ぬシーンで集中度が下がる。これは被験者Dが同シーンでゾーン度が上がったのと対照的だと言える。月ちゃんの死という大きな展開を迎えはするものの、シーンそのものは非常に静かである。これが被験者Dとの違いを生んだと考えられる。

先生と男の子の会話のシーンで瞑想度が高くなる。会話量が少ないことが原因と考えられる。

直後の先生が男の子に光速を超える方法を教える方法を伝えるシーンでゾーン度が高くなる。このシーンは、被験者Bの集中度が高くなったシーンである。同様の理由から、身体的集中と精神の落ち着きを持ってこのシーンを鑑賞できていると考えられる。

男の子が光速を超えるシーンで集中度、ゾーン度が下がっているのは被験者C、Dと逆の結果であり、被験者Eの大きな特徴である。多くの音が大きく鳴っているこのシーンにおいて集中度が下がるのは、同被験者のオープニングシーンの結果と類似する。物語の展開に今ひとつ入り込めていない様子が見て取れる。

お父さんとお母さんの会話のシーンで集中度が一度低くなる。これは被験者Cと同様、音声不明瞭であることが原因と考えられる。

最後の家族の会話のシーンで集中度が急速に高くなる。このシーンは、序盤の家族の会話を再び繰り返しながら、終末（太陽系の終焉）を予期させる。物語のクライマックスに繋がる展開に、集中度が急速に高くなったと考えられる。

月ちゃんの手紙のシーンで集中度が高くなる。被験者Cと同様の結果である。

ラストシーンの途中で瞑想度、ゾーン度が急速に高くなる。ラストシーンの展開を、心身ともにリラックスした状態で鑑賞できていると考えられる。

被験者Eは、音や照明による物語の盛り上がりよりも、セリフの応酬や長セリフに注目していることが、全体を通して言える傾向である。

被験者Fは、オープニングシーンの終わりとともに集中度、瞑想度が下がる。被験者Cとほぼ同様の結果である。オープニングシーンの盛り上がりが終わる、集中度は下がるが、今後の展開、物語の始まりを予感し、瞑想度が下がり、心がざわついている状態であると言える。

お婆ちゃんが死について語るシーンで集中度、ゾーン度ともに低くなる。これは被験者Eの結果と対照的である。作品の「死」の概念が説明されるシーンであり、お婆ちゃんとちいちゃんの二人の会話の他には、時報が小さく鳴っているのみである。音楽のある、なしが影響していると考えられる。集中度に加えてゾーン度も低下していることから、身体ともに作品への注目が欠けつつあることが分かる。

月ちゃんとちいちゃんの出会いのシーンで集中度、ゾーン度ともに急速に高くなる。これは被験者B、C、Dの結果と対照的である。会話量が少なく、時報のみ小さく鳴っているシーンであるが、新しい登場人物である月ちゃんへの注目から、集中度、ゾーン度が高くなっていると考えられる。

月ちゃんとちいちゃんのままごとのシーンで集中度、ゾーン度が下がる。被験者Bの結果と同様である。繰り返されるままごとに対し、退屈を感じていることが分かる。一方、ままごとの終盤から月ちゃんの死にかけて集中度、ゾーン度が高くなる。一度低下した集中度、ゾーン度が、ままごとの展開が進むに連れて高くなることが分かる。二人の少女の人生を表現するままごとのシーンへの感情移入の様子が見て取れる。家庭訪問の直後、先生と男の子の会話のシーンで集中度が下がる。被験者C、Dの結果と同様である。男の子が光速を超えるシーンで集中度が高くなる。このシーンに注目しているのは、被験者C、D、Eの結果と類似している。

お姉さんの独白のシーンで集中度、ゾーン度が低くなり、瞑想度が急速に高くなる。被験者C、Dの結果と同様である。一方、被験者Fにおいては、同シーンにおいて瞑想度が高くなることが特徴である。静かな会話が繰り返されるこのシーンを、落ち着いて鑑賞することができていることが分かる。

お父さんとお母さんの会話のシーンで集中度、ゾーン度が高くなる。これは被験者C、D、Eの結果と対照的である。被験者Fは、このシーンの音声の不明瞭さに対しても集中を途切らせる事無く、むしろ注目していることが分かる。

ラストシーンで瞑想度が低くなる。同シーンにおいて被験者Eの瞑想度が高くなっていたことと対照的である。被験者Fは、このシーンに対して精神の落ち着きを失っていることが分かる。物語の終わりを迎え、心がざわついていると考えられる。

被験者Gは、オープニングシーンの明転とともに集中度、ゾーン度が高まる。これは被験者Bの結果に近い。初めて照明が点くこのシーンにおいて、期待感とともに集中度、ゾーン度が高くなっていると考えられる。オープニングシーンの終盤、照明が赤くなる箇所では集中度、ゾーン度が急速に高くなる。オープニングシーンにおいては、ちいちゃんの誕生と、地球の誕生について語られる。

わたし「ねえ」  
お母さん「なに？」  
わたし「これ、わたしが生まれるとき？」  
お母さん「そうよ」  
わたし「うん、おぼえてる」  
お母さん「ずっと見てたんだ」  
わたし「見えてた」  
お母さん「ずっと聞いてたんだ」  
わたし「聞こえてた」  
他の出演者「聞こえますか？」  
わたし「聞こえますよ」  
他の出演者「生まれましたか？」  
わたし「生まれましたよ」  
他の出演者「おめでとう」  
わたし「ありがとう」  
( 柴幸男「わが星」 19ページより )

それが一転して終末を予感させるのが、オープニングシーンの終盤の照明が赤くなる箇所である。以下のようなやり取りがされる。

わたし「……………ねえ、」  
全員「なに？」  
わたし「これ、あたしが死んでくとき？」  
全員「そう」  
わたし「うん、おぼえてる」  
お母さん「ずっと見てたんだ」

わたし「見えてた、燃えるんでしょ」  
全員「燃えるよ」  
わたし「消えるんでしょ」  
全員「消えるよ」  
わたし「ねえ」  
全員「なに」  
わたし「…………手つないでもいい？」  
(柴幸男「わが星」 37ページより)



図56：わが星『OUR PLANET』より、終末を予感させるオープニングシーン的一幕

オープニングシーンの明るい雰囲気が一転して終末を予感させるものになることで、被験者Gは集中度、ゾーン度を高める結果になったと考えられる。

最初の家族の会話のシーンで集中度が下がり、ゾーン度が上がる。これは被験者Cの結果と同様である。

二回目の家族の会話のシーンで急速に集中度が高くなる。これも被験者Cの結果と同様である。

お婆ちゃんが死について語るシーンで集中度が低くなり、ゾーン度が高くなる。同シーンにおいて集中度が低くなるのは被験者Fと同様であり、ゾーン度が高くなるのは被験者Eと同様である。会話と音楽の情報量が比較的少ないシーンであるため、集中度が下がっているが、作中で初めて「死」の概念が説明されるシーンであり、身体的集中と精神の落ち着きが保たれている状態にあることが分かる。

先生と男の子が会話するシーンで集中度、瞑想度、ゾーン度が低下する。被験者C、D、Fの結果と同様である。繰り返されるままごとのシーンを終え、一度作品から注目が削がれていることが分かる。

男の子が光速を超えるシーンで集中度、瞑想度、ゾーン度が高くなる。被験者C、D、E、Fの結果と共通する。

ラストシーンの前半で一度集中度、ゾーン度が低くなるが、以降高くなる。ラストシーンの途中で男の子は遂に地球との邂逅を果たすが、それによって再び作品への注目が促されたと考えられる。





図57：わが星『OUR PLANET』より、男の子と地球の邂逅

被験者Hの集中度が初めて落ち着くのは、オープニング中盤である。最初の家族の会話のシーンまで、集中度、ゾーン度ともに低い状態である。これは被験者Eと同様の結果である。作品に今ひとつ入り込めていない様子が分かる。

引越しのシーンで瞑想度が低くなる。繰り返し述べてきたように、このシーンでは見立ての演出が用いられる。瞑想度が低下するものの、集中度とゾーン度が低下しないことから、舞台への注目は削がれないまま、精神が落ち着かない状態に陥っていることが分かる。

月ちゃんとちいちゃんのままごとのシーンの序盤において、集中度、ゾーン度が高くなる。また、ままごとのシーンの中盤から集中度が下がり、瞑想度が高くなる。ゾーン度も高くなる。これは被験者B、E、Fの結果に近い。

月ちゃんが死ぬシーンで集中度、ゾーン度が下がる。これは被験者B、Eと同様であり、被験者Dの結果と対照的である。

先生と男の子の会話のシーンで集中度、ゾーン度が急速に高くなる。これは被験者Aに見られた結果と同様であり、被験者C、D、F、Gの結果と対照的である。

家庭訪問のシーンで集中度が急速に低くなる。これは被験者C、Dの結果と同様である。

先生が光速を超える方法を男の子に教えるシーンで集中度が高くなる。これは被験者Bと同様の結果であり、被験者Aの結果と対照的である。

男の子が光速を超えるシーンで瞑想度が下がり、ゾーン度が高くなっている。このシーンにおいて瞑想度が下がるのは、被験者D、Gの結果と対照的である。また、ゾーン度が高くなるのは被験者C、D、F、Gと共通する。一方、同シーンにおける被験者Eのゾーン度が低くなっていることと対照的である。このシーンに対して注目する一方、心はざわついている状態である。

## 5-2、被験者共通の傾向

4-3-2の結果から、被験者に共通して見られる傾向を考察する。

Attentionデータのまとまりについて、似た傾向を持つ被験者によっておよそ以下のようにグループ分けすることができる。

- ・被験者A、F、G、H
- ・被験者B、D
- ・被験者C、E

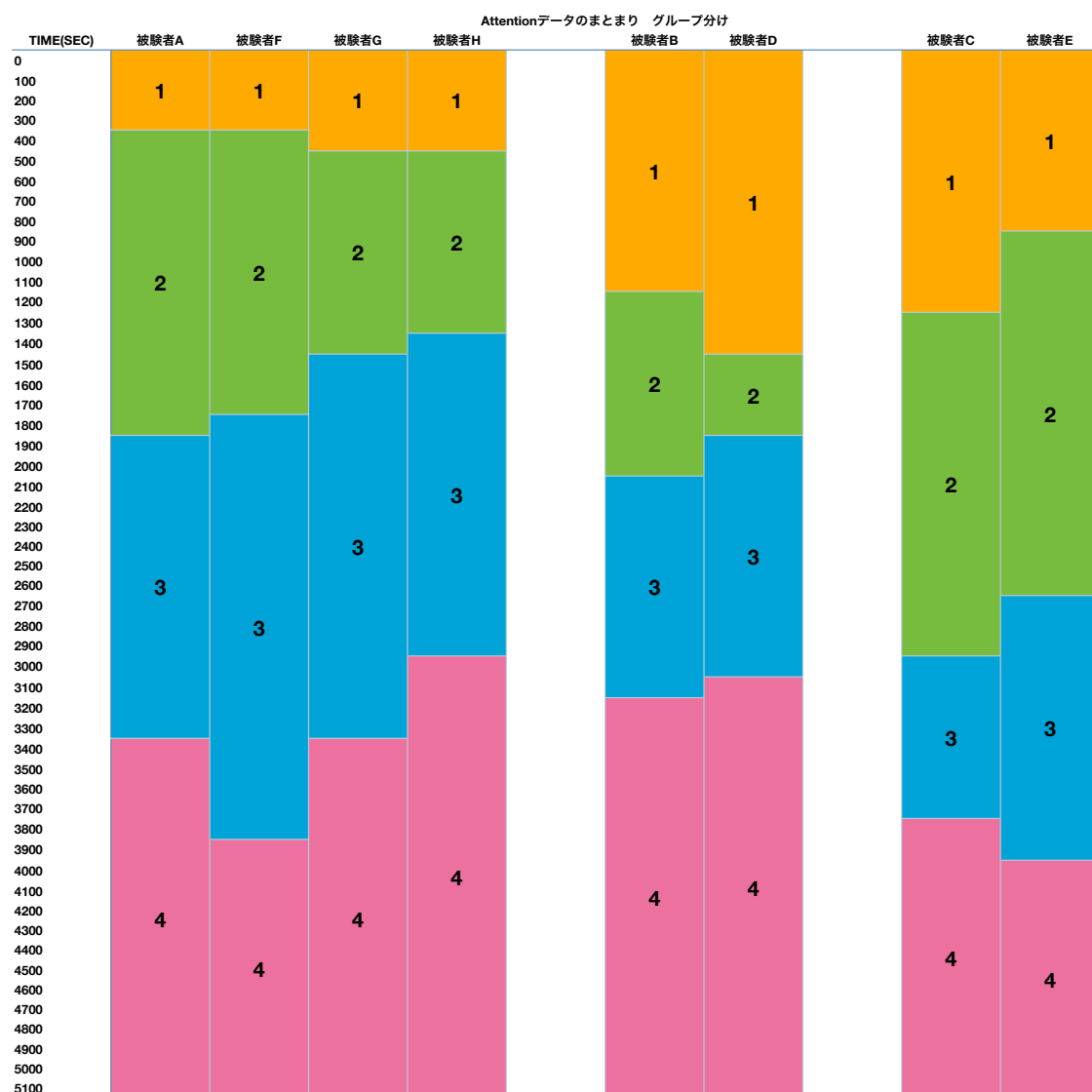


図58：Attentionデータのまとまり グループ分け

被験者A、F、G、Hのグループは、開演からオープニングの途中、円周を歩き続けた出演者達が初めて歩みを止め、ちいちゃんの独白が始まるシーンまでが一つ目のまとまりである。続いて、オープニングが終わり、家族のラップのシーンが始まるころまでが二つ目のまとまりである。その後、月ちゃんとちいちゃんのままごとのシーン、先生と男の子の会話のシーン、家庭訪問のシーン、男の子が光速を超えるシーンが含まれるのが三つ目のまとまりである。ちいちゃんとお姉さんの会話から終演までが四つ目のまとまりである。

被験者B、Dのグループは、開演からオープニング、先生と男の子の会話、家族の会話のシーンまでが一つ目のまとまりである。お婆ちゃんが死について語るシーンと引越しのシーンが二つ目のまとまりである。月ちゃんとちいちゃんの出会、ままごと、家庭訪問のシーンが三つ目のまとまりである。男の子が光速を超えるシーンから終演までが四つ目のまとまりである。

被験者C、Eのグループは、開演からオープニングの会話、先生と男の子の会話のシーンまでが一つ目のまとまりである。その後家族の会話、お婆ちゃんが死について語るシーン、月ちゃんとちいちゃんの出会、月ちゃんとちいちゃんのままごとが終わるまでが二つ目のまとまりである。続いて、家庭訪問、男の子が光速

を超えるシーンまでが三つ目のまとまりである。ちいちゃんとお姉さんの会話から終演までが四つ目のまとまりである。

Attentionデータのまとまりを3つのグループに分け、以上のように整理した。ここから以下の様なことが分かる。

- 1、被験者A、F、G、Hのグループの一つ目のまとまりはオープニングシーンの途中で区切られている。被験者の半数に当たる四名が、オープニングの一連のシーンの中で集中度が低くなる傾向がある。
- 2、月ちゃんとちいちゃんのままごとのシーンは非常に長い時間行われる（約10分間）が、その中で集中度のまとまりは途全ての被験者において区切られない。この長いシーンをひとつのまとまりとして観ることができていると考えられる。
- 3、被験者A、F、G、Hのグループと被験者C、Eのグループは男の子が光速を超えるシーンが終わると集中度が低くなる。前述したように、このシーンは中盤の山場であり、盛り上がりを見せる。このシーンが終わると集中が途切れる傾向を見せたのが被験者8名中6名である。
- 4、全てのグループにおいて、ちいちゃんとお姉さんの会話、お父さんとお母さんの会話、月ちゃんの手紙のシーン、最後の家族の会話、ラストシーンは四つ目のまとまりに含まれている。その中で一度客席の電気が点き、場内アナウンスが入るにも関わらずである。ラストシーンに向けて、集中度が維持される傾向があることが分かる。
- 5、Attentionデータの4つのまとまりではなく、すべての被験者におけるまとまりが区切られる部分のみに注目すると、被験者A、F、G、Hのグループの二つ目のまとまりの終わり、被験者B、Dのグループの一つ目のまとまりの終わり、被験者C、Eのグループの一つ目のまとまりの終わりが近い時間帯で区切られている。また、被験者A、F、G、Hのグループの三つ目のまとまりの終わり、被験者B、Dのグループの三つ目のまとまりの終わり、被験者C、Eのグループの二つ目のまとまりの終わりが近い時間帯で区切られている。

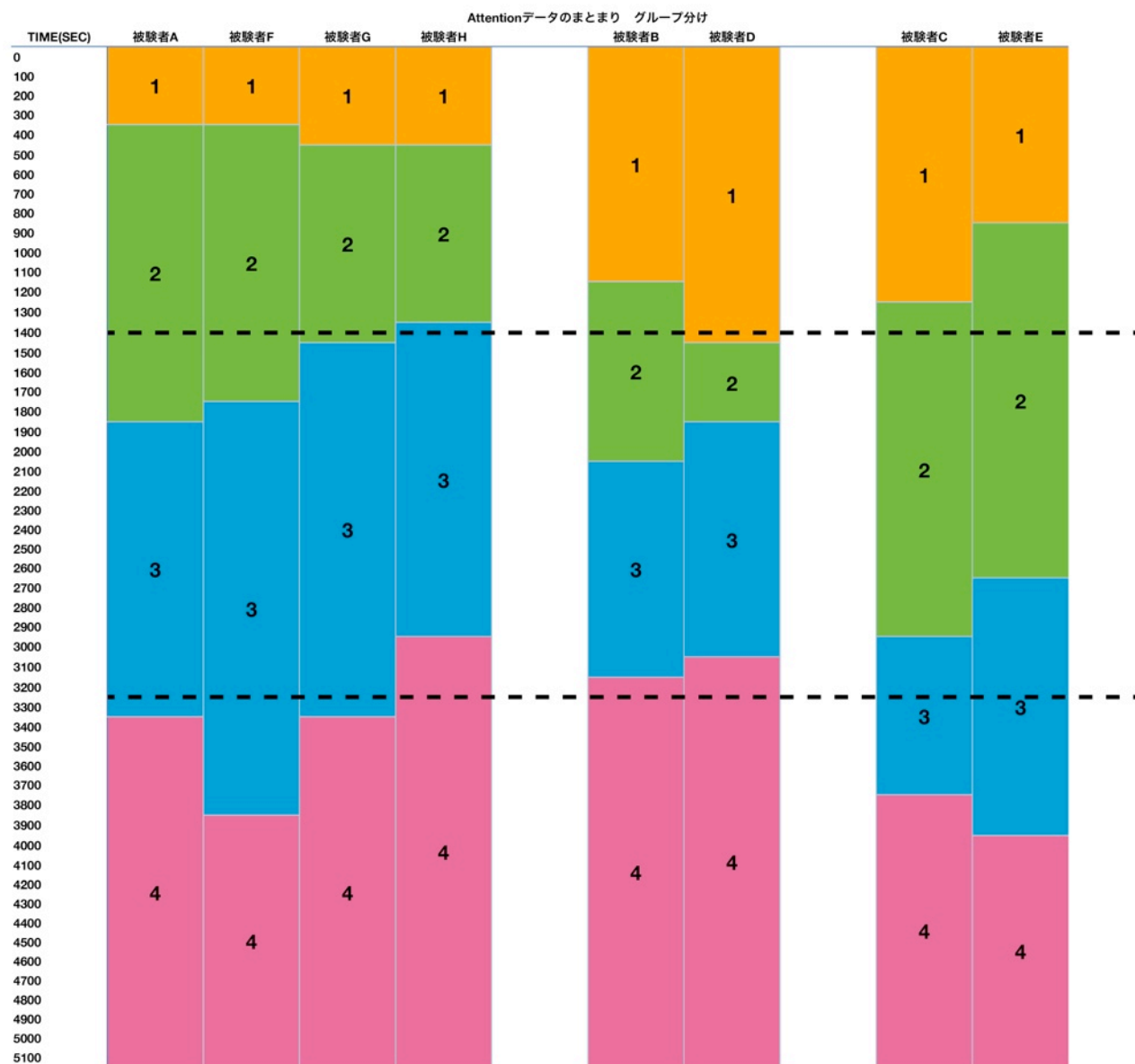


図59：Attentionデータのまとめり 三つの起伏

一つ目の破線はオープニングシーンの直後の家族の会話のシーンに当たる。二つ目の破線は男の子が光速を超えるシーンに当たる。

開演からオープニングシーン後の家族の会話のシーンまでが第一の起伏、家族の会話のシーンから男の子が光速を超えるシーンまでが第二の起伏、男の子が光速を超えるシーンから終演までが第三の起伏であると言える。

すなわち、多くの被験者において、『わが星』鑑賞における集中度には三つの起伏があると考えられる。

Meditationデータのまとめりについて、似た傾向を持つ被験者によっておよそ以下のようにグループ分けすることができる。

- ・被験者A、F
- ・被験者B、C

- ・被験者D、E、G
- ・被験者H

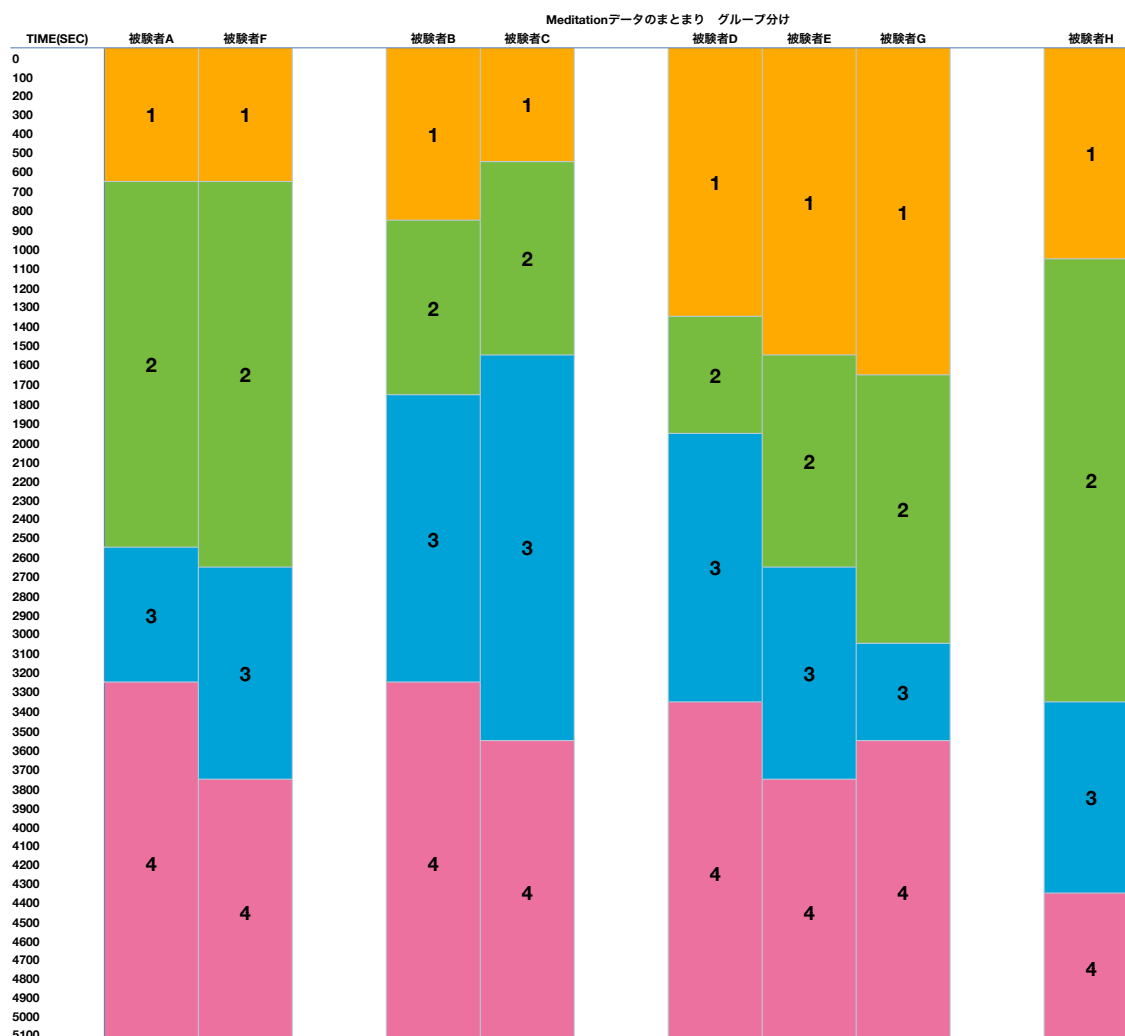


図60：Meditationデータのまとめ グループ分け

被験者A、Fのグループは、開演からオープニングが終わるまでが一つ目のまとめである。先生と男の子の会話、家族の会話、お婆ちゃんが死について語るシーン、引越し、月ちゃんとちいちゃんの出会い、月ちゃんとちいちゃんのままごとまでが二つ目のまとめである。先生と男の子の会話、家庭訪問、先生が光速の超え方を男の子に教えるシーン、男の子が光速を超えるシーンまでが三つ目のまとめである。ちいちゃんとお姉さんの会話のシーンから終演までが四つ目のまとめである。

被験者B、Cのグループは、開演からオープニングが終わるまでが一つ目のまとめである。先生と男の子の会話、家族の会話、お婆ちゃんが死について語るシーンまでが二つ目のまとめである。続いて、男の子が光速を超えるシーンまでが三つ目のまとめである。ちいちゃんとお姉さんの会話のシーンから終演までが四つ目のまとめである。

被験者D、E、Gのグループは、開演からオープニングシーン、先生と男の子の会話、家族の会話、お婆ちゃんが死について語るシーンまでが一つ目のまとめである。引越しから月ちゃんとちいちゃんの出会い、二

人のままごとのシーンが含まれるのが二つ目のまとまりである。先生が光速の超え方を男の子に教えるシーン、男の子が光速を超えるシーンまでが三つ目のまとまりである。ちいちゃんとお姉さんの会話のシーンから終演までが四つ目のまとまりである。

Meditationデータのまとまりを3つのグループに分け、以上のように整理した。ここから以下のようなことが分かる。

- 1、被験者HのMeditationデータのまとまりは、他の被験者との共通性があまり見られない。
- 2、被験者A、Fのグループと被験者B、Cのグループの一つ目のまとまりは、ほぼ同じ箇所で見られる。被験者B、Cのグループの二つ目のまとまりの終わりと、被験者D、E、Gのグループの一つ目のまとまりの終わりはほぼ同じ箇所である。また、被験者A、Fのグループと被験者D、E、Gのグループの二つ目のまとまりの終わりもほぼ同じ箇所である。さらに、被験者A、Fのグループ、被験者B、Cのグループ、被験者D、E、G、のグループの四つ目のまとまりは、ほぼ同じ箇所から始まっている。

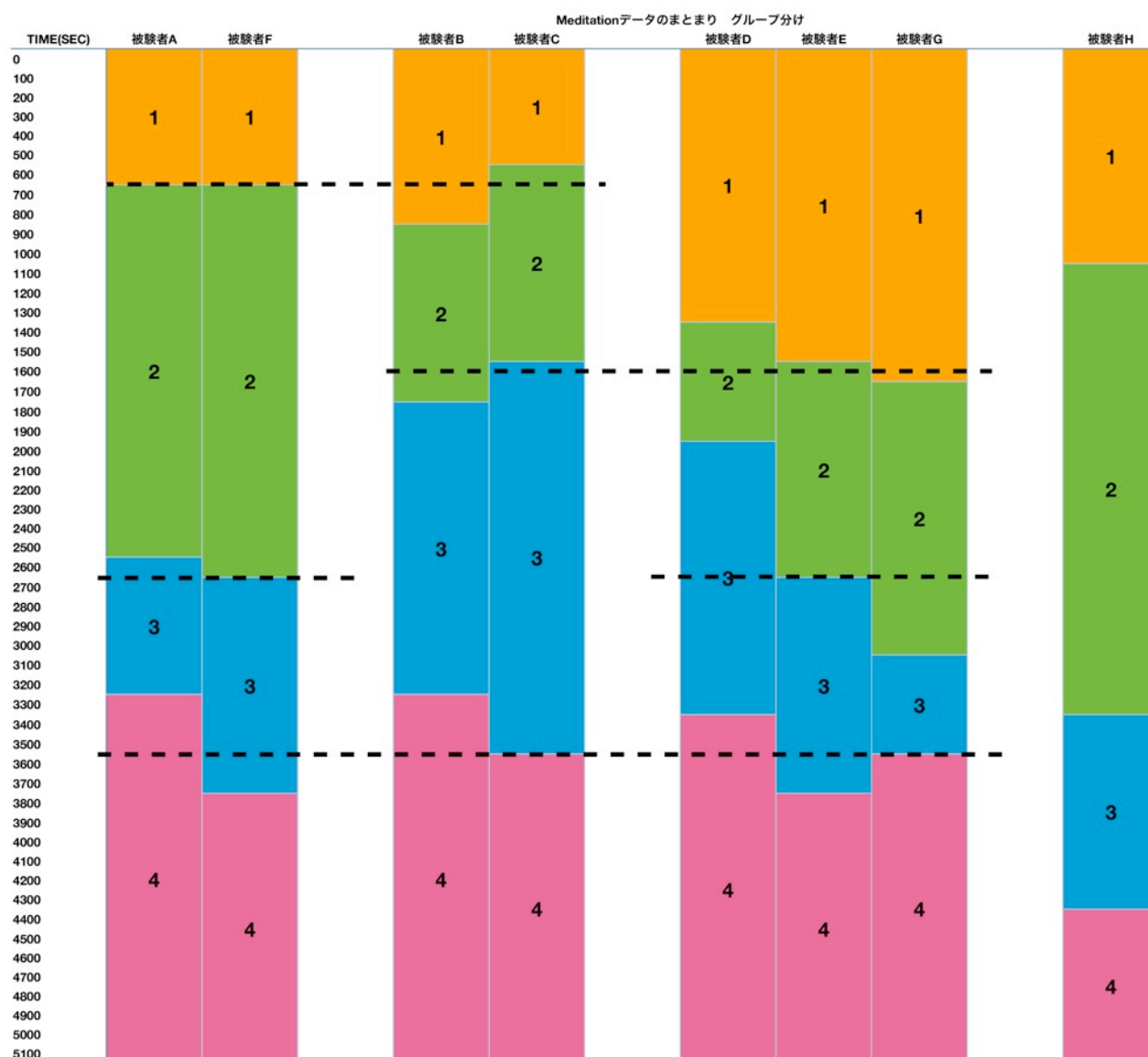


図61：Meditationデータのまとまり 五つの起伏

二つ以上のグループにおいて共通するデータのまとまりの区切りを図示すると、開演からオープニングシーンの終わりまでが第一の起伏、オープニングシーンの終わりからお婆ちゃんが死について語るシーンまでが第二の起伏、お婆ちゃんが死について語るシーンから月ちゃんとちいちゃんのままとまでが第三の起伏、月ちゃんとちいちゃんのままとからラストシーン直前までが第四の起伏、ラストシーンから終演までが第五の起伏であると言える。

すなわち、二つ以上のグループにおいて共通するデータのまとまりの区切りを総合すると、『わが星』における瞑想度には五つの起伏があると考えられる。

Zoneデータのまとまりについて、似た傾向を持つ被験者によっておよそ以下のようにグループ分けすることができる。

- ・被験者A、F
- ・被験者B、E
- ・被験者C、D、H
- ・被験者G

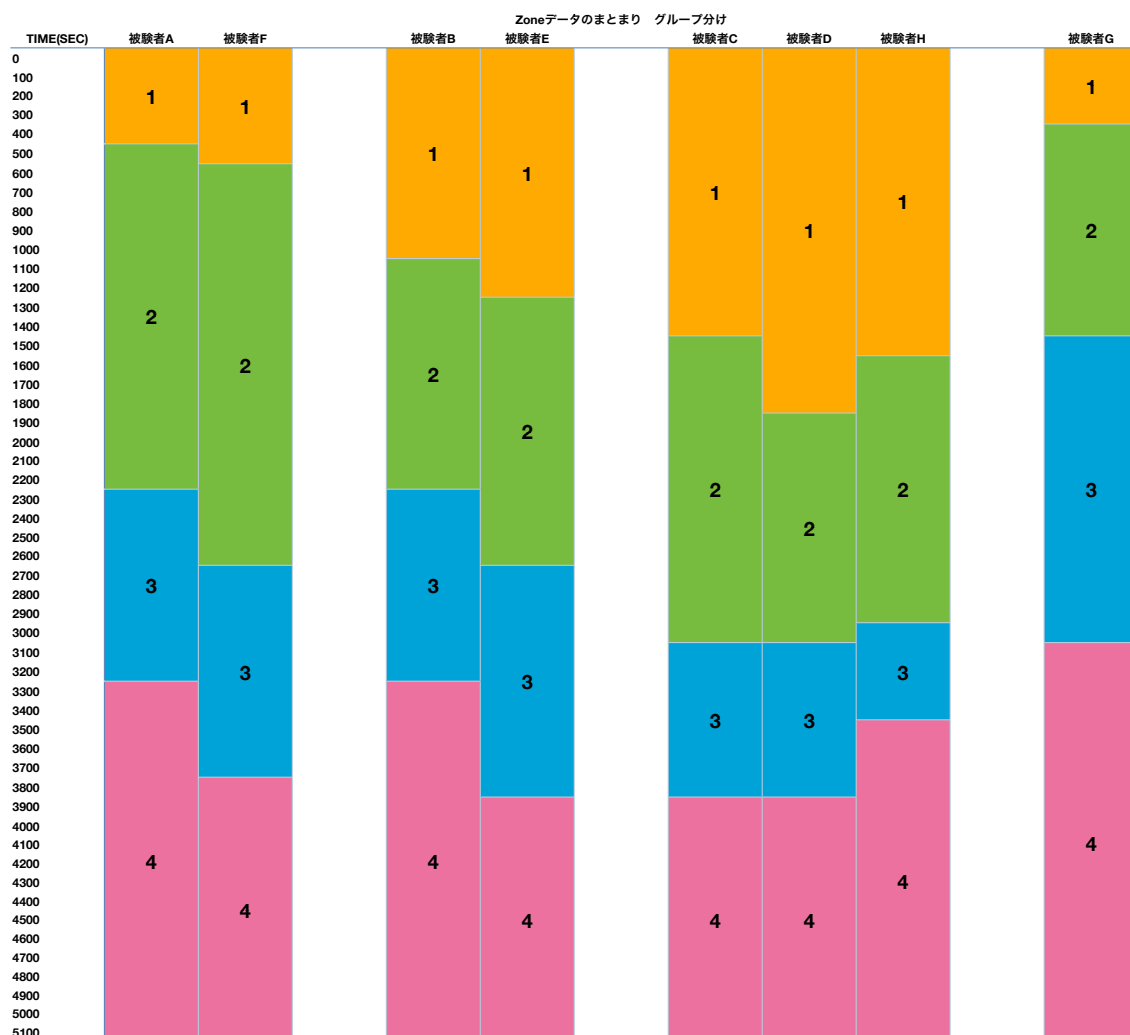


図62：Zoneデータのまとめり グループ分け

被験者A、Fのグループは、オープニングシーンの終盤、照明が赤くなる箇所までが一つ目のまとめりである。続いて、月ちゃんとちいちゃんのままごとの終わりまでが二つ目のまとめりである。先生が男の子に光速の超え方を教えるシーンまでが三つ目のまとめりである。男の子が光速を超えるシーンから終演までが四つ目のまとめりである。

被験者B、Eのグループは、開演から家族の会話の中盤までが一つ目のまとめりである。続いて、月ちゃんとちいちゃんのままごとの終わりまでが二つ目のまとめりである。男の子が光速を超えるシーンからちいちゃんとお姉さんの会話のシーン切りまでが三つ目のまとめりである。お姉さんの独白から終演までが四つ目のまとめりである。

被験者C、D、Hのグループは、開演からお婆ちゃんが死について語るシーンまでが一つ目のまとめりである。月ちゃんとちいちゃんのやり取り、家庭訪問のシーンが二つ目のまとめりである。男の子が光速を超え、ちいちゃんとお姉さんの会話が終わるころまでが三つ目のまとめりである。お姉さんの独白から終演までが四つ目のまとめりである。

Zoneデータのまとめりを3つのグループに分け、以上のように整理した。ここから以下の様なことが分かる。

- 1、被験者GのZoneデータのまとめりは、他の被験者との共通性があまり見られない。
- 2、被験者A、Fのグループは、一連のオープニングシーンの途中でゾーン度が低下している。
- 3、AttentionやMeditationのデータのまとめりで見られた、何人かの被験者に共通するデータの区切りの傾向は、Zoneにおいてはあまり見られない。

また、被験者HのMeditationデータを除く全てのAttention、Meditation、Zoneのデータのまとめりににおいて、四つ目のまとめりはちいちゃんとお姉さんの会話のシーン、お姉さんの独白、お父さんとお母さんの会話、先生とちいちゃんの電話、月ちゃんの手紙、最後の家族の会話、ラストシーンを含んでいる。物語が終盤に進むことで、集中度、瞑想度、ゾーン度全てがある程度の水準で維持された状態で鑑賞できていると考えることができる。

## 6、結論

### 6-1、まとめ

8名の被験者に対し行った実験により、『わが星』を鑑賞している間の被験者の集中度、瞑想度、ゾーン度を計測した。

被験者別に考察を行った5-1から、音楽のある、なし、「見立て」の演出、歌を歌う演出、ラップの演出、会話量の多少、シーンの起伏、物語におけるシーンの意味合い（「死」の概念の提示、ちいちゃん＝地球の気づきなど）、音声の明瞭さ、照明の変化などが集中度、瞑想度、ゾーン度に影響を与えている可能性を示した。

被験者共通の傾向を考察した5-2から、被験者の集中度、ゾーン度の起伏にある程度の共通性を見出した。また、ちいちゃんとお姉さんの会話のシーンから終演まで、被験者の集中度、瞑想度、ゾーン度が一定の水準で維持されていることを示した。



## 6-2、今後の展望と課題

脳波計測によって演劇作品を評価するという試みは、被験者にいくつかの共通した傾向が見られたことにより、ある程度客観的な考察を行うことができた。一方、課題も山積している。作品の時間と脳波データを照合するこの実験では、作品の進行と実際の脳波への影響にどれほど時間差、個人差があるかを考えなければならない。また、実験中の被験者の「疲れ」がどれほど結果に影響しているのか調べる必要がある。今回の実験ではAttention、Meditation、Zoneという、NeuroSky社の規格を用いた。この3つのパラメータでも十分客観性のあるデータが採集できたと感じているが、アルファ波、ベータ波といったパラメータを使用した実験も行うべきであろう。

## 7、参考

柴幸男「わが星」 2010年4月24日 白水社  
柴幸男、ままごと、三浦康嗣「わが星『OUR PLANET』」(DVD) 2011年5月4日 play/HEADZ  
宮永琢生(ZuQnZ)「わが星 OFFICIAL BOOK -TIME CAPSULE-」 2011年4月23日 ZuQnZ  
柴幸男「あゆみ[完全版]」 2011年12月1日 株式会社星雲社  
柴幸男、太宰治「朝がある」 2012年6月29日 ままごと  
青土社「ユリイカ2013年1月号 特集=この小劇場を観よ2013」2012年12月27日  
玉崎紀子、酒井正志「欧米演劇を探る -オペラ・ミュージカル・ロンドン演劇-」2002年4月1日 株式会社勁草書房  
柳谷晃「手にとるように統計学がわかる本-身近にちらばる数値のカラクリ」2004年8月 かんき出版  
上田太一郎 監修 上田和明、菊田正雄、淵上美喜、高橋玲子、古谷都紀子 共著「Excelで学ぶデータマイニング入門」2005年11月 オーム社  
涌井良幸、涌井貞美「初歩からしっかり学ぶ 実習 統計学入門 -Excel演習でぐんぐん力がつく」2010年12月10日 技術評論社  
市川忠彦「新版 脳波の旅への誘い-楽しく学べるわかりやすい脳波入門」2006年5月 星和書店  
坂巻資浩「脳波計測による感情解析を用いたヒューマンインターフェース評価手法の研究」1996年度 慶應義塾大学 大学院 制作・メディア研究科 修士論文  
劇団ままごと <http://www.mamagoto.org/>、2013年6月25日アクセス  
小劇場レビューマガジン ワンダーランド wonderland<http://www.wonderlands.jp/>、2013年1月20日アクセス  
白水社「第54回岸田國土戯曲賞選評(2010年)」 <http://www.hakusuisha.co.jp/kishida/review54.php>、2013年6月25日アクセス  
脳の4つの状態-脳波-<http://www.crescentmirror.com/hmusic/brainwave.htm>、2013年7月8日アクセス

## 8、資料

### 8-1、柴幸男、宮永琢生へのインタビュー調査

インタビュー実施日時：2012年12月5日 13:00-14:00  
インタビュー対象：柴幸男、宮永琢生  
会場：カフェミヤマ 渋谷東口駅前店  
(敬称略)

石井：まず前提として、卒論以外の目的ではこの録音は使用致しません。必ず言うように先生から言われたもので。

研究では、もともとは野田秀樹さんをテーマに最初の2年ぐらいはやっていました。そこからやはり、僕は『わが星』の再演から初めて観た形になるんですけど、自分が観た中で一番よかったものをテーマにしないと研究はうまくいかないなって思って、そこからテーマを変更していったという経緯になります。

まずは、『ファンファーレ』お疲れ様でした。

柴：ああ、お疲れ様でした。ありがとうございました。

宮永：ありがとうございました。

柴：仕込みとか手伝ってもらって。

石井：自分のブログみたいなものに、感想をいつも書いてるんですけど。

柴：あ、そうなんだ。

石井：そこでまさかの伊藤さんの名前を間違えてたっていう。ドラマトゥルクの野村さんに。

宮永：伊藤奉行って書いてあったやつですか。

柴：伊藤奉行

石井：『人生』さんに引っ張られて文字変換を間違えてしまって。申し訳なかったです。

今回『ファンファーレ』の話と『わが星』の話を中心にさせていただきたいと思っているんですが。

先日『リクウズルーム』のプレトークイベントにも参加させていただいて。その中でソートン・ワイルダーの話になって。その時に質問ありますかみたいな時に、あの時でかい地震が来て、質問するチャンスを失ったまま終わってしまったんですけど。

ソートン・ワイルダーの『わが町』でも舞台監督役っていうのがあって、それが今回の『ファンファーレ』で『5 \$』さんってそれにすごいそれに近いなって思いながら観てたんですけど。そういうお客さんに俯瞰させるような視点を持つ人っていうのがよく出てくるなと思うんです。あれはちなみに、『5 \$』さんっていうのはどのような意図で……。

柴：あれは誰がそうやって言い出したかな。役がなかったんですよね、『5 \$』さんだけ。キャスティングした時に、キャスティングというかストーリーキャスティングをする時に、なんかあんまり別にもう人いいな、足りてるなってなったから、どうしようかってなって、じゃあなんでも出来るからなんでもやるやつにしようってなったんです。だから全然そんな意図はないです。あの『5 \$』に関しては。だってあんまり俯瞰してくないですか。

石井：まあそうですね、醤油を出してきたり……。

柴：言ってもそんな。

石井：それでも俯瞰する感じはやっぱどの作品にもあるのかなって思うんですけど。

柴：なんか、苦手なんじゃないですかね。入り込むのが。

石井：プレトークの時に、なんでもないもの、透明なものを並べるのに飽きてきたというのをおっしゃっていたんですけど。

柴：飽きたというか、新しい並べ方が今あんまり思いつかないなっていうのはありますよね。

石井：演劇作品を作るときに、柴さんはまず面白い仕掛けを最初に思いつく方なんだなという感じがするんですけど。その面白い仕掛けが、ただの奇抜な演出ではなく、脚本上に結局フィットしていくようなところがあると思います。その最初の面白い仕掛けが作品上で作用していくのは、どのような意図をもって稽古場でやっていっているのでしょうか。

柴：要はその最初に考えつく仕掛けというかアイデアは脚本の時間の流れ方というか構造のアイデアなので、見た目のアイデアでもあるんですけど、見た目の中の中心の軸と同じになるように考えて。むしろその展開の仕方っていうものだけを考えているっていてもあれじゃない感じなので。だから、フィットしているというか、それはもちろんそうなんですけど、むしろ逆に内容とフィットしないことのほうが多いですね。その、展開の仕方はあるけれども、中身がなんだといいんだろうというのはすごく悩むところです。

石井：例えば時間の流れ方と見た目というのは、『わが星』で言えば円形になっていて、お客さんが周りを囲んでいてということですか。

柴：いや、そういうことじゃなくて、それは本当に見た目なんですけど、『わが星』で言ったら九十分もなにか、八十分と百年と百億年の錯覚というか、同じ八十分を体感しているけど百年を体感しているようにも百億年を体感しているようにも感じる、錯覚する時間の図みみたいなものを、時間の図というかそういう現象

が起こるんだっていうことはなんとなく最初に考えます。図というか、積み木みたいな、パズルみたいな。パズルというか造形というか、立体的な形みたいなものを考えて、後からその地球は女の子で、とか。

石井：細かい設定が作られる。

柴：そうそう。九十分を百億年と錯覚するとか誤認するっていう仕掛けっていうか。その造形と色合いとかその……。

石井：トーンとか。

柴：トーン。それで家族の話であるとかっていう重なりっていうのは、勘ですよ。普通同時進行で考えるんじゃないですか、脚本の人は。でも明らかに僕のは構造とか形のほうが先っていう。

石井：一番最初の仕掛けを考えつくときに、そこの先読み、先読みじゃないですけど、そこまで行けそうっていう……。

柴：いや、だいたい無理ですよ。形を思いつくんですけど、中身は後で考えますよね。どういう中身が一番その展開にフィットするのかっていう。それを思いつかないと書くあれがそもそもないですよ。駆動するエンジンみたいなものが、誰かの感情とかだとあんまり書く動機にならないっていうのはすごくありますね。ストーリーとかでもいいんですけど。

石井：それはやっぱり作家としても演出としても、お客さまに提示する造形が創作の肝になって始まっていくんでしょうか。

柴：そうですね。お客さまにっていうのはあんまりないんですけど、いわゆる直線的なお話のストーリーラインっていうのは上手く出来ないというのは分かっているんで、そうじゃないものを作りたいとか、そうじゃないと意味が無いとか。そう考えると、その新しい、新しいかどうか知らないですけど、僕にとっては今まで観たこと無いお話の展開の仕方とか形が最初に思いつく。そのほうが考えやすいんですよ。こういう世界観で、こういう人たちがいてこういうことをしてる人たちがいるっていうのは、全然思いつかないっていうか。どうでもいいって言えばどうでもいい。どうでもよくないですけど。

石井：その点『ファンファーレ』はそういう世界が他よりもがっちりあったなと。あれはやはり他の演出家さんとの……。

柴：そうですね。あの世界観の感じとかは、僕は全然。僕もイメージは出してますけど、僕だけのイメージじゃないし。あの『ファンファーレ』の形は全然。まあ単純にお団子が三つならんで、時間も全然巻き戻らないけど。ちょっとだけ三幕の結婚式のシーンだけへんてこりんですけど。あとは全然変化ない感じに。まあ、縛ったとか、一直線でできるところまで、遊んでみるっていうのをやったという感じです。まあへんてこりんの形って言ったら本当に全部の話になってくるんで、それこそ照明とか音響とか美術とか含めてトータルコントロールしないと初手の骨組みとか形がもう見えないと思うので、いわゆる誰が観ても分かるストーリーの進行方向にしたんだとは思んですけど。

石井：『ファンファーレ』のパンフレットに、バキッとウソの世界を描きたいみたいに書かれてあって。

柴：ええ。

石井：それは柴さんの意向で？

柴：それはありますね。それは僕のあれですね。でもやっぱ憧れますよね。SF的世界とか。SFじゃなくてもいいんですけど、ウソの登場人物を出すっていう。ウソから考えるとか。お伽話的なものをやるっていうのは。

石井：今まであまりやってなかったから一度チャレンジしたいという……？

柴：まあそうですね。別にファンタジーの世界観もどうでもいいっちゃどうでもよくて。普通のお話を考えるっていう頭の使い方ですね。

石井：先ほど宮永さんとおしゃべりしていたのですが、僕は再演の『わが星』以降にやっているのは全て観ているんですけど、『あゆみ』と『テトラポット』と『朝がある』と『ファンファーレ』なんですけど。

『テトラポット』みたいに組織図が違うやつは演出を意図的に変えているみたいな話で。演出とか趣向とか。

柴：いや、今年がいろいろ試してみる、試しのあれだったの。『あゆみ』はかつちりやった感じなんですけど。今年いろいろ作り方を試すとか、こっち方向やってみたい、こっち方向やってみたいというのが分かれていて。そういう意味では、『テトラポット』はちょっと変わった感じになりました。

石井：『テトラポット』を観た時に、確かにちょっとなんかいつもと違う雰囲気だなと思って観ていたんですけど。

これはいろんな人に言われることだと思うんですけど、やっぱり音楽がすごい中心にある。『テトラポット』だとボレロがあつて。やっぱりそこは変わらないんだなあと思いながら観ていたんですけど。

序盤のあれがすごいおもしろいですよね。ザーって。

柴：少年王者館という劇団が前やってて。その波打つ時間、真ん中まで行って折り返していく感じを出せないかなあと思って。なかなか難しい感じはあったんですが。

石井：柴さんとスタッフとのやり取りを、僕スタッフなのでどうしても見てしまうんですけど、『テトラポット』の序盤も相当すごいスタッフワークだなあと思って観てました。暗転がすごい挟まるやつですね。

『朝がある』も相当激しいことをされるなあと思いながら観てたんですけど。

柴さんのひとつ大きな特徴として、言葉をかなり独特な見方で分解するところがあるなあとか。『朝がある』とか。

柴：『朝がある』はそういう感じですね。

石井：スタッフ込みの演出をする時に、例えば『朝がある』はどういった考え方で繰り返しの……。

柴：スタッフに関してですか？

石井：繰り返しをやるときに、役者だけでなくスタッフの色付けがあつたと思うんですけど、作っていく時にスタッフとはどのような……？ あれは柴さんだけのアイデア？

柴：いや、みんなで作っていった感じです。みんなでつてわけでもないですけど。でも照明の感じとかは照明の小木曽さんという方に出してもらって。ただ、現場で変えて変えて。だから、繰り返しになってる、繰り返しというか何周も何週もぐるぐると週が大きくなってく感じなので。そのおおまかなルールはあります。分解を分けないで大きく出して見せるっていうのと、照明が今度はちょっと軸が変わってて飛ぶっていうのと、そこに映像が絡んでくるっていうのにとっていう事象は分けてますけど。一個一個は割りとイメージは細かく言ってお願ひして合わせてくつていう。でも、そんなでもない。その時パッと出ておもしろかったものを合わせたりもするので。

石井：今の話もそうですけど、いつも遊び心が稽古場で溢れてるんだらうなって。

柴：そんなことはないですけど。

石井：遊び心と関係するんですけど、僕は最初野田秀樹さんの『赤鬼』っていう作品をテーマにしてたんですけど。

柴：僕『赤鬼』観たことないですよ。あの4人でやるやつ……？

石井：4人です。3人と外国人の方一人でやるやつなんですけど。研究の一番最初の時に、野田秀樹さんとすごく近いところが一個あるなと思って。野田秀樹さんがよくダジャレみたいなのをやって、イメージをやつてく。柴さんのやつは『わが星』で言えばちゃぶ台というか円卓とテレビのあるシーンが繰り返される。そしてお客さんに80分以上のものを想像させるところがあると思います。変な質問なんですけど、柴さんが野田秀樹さんの作品をどう見るのかという。

柴：面白いですよ。僕そんな生で観たことないですけど、映像、テレビのやつはよくたくさん観てますけど、すごい好きですよ。たぶん。野田さんの芝居面白いと思います。

言葉遊びみたいなやつ、すごいと思いますよ。僕のやつより全然。僕がやってることとは違うと思いますけどね。野田さんのやってる言葉の展開してく感じって。言葉自体が先に繋いでつていったりするじゃないですか。話を展開させるために。僕はないと思うんですよ、それ。言葉は多少変えたり遊んだりしますけど、言葉の遊びによって劇が駆動するみたいなことって、あんまないと思うんですよ。起こってる現象を言葉遊びがすごくわかりやすくさせるとか、景色見えやすくするっていうのはやってると思うんですけど。だから、全然違うんだらうなと僕思いますけど。好きですけど。

石井：言葉に対する意識の持ち方というか、文脈の中の言葉をフラットにして、こうするというのが近いな、と。

岸田戯曲賞の劇評の時に、野田さんが一番褒めてらっしゃって。

柴：野田さん褒めてくれました。

石井：ご本人がこの作品の柴脚本は「ずらし」だみたいなことを言っていて。

柴さんご本人が思う、一番やってることが近いなって思う方って……？

柴：やってるのが近い、ですか。

石井：演出もしくは脚本を書くときに、志してるものが近い人とか。というとなかなかいないなと思いながらいつもいろんな作品を観てるんですが。だいぶ独特ですよ。

柴：そういう意味では、『わが星』のときと『エブリデイ』のときの三浦さんは多分すごい考えてることとかやろうとしていることが似てるんだと思いますけど。後から言われてそう思いましたけど。三浦さんがそう言ってくれたのもあるんですけど。

違うことを演劇と音楽でやろうとしてるのかなというのもあるし。

石井：普段はどういった作品を好んで観てらっしゃいますか？

柴：演劇ですか？

石井：はい

柴：演劇は、三谷幸喜とか。観てないですけどね、最近。昔は好んで観てました。あとKERAさんも好きでした。シチュエーション・コメディものというか、割りとしつかりした構造というか設定、形のあるものの方が好きだったと思います。王道というか、ウェルメイドのやつ。

石井：ご自分でやる時は。

柴：できないですね。やりたいですけど。

石井：ああ。先ほどのプレトークでの、何でも無いものを並べるのに飽きたっていう。今後そういうものをやっていくのは……？

柴：飽きたっていうか、それはできるので。それともうちょっとプラスアルファしていきたいなというのはありますね。

石井：柴さんはよく言われることだと思うんですけど、作家としての能力と演出としての能力は違うというのがあってと思います。柴さんは両方やれるというか、そういうところがあると思うんですけど、ご自分でやっていて自分の強みというか、強くやれるのはどちらの能力が秀でていてと思いますか？

柴：脚本の方の力が欲しいんですけど。どちらかと言えば劇作家になりたいんですけど。ただやっぱ演出の方なんじゃないですかね。なんとなく思うんですけど。溶かしてるんだと思います。戯曲だけの能力がそんななかったの、劇作家だけでやろうと思った時に。演出の能力を溶かして台本に混ぜ込んでる形が、今のその脚本の見せ方の形をやってるんだと思います。溶かしこめたらもしかしたら劇作家だけでもう一回なれるかもしれないんですけど。どう溶かしこんだらいいか今模索中ですけど。

作家になりたいですけどね。多分演出家の方の筋力の方が多分高いだろうなと思って、非常に嫌です。嫌っていうか、分かんないもんだなって。欲しいところに能力ってないですよ、自分の。

石井：岸田戯曲賞を受賞されてるじゃないですか。リクウズルームの佐々木さんが、いつもお会いする度に岸田戯曲賞が欲しいって言ってます。

柴：そうなんですか。知り合いなんですか。

石井：二、三回現場を一緒にやっています。

そういう所で言えば作家としての力があると思うんですが。

柴：岸田戯曲賞も結局、演出が溶けた『わが星』という台本ですからね。演出賞ってないですから。だから、しょうがないんじゃないですか。新人演劇作家賞になってるから、もう。しょうがないんじゃないですか。それは。

石井：そっちでしか受賞できない。

柴：という以外賞はないですからね。

石井：ドラマトゥルクに野村さんがいらっしゃる訳ですけど、野村さんは作品作りの時にどのような関わり方をしているんですか？

柴：作品ごとに違いますよね。野村さんが勝手に考えて動いてくれてます。ここの壁に穴が開いてないなって所を開ける仕事をしてってくれてると思います。

石井：『ファンファーレ』の時は。

柴：そのときもそうですよね。現状今もまだ動き続けていて。例えば地域の参加の人にアンケートとって集めたりとかっていう。そういう、その部分の発想とか構造が、やってないなとか穴があるなっていうところを掬ったりちょっとつついたりするようなことをやってってくれてるのが野村さんのドラマトゥルクのやり方って感じがありますね。

石井：野村さんは脚本が上がった後から関わり始めて……？

柴：いや、そんなことはないですね。それは内容の面でも同じで。

石井：ここをもっと穴を開けていこうみたいなことがあれば。

柴：そんな言い方はしないですけど、それ以外のカードもあるんじゃないかっていうことは伝える。方向性の可能性をできるだけ広く取ろうとはします。決定するのは仕事じゃないと思うので、分かんないですけど。決定するのは書いてる人だったり、役者だったり、演出家だったりするので。それ以外の決定の幅を常にどれだけ広く取れるかというのはやっていると思います。

石井：これもよく言われていることだと思いますが、少女の描き方がうまい作家だと言われることがあると思うんですけど。演劇サークルに入ってますが、うちの劇団員に「これを見なさい」と言って一緒にDVDを見せた時に一番評判がいいのが『あゆみ』なんですけど。

柴：『あゆみ』は何の？

石井：EKKYO-Rimix。おまけについている。

柴：短編のやつ。

石井：あれいつもすごい評判いいんですけど。

柴、宮永：えー。

石井：えっ?! そういう感じなんですか。

柴：いや、分かんないですけど。そうなんですか。

石井：そうなんです。女の子がいつも好きだって言います。

人の描き方みたいな時に、少女を選ばれるというのは、どういう……？ 『わが星』もそうですね。

柴：手癖じゃないですかね。書きやすいし演出しやすいんだと思います。男の子より。

石井：少女を描くと、実際の女の子は「そういうんじゃない」みたいな反応が女の子本人から来るものなんですけど、例えば『わが星』とか『あゆみ』を見せると、「ああ、そうなんだよ」みたいなことをよく言われます。

柴：それもどうかと思いますよ。どうかと言うか、男でも女でも対して違わないようなことしか書かないように意識しているから、かなり補完できるように書いているので。ヒントしか書いてない、逆に言うと。もっと直接的な具体的なエピソードの詰め方をしていけば、どんどんどんどんキャラクター性は立って行っ

て。

石井：反発が出てくる。

柴：そうそう。ただもうちょっと熱狂的に「私だ」と思う人もいると思うし、反発するけど「私だ」と思うかもしれないし。物語の登場人物がキャラっぽくなるんですけど。言っても『あゆみ』のキャラとか、『わが星』のちーちゃんも、キャラはキャラとして一応ありますけど。こういう時こういうリアクションをするっていう。私とは違うっていうのはある。万人がするであろうリアクションじゃないリアクションもしますけど。言っても半透明に書いているので。なくても「こうかも」と思わせる感じで書いてるってのはあります。

石井：それはなるべく多くの人に共感されるように……？

柴：そういうのは後付けの理由で、そう書いた方が得意。逆に言うとあんまり人間ぽくない。何っぽいのか分かりませんが。概念ぽいんじゃないですかね。

石井：少女の概念。

柴：そうそうそうそう。そうなんだと思いますよ。ということだと。

石井：それは得意不得意という話で。

柴：の話で。別に書きたいと思ってるかどうか僕も分かんないですけど、そっちの方が得意であったという事だと思いますね。

石井：先ほどからお話を聞いていると、柴さんが得意なもの、書けるものとやったらうまくいかないものに分析的だと思うんですね。

柴：そうですね。

石井：それは自分の中で作戦というか戦略というか。

柴：いやいや、そんな、後付けの戦略ですよね。戦略っていうか、反省ですよね。

石井：書いて行ったらこうなったから、自分はこれがうまいんだろうと捉えてきた。

柴：そうそう

石井：やりやすいというか。

柴：やっちゃうとか。概ねやりたいこととちょっと違うんですよね。たまにフィットする時があって、それが『わが星』『あゆみ』や『朝がある』とかってというような、再演をできるようになっていう。バシッと重なるような作品ができたりするっていうのはあります。だから、今までやった作品もズレてたんだってことは分かるので、そのズレを修正していくことはできるので。だから自分が失敗したなって思っている作品ほど再演したほうがいいんだってというのはよく思うんですけど。失敗というか。

石井：重ならなかった。

柴：うまくハメられなかった。

石井：『わが星』や『あゆみ』だと、初演のものよりも再演のものの方がより重ねるというか。

柴：いや、それも一概にも言えない感じはありますけどね。

石井：やっていったらたまたまうまく近づいていった。

柴：『わが星』は特に初演も再演も変わってないと思うんですよ。『あゆみ』はかなりまたちょっと方向性を変えている作品なので。一回バラして作ったけどハメられたって言えばハメられたので。そういう意味では透明が高いというか、懐が広いのは『あゆみ』の方だとは思いますが。

石井：ちょっと話がそれちゃうんですが、再演の『あゆみ』で思い出したんですけど。これは劇団の運営とも関わるんですが、会場選びってあると思って。『あゆみ』の横浜赤レンガの。あれはむっちゃフィットしたなと思ったんですね。

柴：そうですね。でもあれも偶然と言うか赤レンガを見させてもらって、もう絶対ここでやりたいと思いましたよね。

石井：『わが星』の星のホールも一度見てみて。

柴：あれは後出しです。あれは星のホールだから『わが星』っていうのをやろうとしたんです。

石井：あっ、そうなんですか。

柴：そうです、そうです。

石井：逆に。

柴：逆です。

石井：ああ、そうなんですか。

柴：そうです。もともと星の話はやりたかったんですけど、いつかやろうと思ってたんですけど。星のホールだから『わが星』っていうタイトルやろうかって言ったんで。そこはもう星のホールありき。

赤レンガは『あゆみ』をやる場所をなんとなく見てて、赤レンガすごい良かったんで。

石井：チョークの感じもいいなって。

柴：なんかハマルなとは思ってたんですけど、すごい良かったですね。僕もそう思います。

石井：今回の『ファンファーレ』はどちらかと言うと協力する劇場によって変わると思うんですけど。

柴：そうですね。

石井：ドラマトゥルクの野村さんがTwitterで「この小屋は音の反響が違うね」みたいなことをいろいろ書いていて。今回の4都市の公演で、それぞれの劇場で例えば一番納得のいった劇場といったらどうなるんですか。

柴：それぞれ各地良かったですよ。三重、高知も水戸も。

石井：僕はトラムと水戸しか行けなかったんですけど、水戸はだいぶ丸いんだなあと。

柴：そうですそうです。それぞれの劇場で納得のさせ方が違ったのは面白かったですね。やっぱそういうものですよ。三重は三重、高知は高知、水戸は水戸の納得のさせ方で、それは違って面白かったですね。

石井：それは劇場に実際入って立て込みながら……？

柴：いや、劇場と後は人ですよ。現地出演者の個性というか性格みたいなものが。16人の集団性みたいなものがやっぱりあるので。それで。

石井：水戸の時に、客席の中央に座って1234を数える。あれが円形の劇場からきたのかなと思いながら観てたんです。発想が。センターに座るっていうのが。

柴：あれは（しながさん）が考えたことなので。あそこが一番奥か。まあ両方やったのか。世界の中心にいてっていうので、やったんだと思いますよ。まあ丸いなってというのは常に意識していたと思いますけど。水戸に入る前から。下見はしていたので。

石井：ではけっこう出演者の方の発想って結構ある……？

柴：あると思います。

石井：これはイメージですけど、柴さんの稽古場を覗いたことはもちろんないんですけど、かなり最初の下地以外は自由にやらせるみたいなイメージがあります。

柴：そんなことはないです。

石井：そうでもない。結構かっちり決めていく……？

柴：演技の面ではあんまり言わないですけどね。何を下地とするかというのはありますけど。

石井：水戸版の4人目のファーレちゃんがむっちゃ可愛いなと思って観ていました。ああいうのも、配役というかどのようなキャラクターにするか毎回考えないといけないじゃないですか。小屋が変わるから。

柴：はい。

石井：そういう発想の拠り所というのは。

柴：それはもう3人で相談して決めました。人を見て。

石井：この子4人目のファーレにしようとか。

柴：とか。誰かが言い出したりとか。

石井：共通キャストがかなり色んなところから人が来ていますが、あれは『ファンファーレ』のサーカス感から……？

柴：いや、全然後から。オーディションなので。その場その場で面白かった人と、そうなったので。

石井：そのオーディションにそもそも役者以外の人も結構来たということなんですね。

柴：そうですそうです。それはもう歌もダンスも。音楽劇っていう触れ込みで募集したので。ダンサーだけの人ももちろん来だし、音楽だけの人も来たので。

石井：人生さんとか、普通にやっていたらまず出会わないであろう役者さんだと思って観てたんですけど。それもオーディションで。

柴：そうです。みんなオーディションです。

石井：僕観ながら、ああこれはきっとサーカス感を出すためにやってるんだと勝手に考えていたんですけど、そうではない。後付けでそうなっていった。

柴：そうですそうです。がちやがちやした人たちが残ったというのもありますけど。

石井：『わが星』の話になるはずが『ファンファーレ』の話ばかりしてしまっていますが。『わが星』の、ちゃんと申し上げていってませんが、何が面白いんだみたいなことが最初の動機になっているんです。柴幸男作品独特なものってというのは。それは芸術分野みたいなものはどうしても近いものが出てくるからなんとも言えないんですけど、一番純粋に独特なものは何なのかということをよく考えているんです。

柴さんご本人に聞くのはお門違いなんですけど、自分の作品に最も独特なもの。

柴：作品全体ですか、それとも『わが星』ですか。

石井：どの作品でも、です。

柴：特に無いんじゃないですか、作品全体に関するの。それぞれの作品には何か一個ずつあると思うんですけど。

石井：例えば『わが星』とかだと。いくらでもあると思いますが。

柴：音楽の同期ってというのはあったんじゃないですか。

石井：『わが星』までは一度使ったネタはもうやらないってことが書いてあったんですけど。やっぱりそれが独特さになるんでしょうか。

柴：逆じゃないですか。一個の仕掛けをずっとやった方が独特さになるんじゃないですか。

石井：卒論としてやっていって、いつも困ってるんですよ。何が、なんでこう面白いんだと。

柴：どの作品が。

石井：特に『わが星』です。

柴：バラバラだから。作品毎の面白さって。だってルール設定が全然違う。音楽使わない作品もあれば音楽使った作品もあるし。何か絞ったほうがいいんじゃないですか。



石井：『わが星』の。

柴：『わが星』何で面白いと思いますか。面白いと仮定して（笑）

石井：いや、そこは面白いです。本当に面白かったんです。

柴：面白いと仮定して。面白いというのもあれだと思うんで……。

石井：僕は4月20日に観たんですけど、それは予約して観に行ったんです。僕その前日までカンボジアに旅行に行っていたんですけど、たまたま。帰ってきて、僕は家藤沢なので、三鷹までだいたいあるんですが行って、これはやばいと思って。翌日立ち見で観て、やっぱりこれはやばいと思ってその次の日立ち見で観たんですけど。

柴：そんなに観たんですか。何でそんなに観ちゃったんですかね。

石井：そうなんです。僕それまでずっと芝居観てきて、確かに面白いけど、それだけだったんです。

ご本人を前にこんな言い方をするのはあれなんですけど、すごい、とにかく面白かったんです。何でだろうってというのがこの卒論の結果というか、結論になると思うんです。言われても困りますよね。

柴：いや、僕言っちゃてもいいなら言っちゃいますけど。それでも研究にならないと思いますけどいいですか（笑）

石井：柴さんご本人の思う最大の面白さというのは……。たぶん僕が感じているものとはちょっと

柴：違うんだと思いますけどね。

いや、音楽との同期性ということだと思います。それは単純にラップで言葉が同期してるというだけもありますけど、ストーリー自体が同期しているの。音楽に。

石井：ええ。

柴：だから、すごくよく出来たPVを観ているようなものだと思うんですよね。しかもそれは身体と音と、あと歌詞世界というか、言葉の世界観とかいわゆる戯曲がやっていた世界の同期と、音楽というか時間そのものと音楽の快感みたいなものが全部偶然にも一致して、波状で襲ってくるので。ある種の快感スイッチみたいなものが押されてると思います。脳波とか見た方がいいと思います。

意味と音楽のフレーズが100%ばっちり合わさりながら、長時間こっち側に来るとするのは、

石井：他でなかなかない体験。

柴：だと思えます。僕自身そう思います。何に近いんでしょうね。多分ミュージカルには近いと思います。ミュージカルは曲単位だと思うので、何に近いのか。多分PVとかミュージックビデオに更にストーリーとか演劇がくっついてきてる状態とか、延々くっついてるとするか。内包されているとか、どちらも取り込んでいる状態なので、演劇でも割り切れないしPVでも割り切れないものに飲み込まれている感じはあるので。それが何回も観てしまうっていう。面白い面白くないというのは他の『あゆみ』とか『朝がある』でもあると思うんですけど。しかも一曲なので。それにあるんじゃないですかね、『わが星』は。面白いとか何回も観てしまう効果が。

石井：PVみたいにまとまっているというのが、一つ好きな作品を挙げろと言われた時に僕が選んでしまう理由なのかもしれないです。初めて観た時にこれは珍しいと思ったのが、観客がすごく頭を動かしているんですね。自分が踊っている時みたいにこうやって最後聞いてたりするのがすごく珍しいと思いました。

柴：それはだから、同期して観たほうが楽しい、太鼓叩いて気持ちが高揚するのと同じで、人間がどうしてそうなるのか分からないんですけど。それが気持ちいいんじゃないですか。さらにそこに意味まで付いてくるから。音楽にノッてたら話までついてくるっていうのが。

石井：他でない体験とか。

柴：という結論になると思いますよ。『わが星』がどうして面白いかというのは。多分、実験してみたいと思いますけどね。ある一定のリズムを聞いていて、さらにそこに映像がついていて、同期した瞬間と同期しない状態でどう脳が変わるかとか。そこで言葉がついてきてどうなるかとか。という風にしたら、多分100%同期し続けられてもダメだと思うんですけど、そこに展開が生まれた時に、多分逃れられない快感みたいなものがあるんじゃないですかね。我々にはある程度。

石井：的確に言語化されてしまったような。

柴：それだと結論としてはつまらないと思うので、そこに文学性みたいなものをちゃんと盛り込んで論文にしてみたいと思う。それはあるんだと思います。外側と中身。だから、今ある普通の戯曲に音を後付けでつけたらいいのかと言ったらそうはならない。

石井：それコミコミで書いているから。

柴：そのどっちでもない状態に全部ゼロから組み立てるとそういうことが起こる。脳波というか、心臓の動悸でもいいと思います。

石井：それはすごい、慧眼というか。面白いかもしれません。DVDを観ていただいて脳波をとる。ここで快樂物質が出ている、みたいな。

ちょっと話がそれてしまうのですが、柴幸男さんは大学時代はどういった研究を。

柴：卒論ですか。卒論はドラマ、三谷幸喜の台本の構成とかをプロット分解したりして、笑いと演劇の両立ってというのは可能なかみみたいなことをやりました。

石井：なるほど。リクウズルームの時の音響のオペの方が日芸の出身の方で、日芸ってどうなんですか？

みたいな話をした時に、やっぱり最近だと柴さんが皆言うよねみたいな話をしています。

柴：へえー。

石井：ちなみにリクウズの佐々木さんとは青年団つながり？

柴：そうです、そうですね。後は岡崎藝術座で佐々木さんが出ているのを観たり。

石井：ああ、役者で。あの、青年団演出部での繋がりというのは、佐々木さんは今は違うんですよね？

柴：違うんじゃないですか。僕もよく知らないんですけど、多分違うと思います。

石井：プレトークみたいなイベントだけではなくて、昔慶應の創像工房 in front of.で、脚本のワークショップをされたと。

柴：ええ。

石井：そういうのは今もされているんですか？

柴：頼まれたらやります。創像工房 in front of.は誰が呼んでくれたのかな。誰かが呼んでくれたからやったんです。

石井：もう今は卒業されている方たちらしいです。今後卒論をやっていくにあたって、惜しいことをしたなみたいなことを思いながら聞いていたんですけど。

それでは最後になるんですけど、観客と見せる側があつた時に、柴さんは観客をどう捉えているのかなというのをお話を聞きながら思っていて。あんまり観客にこれを感じてほしいんだみたいな風な創作意欲で始まっていないのかなと感じるんですね。観客をどう捉えて作品を作ってらっしゃるのか。

柴：自分が最初に考えた時間の展開の仕方の快感っていうのを僕が思いついた時に考えているので、それを感じてほしいだけです。単純に。

石井：快感。

柴：別に快感を感じてほしいわけではなくて、その話の展開の時の自分が……

石井：意図したこと。

柴：いや、それを受けた時の自分の視覚とか聴覚とか頭の中の感覚の感触というか、感じたことを体感してほしいかんじです。一緒に。僕自身が体感したいというのがありますけど。形として。

石井：それも柴さんに独特なことなのかなと思うんです。色んな演出家さんの話を聞くときの感じと、お客さんとの接し方みたいなものが独特なのかなっていう風に、お話をお伺いして感じました。

柴：どう思ってるんですかね、他の人は。

石井：多いのは、もっとシンプルというか、ここで笑ってほしいとか、ここでどうしてほしいっていう脚本もしくは演出上の狙い。まあ、言ったら同じになるのか。

柴：細かいこと言えばそうかもしれないですけどね。どういう動機で脚本書くんですかね、みなさん。

石井：例えば岸田戯曲賞の劇評で野田秀樹さんが書いてましたが、野田さんは寂しさを感じると。それは柴さんが最初に書いた時に意図したものとは違う？

柴：いや、それは一緒ですけどね。でも寂しさを伝えたいから書いたわけではないです。どうなんですかね、寂しさを伝えたくてみんな書くんですかね。寂しさというか。

石井：僕は『わが星』を観た時には、

柴：いや、『わが星』はいいとして、他の作家さんが。どうなんですかね。何かの感情を伝えたくて書くんですかね。いや、単純に。野田さんて例えばどういうモチベーションで台本書くかとか調べた中で何かあったりしますか。

石井：いや、見たことないですね。あんまりそういったことに言及しているものは。

柴：あ、そうなんですか。何発信なんでしょうね、野田さんって。言葉遊びはそれはあるとして、タイトルとか、もしくはシーンなのか。

僕の場合は図はありますよね。図とストーリーというか、感情的なことを別途で。

石井：図というのは、書き始めるの最初の。

柴：うん。何から皆書き始めていくんだろう。分からない、知らないで書いていく人もいるでしょうね。不思議ですね。

石井：その観点、例えば他の演出家さんにお伺いしても面白いと思ってきました。

柴：仮説は何かあるんですか。『わが星』の。何で読み解いたら面白いのか。

石井：作家性というか特徴が出てくるか。

柴：うん。例えば今まで色々批評というか評論が多少はありますが、何で割り出したら面白いと。

石井：今までは細かい所を見てきたんです。最初は野田秀樹さんの方から始まっていたので、シーンを繰り返すこととかをまず見始めた。あとは『朝がある』で言えば言葉を区切ることも特徴だなと思って見ていました。最近はずっと大きな見方をしないと見えてこないなと思い始めたところで行き詰っていました。

柴：なるほど。

石井：すごい今はとさせられるようなお話をお伺いすることができました。

柴：僕も意図しないぐらいはとした論文だと嬉しいですけどね。割り算か掛け算が分からないですけど、『わが星』をもし割って、何か解を出すなら、それこそ何で割るかが結構面白いなと。それこそラップで割ったり音楽の同期性で割ったりとか。そういう誰しも感じる共感性みたいなもので割るっていうのも結構あると思いますね。せつかくあなたが書くんだから。

石井：違う切り口で割り算を。

柴：その割り算元を探しまわってもしょうがないと思う。仮説の実証に向かうのが論文だと思うので。思いつかないなら無理して捏造しないでいいと思いますよ。別の何か。

石井：何かひとつあって。

柴：発見が欲しいですね。論文にするなら。『わが星』にしなくてもいいと思いますけど。

石井：『わが星』の評論が何かこう足りないなと思ったのが最初だったんですね、元々は。そこじゃないんじゃないかというのがなんとなくあって始めたものなんです。この1年ぐらいやってきて、あまりそれが独自の解を見つけられていないのが今なんです。割り算ですね、割り算。

柴：割り算。

石井：どの切り口か。

柴：僕は多分足りてないというか、誰もそこを言及してないと思う。音楽の同期性というか、快感とか。マジックというか。言葉のダンスみたいなものなので。『わが星』は。演劇のダンスと言ってもいいですけど。単純に何の音楽を同期すれば気持ちいいのかもよく分からない。不同期と同期の交互にくるだけで人は喜んじゃうと思いますけどね。ということは別にわざわざ分析しないですね。演劇評論家は。そんなことは誰も今後調べずに行くんだろなと思うんですけど。

石井：それで例えば脳波とかの手段で面白い結論が得られたら論文として。

柴：まあそれを調べたいなら調べればいいですけど。

石井：ずっと『わが星』の戯曲ばかりとにらめっこしていたので、そういう目線が全然無かったなと。やってみたいたとは。

柴：まあ危険な方向性だと思いますけど。科学的な論文にはなるとは思いますけど、文学的に行くならそれこそ野田さんとか別の作家と対比するとかした方がいい。そういうので割り出していくといいのかもしれないですけどね。

『わが星』の作品としての半分は音楽が占めてると思います。だからあっちのことを紐解かずに『わが星』のことを全部は語るといって、割り出すことは、

石井：できないであろう。

柴：全体を語ろうとするなら。だから脚本部分だけを切り出して割る、演劇部分だけを割り出して何か新しい発見をもたらすということではできるかもしれないですけど、全体を割るというのはちょっとあれかもしれないですけど。

石井：それはまた落とし所を文学の方向に持っていくかというところに、

柴：関係あると思います。

石井：ありがとうございます。お恥ずかしい限りで。

柴：いや、いつまでに書くんですか。

石井：僕留年するので。

柴：えっ？！

石井：来年夏過ぎですね。

宮永：ああ、半期の。

柴：何で留年するんですか。

石井：芝居の現場と単位が被ってみたいところで。

柴：留年するんだ。

石井：お恥ずかしながら。でもそれで卒論への時間も半年もらえたというか。

宮永：就職どうするの。

石井：しないとイケないです。

柴：でも来年の夏に出して、再来年の3月に卒業ということ。

石井：そうです。2014年。

宮永：へえー。

石井：就職もしなければならぬらしいんですが。どうしようかなという。

柴：就活もすると。

石井：しなくちゃなあと思いながら何もしてないですけど。

柴：宮永さんって卒論何ですか？

宮永：俺卒論、

柴：何を書いて？

宮永：俺はねえ、生活学科というところで、環境とか都市とかの学科だったから。公共物の、つまり劇場とか公園とかの必要性和かの論文だった気がする。記憶によると。何書いたんだろう。全然覚えてないわ俺。

柴：千葉ゼミ結構厳しいあれだったんで。結構ちゃんとやりましたけどね、本当に1年間。

枚数規定って決まってるよね？ 何枚以上書けとか。

石井：あるゼミもあるんですけど、僕の所はない。

柴：ああ、ないんだ。

宮永：ないんだ。

柴：うちあったよ。相当書かないとだめだった。

宮永：うちもあった。

石井：でも目安が最低1万字でいってという人もいます。

柴：1万字って原稿用紙25枚分ってこと？

石井：でも去年A43枚っていう男がいたんですけど。

柴：まじかよ。

石井：僕は少なくともそうならないようにとはもちろん、

宮永：図とかむっちゃ入れた。それでページ数を。

柴：文系の卒論ってそんなものなのかな。まあでも。

石井：ありがとうございます。

柴：ちゃんと論文にしていただけると嬉しいですけどね。

石井：頑張ります。ありがとうございます。

柴：いえいえ。

宮永：ありがとうございます。

## 8-2、ストップウォッチを用いた実験後の質的調査

石井：今日はちょっとみんなでおしゃべりしたいなと思ったのが、僕の卒論が「この作品はなにがおもしろいのか」っていうのを考えてるんですよ。この録音は本研究以外では絶対に使用しません。

前提として、まずこの作品をみんながどれくらい知識を持っていたのかなというのがありまして。

まずこの作品を既に見たことある人。

A：途中まで。冒頭のシーンは10回ぐらい見せてもらって。月ちゃんのシーンまではこの前EMの公演の仕込みの時に。

石井：ちーちゃんと月ちゃんのシーンまで見てた。

二人は初見であると。

B：はい。

C：はい。

石井：ちなみにこの3人は普段はそもそも、芝居を観る人とあまり普段から芝居を観ない人でやっぱり印象はやっぱり違うと思うんだけど、みなさんはどうですか。どれくらいの頻度で芝居を観ているのかなと。

B：大学入ってからというか、秋祭終わってから毎週1本観てるぐらい。

石井：以外と観てるんだ。

B：12月は毎週観て、1月も今のところ観てるから、ぐらいです。秋祭終わって一気に増えた。

A：そっか、EMとかも含めたらそれぐらいになる。

B：ずっと観てるから。

石井：2人は？

A：私はそんなに観てない。秋祭終わってから私は12月に2本観て、昨日1本観て。そんなにたくさん観る方じゃない。

石井：月1〜2本ぐらいかな。

A：ここ最近ハマってきた感じで。大学に入るまでは全く観たことなかった。

石井：Cさんは。

C：ちょいちょい観てます。

石井：この中では一番多いのかな。

C：この中だったら一番多いと思います。

石井：週1〜2本ぐらい観てるぐらい。

C：そこまでではないですけど。

石井：コンスタントに週1本ぐらい観ると。月3〜4本ぐらい。

C：そんな感じです。

石井：そして3人とも普段から演劇作りをされている。

ちなみに今回のを観ながら、「わ、いいなこのシーン」と思ったところにタイムコードを残してもらったんですけど、ちょっと見せてもらっていいですか。

これを見たところ何が分かるのであろうかっていうところがあるんですけど。

特にこのシーンが素敵だなあみたいなのはありましたか？ だいたいオープニングのところが6〜7分あるんですけど、多分そこと、テレビが壊れた話のところが好きっていうのが今の印象だと多いんだけど。あとは「もっと早く、もっと早く」のシーンとか。

A：「でも、もし」のシーンとか。あれすっごい好き。

C：「でも、もし」すごい好き。

A：「でも、もし」むっちゃ好き。

石井：あれアツいよね。

A：アツいです。

C：「でも、もし」アツいです。

A：あとなんか「光速を超えた」っていう時の、「あ、掛けてるんだ」っていう。

石井：序盤で「ここ立入禁止だよ」っていうシーンで。

C：ああ。

A：「僕は校則を超える」っていう。「校則」と、あと光の。

C：ああ、頭いい。

石井：今の再生環境だとちょっと音声聞き取りにくいところが多分あったとおもう。最後のお父さんとお母さんのシーンとかちょっと聞き取りにくかったと思う。それはDVDだからしょうがないんだけど。けっこうそういう風に掛けてるシーンがあつて。たとえば「これが地球のお終いです」って言ってるのと、「これが地球の星舞です」って言ったり。星が舞うっていう単語があるんだけど。ちょっとずつ掛けていたりするんです。ちなみにこの作品は2010年の岸田戯曲賞受賞作。演劇界の芥川賞と言われる。あとは、やっぱり最後のシーンとか。その辺りだよ、好きなシーンとしてあげられるのが多いのは。こんな雑談みたいな感じでいいので、このシーンがヤバイ、この役者がヤバイ、ここの照明は鳥肌モノであるみたいな

A：基本的に照明はやばかった。あの男の子が真ん中に立ってて、影がいっぱい放射状にできてるところはすごいなって思った。

石井：キュンとくるよね。……おればっかり喋っててもあれなので、みなさんざつくばらんに。どの役者さんが好きだった？

A：月ちゃんとか。

石井：月ちゃんかわいいね。

C：月ちゃんかわいい。

A：お母さんがかわいい。

C：男の子とおばあちゃんが。

石井：おばあちゃんは良い味をだしてるよね。

C「なんで残念そうなの？」って。

石井：主人公の男の子が、大柿君って言って、バナナ学園とかにも出てたりする害獣芝居の人で、あのお父さんは青年団の役者さんで、この前の『演劇1、2』に出てて、月ちゃんはフランケンズってとこの人で、柿喰う客とかよく出てるんだけど。

A：ふーん。

C：ふーん。

石井：どの役者さんが好きだった？

B：シーンごとにキュンとくる役者が違って。

石井：うんうん。

B：なんだかんだ通してちいちゃんの無邪気な感じがすごいなあ。

石井：かわいいよね、本当にかわいい。ちなみにままと所属の役者はちいちゃんだけなんだよ。

C：へえ。

A：へえ。

石井：ちなみにこのままとってという劇団の名義になって初めてやったのがこの公演で、三鷹で7回しかやらなくて、それが評判を呼んで、2年後に再演されたんです。

やっぱり音楽がすごい多用されるじゃない。魅力のひとつとして音楽というのがあると思うんだけど。この音響オペは柴幸男さん本人がやっていて。

C：ベース音とかですか？

石井：そうそう。ドラム、時報、ピアノとか。

B：ピッピッピっていう時報の音に合わせて、音が、ベースとかギターとかピアノとかシンセとか入ってくるのが、音が楽しくて、ライブ観てる感覚で。ずっと足でこうやって。

A：あはは。

B：下でこうやってリズムとりながら観てて。

石井：映像でもお客さんに一人むっちゃ頭揺らしてる人いるよね。

A：いました。女の人で。

石井：あの人よく観察してると後半で号泣してるんだよね。

C：へえ。

石井：柴幸男さん本人が言ってたことなんだけど、この芝居には本人の死生観が投影されていると。

生き死についてあるけど、死ぬじゃん、身近な人が。でも、全世界でチョー死んでるじゃん。この瞬間に。で、チョー生きてるじゃん。っていう単位で、地球単位で生死を考えると、すごい、自分にとって腑に落ちると。

最後にみんな一緒に死んでいく形で表現されているけど、そういうのが投影されているんだって、この前言ってらして。

何がおもしろいんだろうね。この芝居は。

C：何でしょうね。

B：さっきちょっと喋って、彼女が泣いたって言ってて。

A：へへへ。

B：逆に、泣く要素を感じなくて。すごい最後に死んでいつちゃうとか、月ちゃんの手紙とかが感動的なのは分かるんですけど、リズムに合わせてセリフ言ったりとか、本当に演劇よりもライブに近い感覚で、ノリノリになっちゃって楽しくなっちゃって。これすごい楽しい、って思って観ていたので、あまり泣くって感じじゃなかったです。感動的だとは思ったけど、泣かなかった。

石井：もちろん人によって違うと思うけど、僕は体揺らしながら号泣するっていう謎の状況で。

C：ハイブリッドな。

A：両方。

石井：僕再演版を観たんだけど、生で観ると音も光もすごくて。客席が円になってるじゃない。一つの空間にみんなが融け合う感じになって。

Yさんなんかは観ながらボロ泣きしてて、隣にいたNは、「おもしろいですね」って言ってて。

みんな印象違うんだよね。確かに泣かせるっていうものの定番の要素はあまり入ってないかもね。

C：僕は目が覚めてから泣きました。

石井：どこまで寝てたの？

C：男の子が真ん中にいるシーンで「でも、もし」とかチョー良かったんですけど、そのまま寝ました。

A：なんでー。あそこよかったのにー。

C：あのパッパッって一文字ずつになるとことかすごい良くて、で、寝て、その後夫婦のシーン辺りもちょっと寝てて。

石井：今のもそうだけど、演出の面白さと脚本の面白さはある程度切り離して考えたほうがいいと思うんだけど、さっき「でも、もし」のシーンの演出のおもしろさは多分あるよね。光を見るとそれは過去の姿であると。で、振り返りながら5人が連なるシーンとか。

A：ああ、見事に揃ってた。

石井：で、頑張ってみたいになって、全員の役者さんを使う。そこらへんは演出のおもしろさで、脚本のおもしろさはまた別にあると思うんですけど……。脚本についてはどうだろうね。ちょっと聞き取りづらいところは多かったと思うんだけど。

B：なんか、月ちゃんとちーちゃんが会ってから、ままごとでどんどん女の友情と、大人になってから死ぬまでみたいな。

A：あそこよかった。

B：あるなあっていう共感と、うまいなあって。

C：あの結婚のところで、全然関係ないんですけど、ああって。

石井：「本当にキレイ」ってところでしょ。

B：結婚モノに弱いね。

C：『のび太の結婚前夜』とかもね。

A：私、今年で10年付き合いがいる友だちがいるから、重ねちゃって。月ちゃんとちーちゃんに。

B：私15年になる友達が3〜4人いる。

石井：15年モノが。

A：ワインじゃないんだから。

石井：月と地球が3，8センチずつ離れていくってのと重ねているのが。

A：どんどん離れていつちゃうのが切ない。

B：セリフの途中で演技変わるじゃないですか。つながっていく感じが面白かった。

石井：再演バージョンはもっと洗練されてるんだよ。ラップのシーンとかほとんどなくなってるし。

細かいところで、ここが好きとかあった？ さっきの結婚のシーンとか。

B：おばあちゃんの「私はまだまだ」の後がどんどん変わるところとか。

C：「100万回生きるって・・・猫か！」とか。

石井：地球がビッグバンで生まれてから太陽に飲み込まれるまでと、昭和の団地を重ねているんだよね。

C：最後のところでお姉ちゃんが「ソニックブーム」って言って、ああ、これが言いたかったんだって。ちょっと泣きました。

石井：最後の団欒のシーンもいいよね。ちいちゃん以外はみんな受け入れているという。

B：お姉ちゃんとちいちゃんがゴロゴロするシーンが好きです。

石井：いいよね。柴さんが一番好きなシーンがそこだって言ってた。

B：好きです。

石井：「お姉ちゃん、私のこと嫌いだった？」ってとこね。

A：そこすごい好き。

石井：あそこの曲は□□□の三浦さんの「00:00:00」って曲で。

B：□□□知ってます。ろろろ、って書く。

石井：ああ、知ってる？ その三浦さんが出来上がったところから柴さんに渡してくみたいな形で作ってて。

最初1分しかなかったのが15分ぐらいになって。

C：「おーやすみー」っていつ来るかと思ったら来なかった。

石井：ああ、でもその曲だよ。

C：そうなんですか？

石井：部分的にしか使ってないから。

最後にミュージカルシーンみたいなものがあるじゃない。あれは賛否両論なのかなって。

B：私は正直無くていいかなって。

石井：僕も観てる時はなんか違うんじゃないかって思った。

B：あれ無くてそのまま語りとセリフがリズムに乗って行く感じだけで終わっても。突然ミュージカルになって、「あれ？」って。そこにいくまで気持ちが乗ってたけど、「あれ、歌っちゃった」って。

C：一番最後ですよ。

B：そう。

石井：最後に女が喋って男が返すところあるじゃない。「死んでく私が見ているの？」「そう」って。

A：ああ、そこ大好き。

石井：一番最初のオープニングに使われてるセリフが端々に出てくるじゃない。

B：はい。

石井：いいよね。

B：いいです。

C：僕はミュージカルのところすごい好きでしたけど。

A：私も違うとは思わなかった。

石井：そうか。僕は最初観た時はちょっとひっかかったんだけど。

B：歌っちゃうの？！ って。

石井：踊りがちょっと雑なのもいいよね。普通に隣の人とぶつかっちゃってるし。

オープニングの群舞と最後の群舞がちょっと違うじゃない。何かって言うと、男の子がいないから。

C：ああ。

石井：セリフが欠けてるから、グルーヴ感が出てると思う。

他にはなにかある？

A：照明がすごいキレイだった。月ちゃんのところが黄色かったりとか。死ぬ時赤かったりとか。爆発間際の星ほど赤いじゃない。だから赤いんだなって。最初は若い星だから青くて。

C：ミラーボールを持って出てくるじゃないですか。前観た舞台でミラーボール出てきたんですけど。手持ちの。それがすごいキレイだったの、生で観たらキレイなんだろうなって。



石井：でかくなったなあってちょっと思ったよね。

A：膨らんだ一って。

C：あと、遠いなあって。

石井：あれはオペ台の横でやってる。

A：手紙のシーンで泣いたなあ。

石井：当日パンフレットの中にアポロが二つ入ってるんだよ。

C：へえ。

A：へえ。

石井：気が効いてるよね。

どうしても映像で観てもらったから分からないけど、円形舞台じゃない。最後のシーンで、最初は男の子側から観て、次にちーちゃん側から観て、最後に俯瞰するところから観た。

B：しばらく観て「あ、すっげー」ってなって、「あっ」って。

石井：本当に感動したらストップウォッチ押せなくなるよね。

B：生で観てみたいなあ。ビデオだと役者の顔が見れるから観やすいっちゃ観やすい。

石井：どうしても映像だと編集されたものになるよね。

B：もし生で観たら横から役者さんが出てきたりっていうおもしろさがあると思う。首を動かして観たい。

A：先生が「後ろを選んだ」っていうところが。

石井：あれいいよね。ちなみに3人はままとの他の作品は観たことあるんだっけ？

A：ないです。

C：ないです。

B：私も、『わが星』の名前だけ。

A：私もオープニングだけ何度も見せられた。

石井：僕酔っ払うとオープニングのところばかり繰り返して見ちゃう。

B：酔っ払って観てみたい。

石井：酔っ払って観ると最高だよ。

B：すごい楽しそう。

石井：楽しみ方はいろいろあるけど、音だけ聞いても楽しいから。

あと、戯曲の本があって、戯曲としての完成度が高くって。セリフに網掛けがしてあって、「ここはセリフを重ねて読みます」とか指示があって。それも合わせて観ると面白いと思う。その一方のセリフを近くで聞いている人と、そうでない人で印象が変わってくる。そういう楽しみ方もあるね。

C：『ファンファーレ』が秋祭とだいぶ被ってたんですよ。

B：あ、『ファンファーレ』もままとだったんだ。

石井：そうそう。伊藤泰行さんっていう、僕が世界で一番オペがうまい人だと思ってる人がいるんだけど、その人に誘ってもらって、この前柴さんにインタビューさせていただいて。『ファンファーレ』も最高だよ。

それじゃあそろそろ、本日はありがとうございました。

### 8-3、脳波計測実験のグラフ

8名の被験者（A～H）に対しAttention、Meditation、Zone のデータを取った。

このデータを、横軸を秒数としてグラフ化した。以下がその内容である。

被験者A

・ Attention

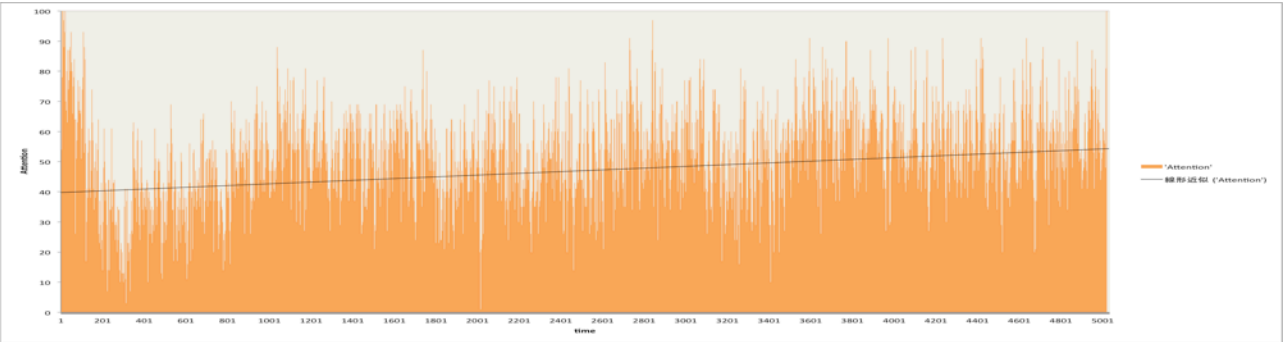


図63：被験者AのAttention

・ Meditation

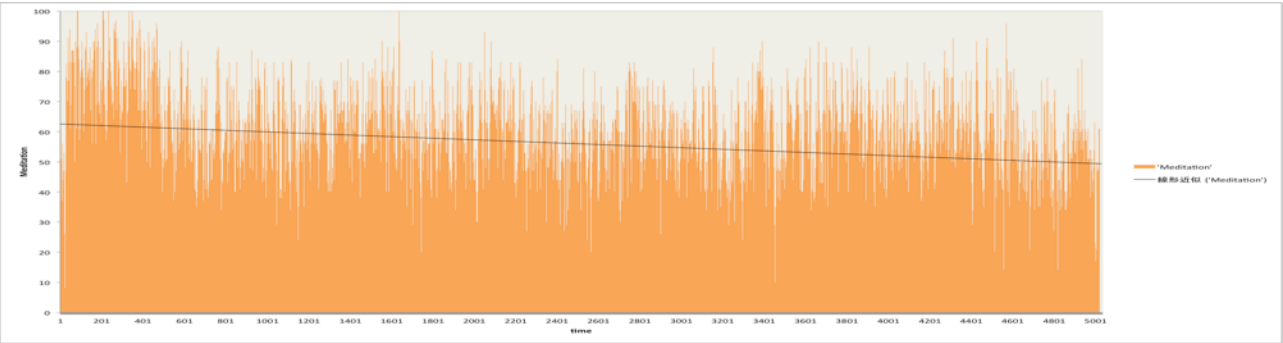


図64：被験者AのMeditation

・ Zone

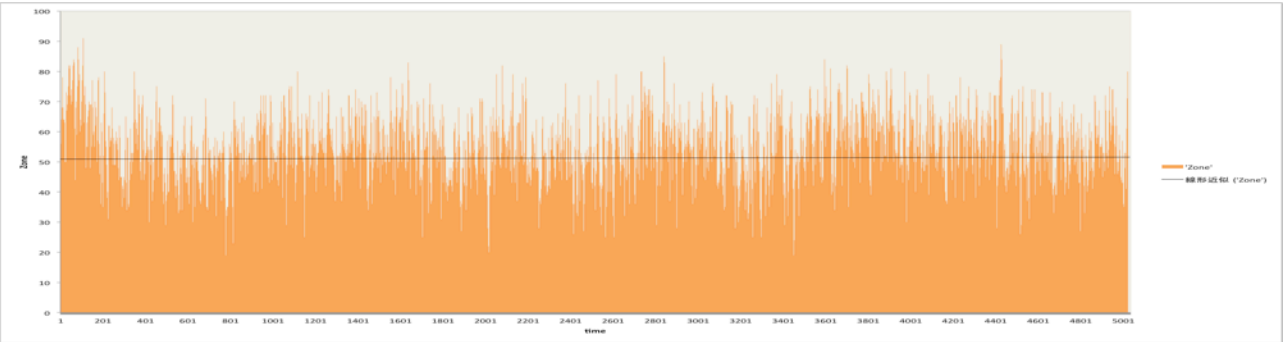


図65：被験者AのZone

被験者B

・ Attention

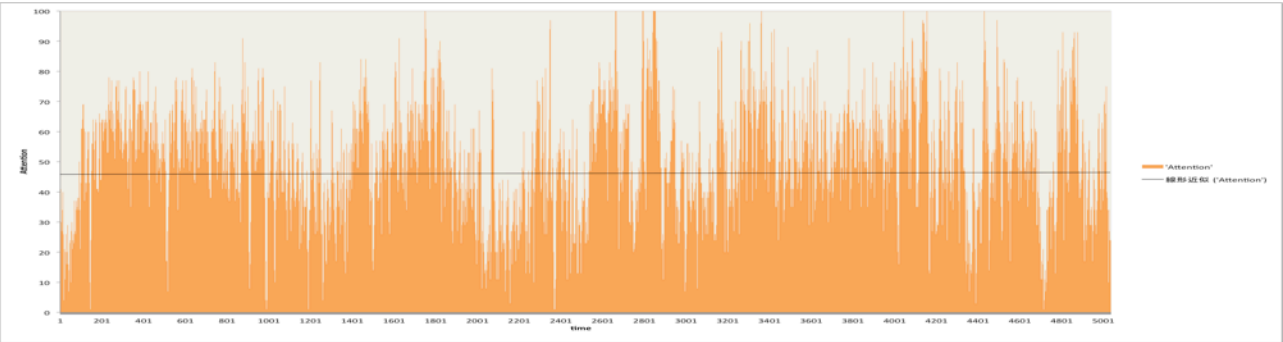


図66：被験者BのAttention

・ Meditation

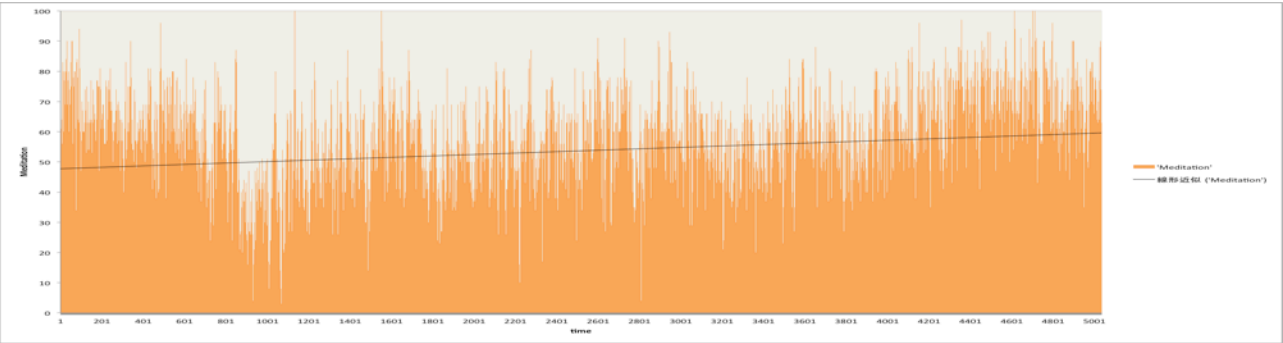


図67：被験者BのMeditation

・ Zone

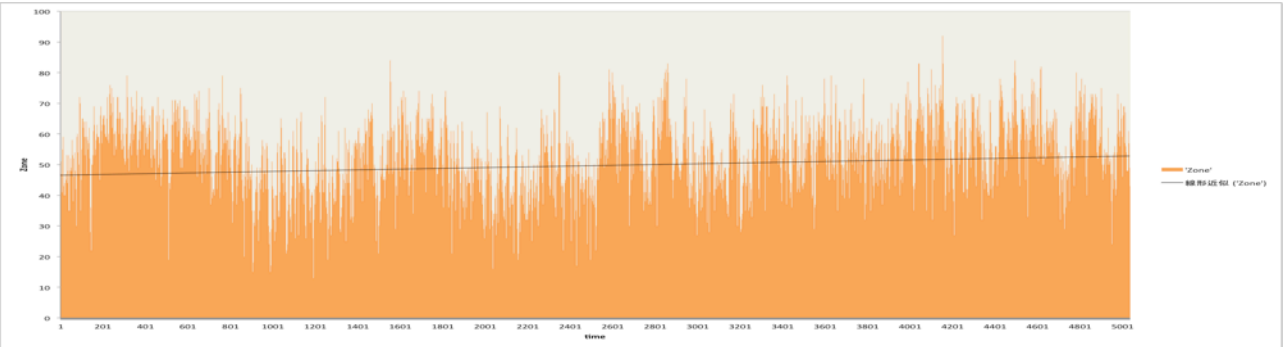


図68：被験者BのZone

被験者C

・ Attention

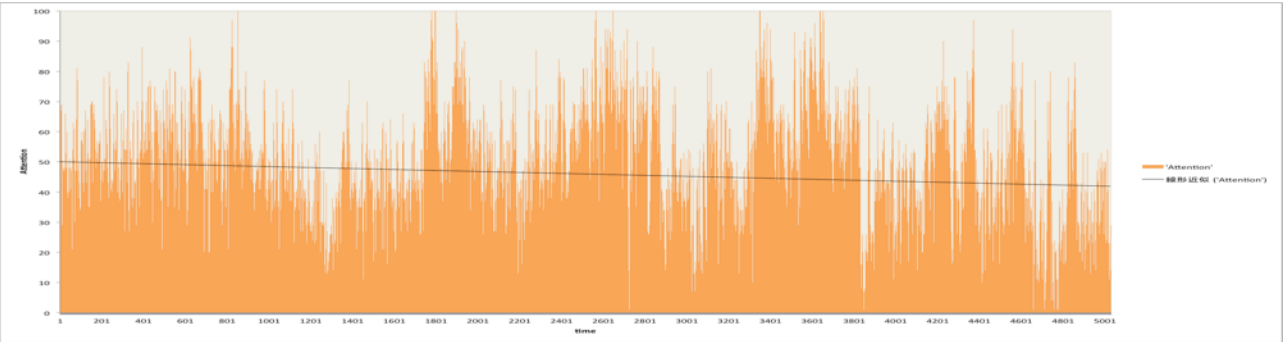


図69：被験者CのAttention

・ Meditation

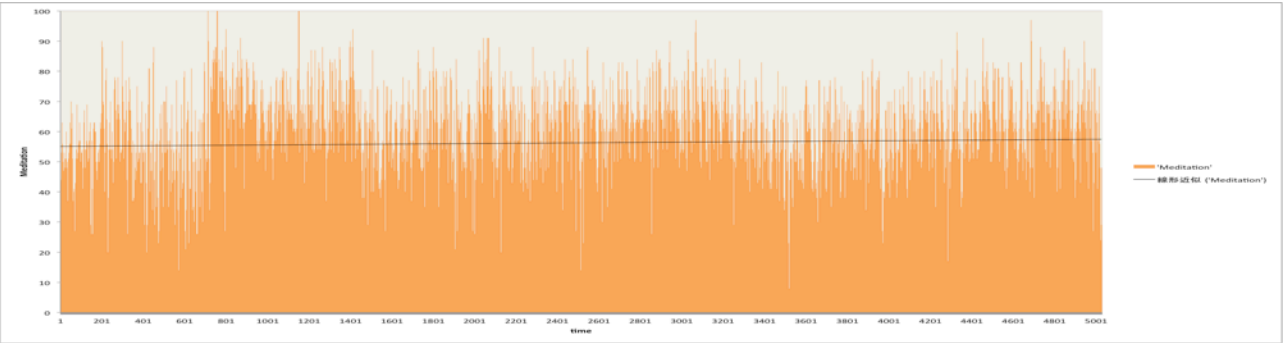


図70：被験者CのMeditation

・ Zone

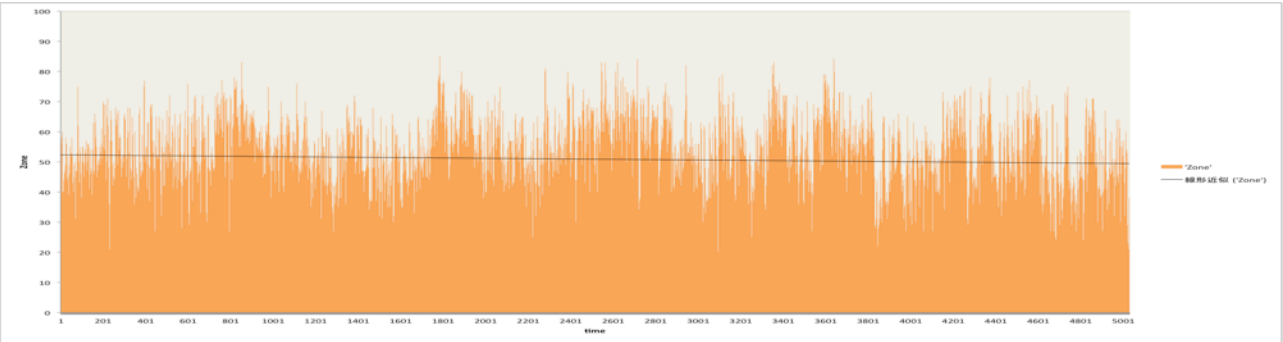


図71：被験者CのZone

被験者D

・ Attention

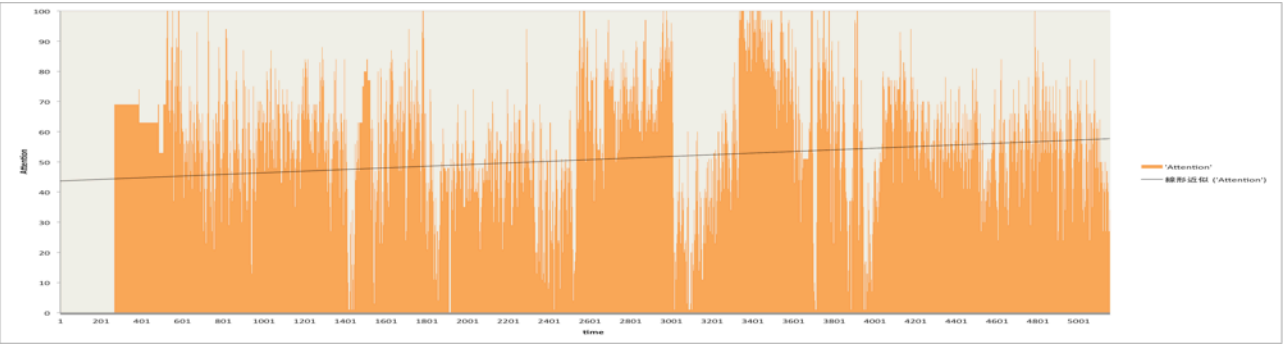


図72：被験者DのAttention

・ Meditation

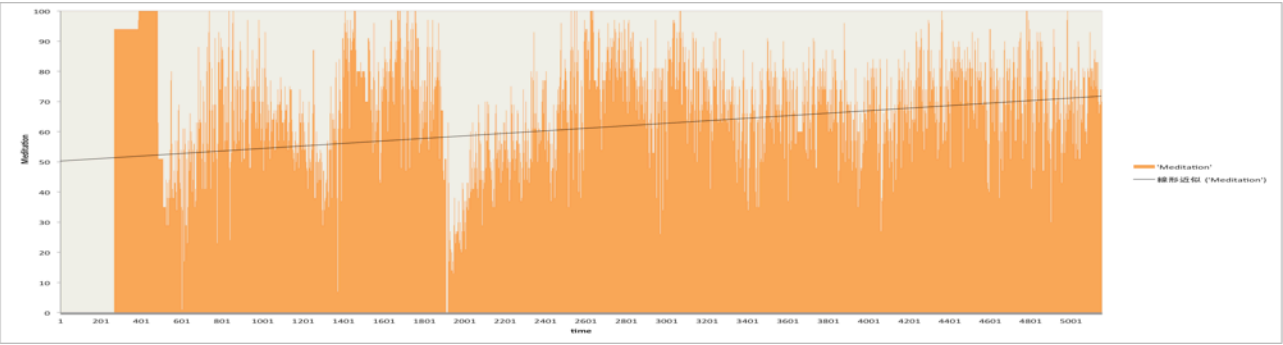


図73：被験者DのMeditation

・ Zone

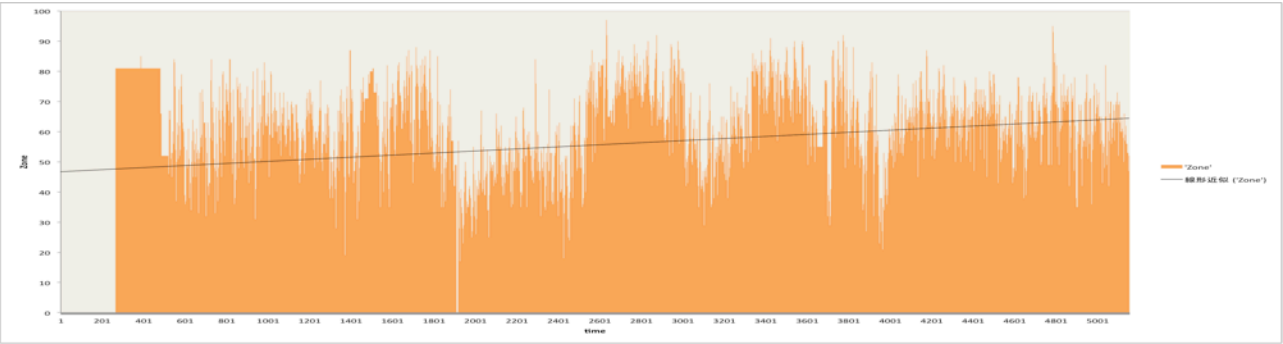


図74：被験者DのZone

被験者E

・ Attention

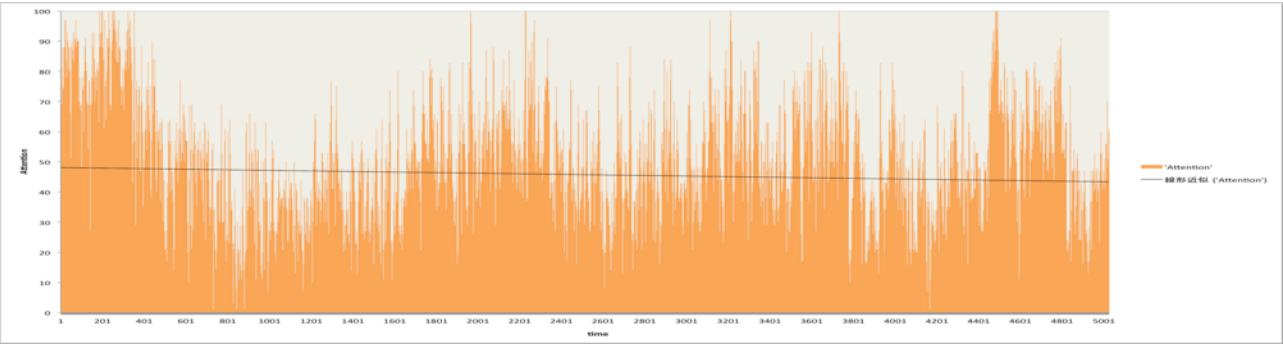


図75：被験者EのAttention

・ Meditation

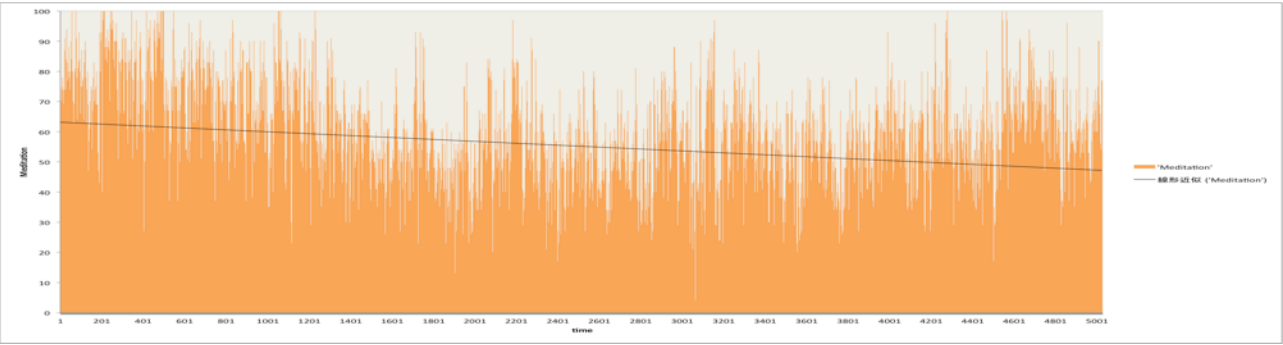


図76：被験者EのMeditation

・ Zone

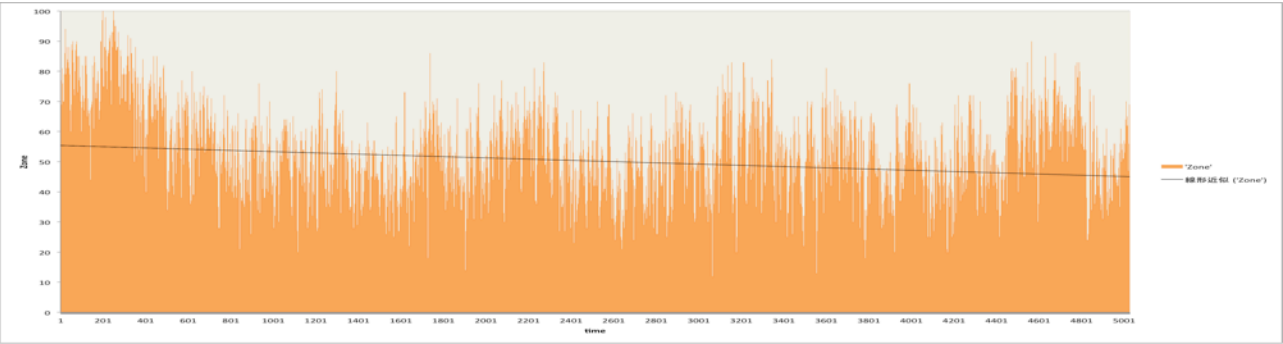


図77：被験者EのZone

被験者F

・ Attention

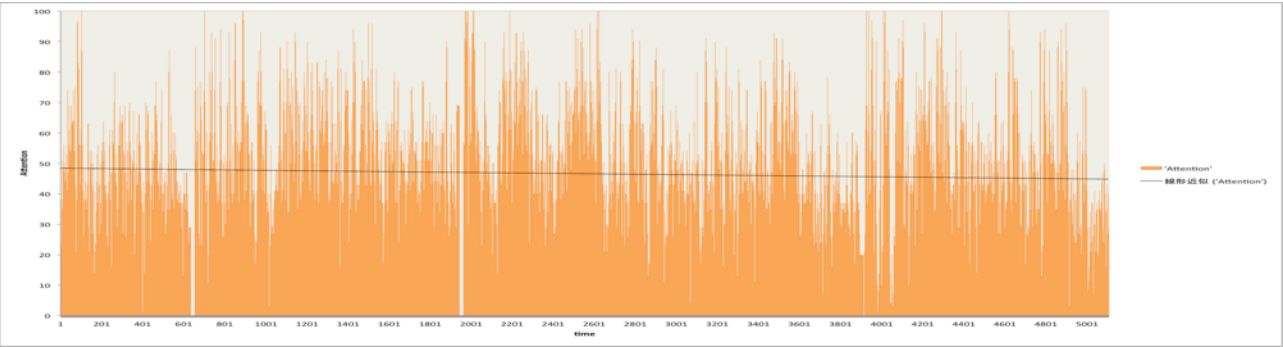


図78：被験者FのAttention

・ Meditation



図79：被験者FのMeditation

・ Zone

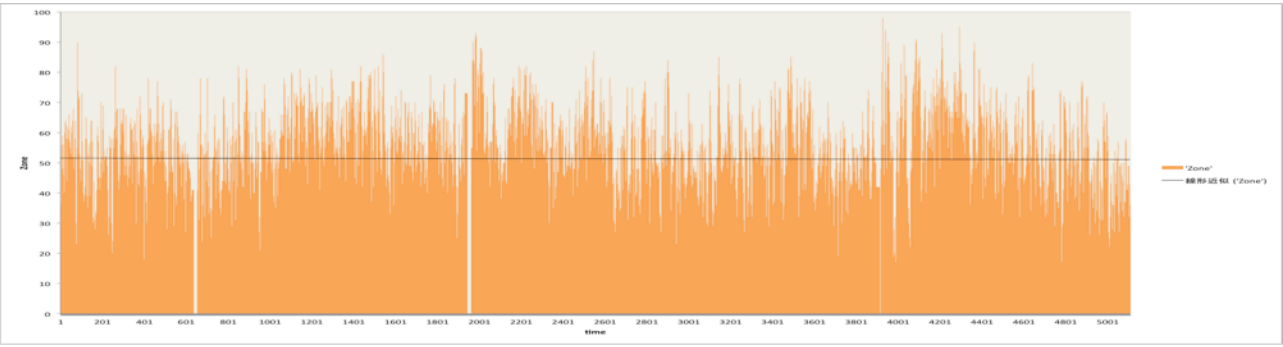


図80：被験者FのZone

被験者G

・ Attention

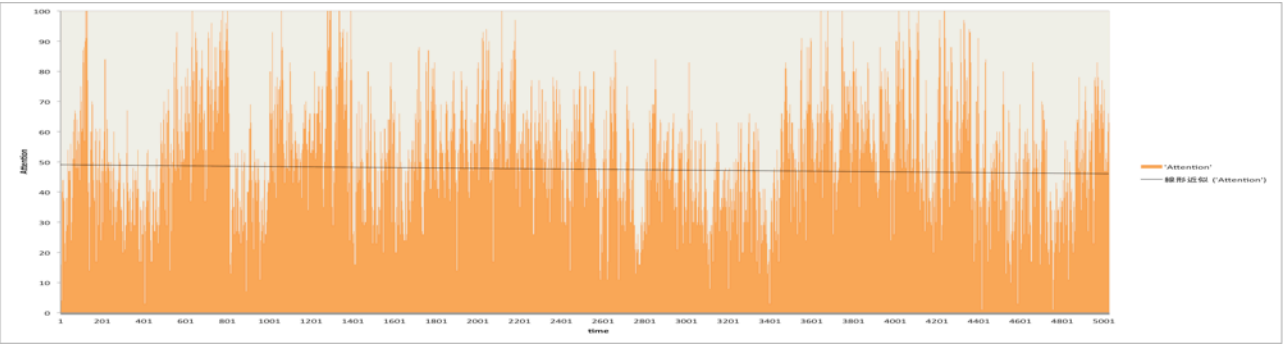


図81：被験者GのAttention

・ Meditation

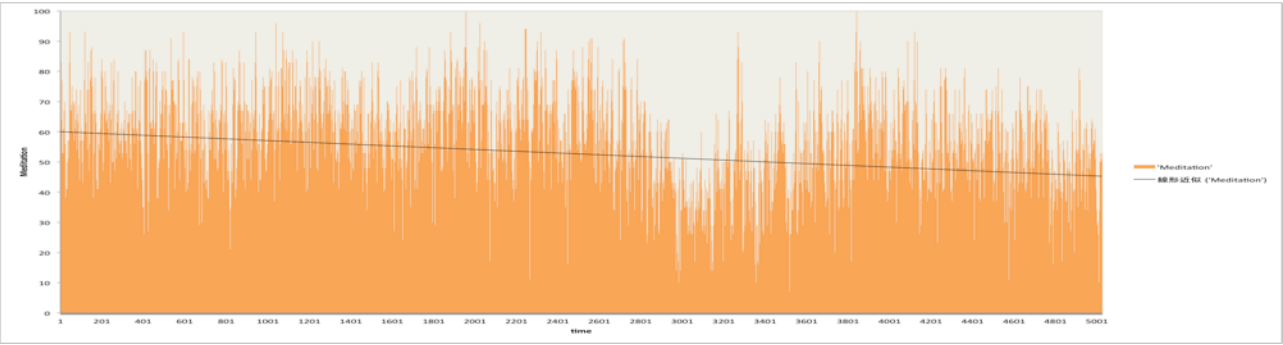


図82：被験者GのMeditation

・ Zone

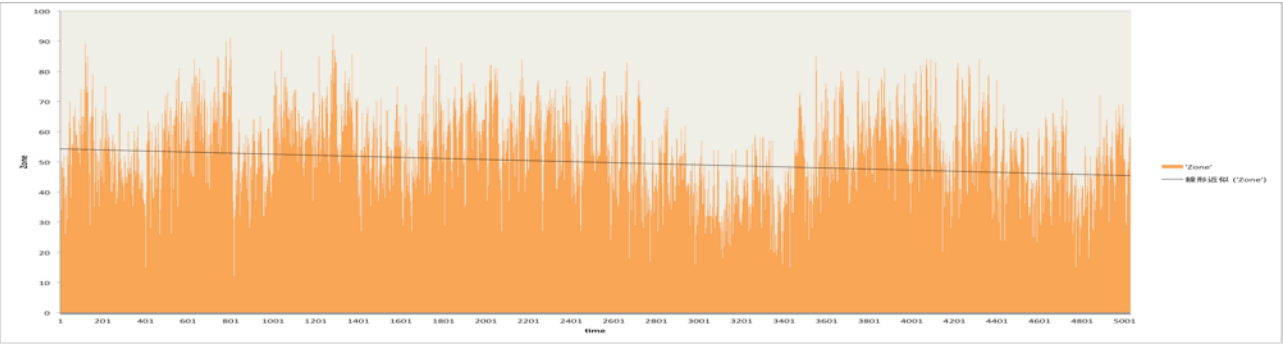


図83：被験者GのZone



被験者H

・ Attention

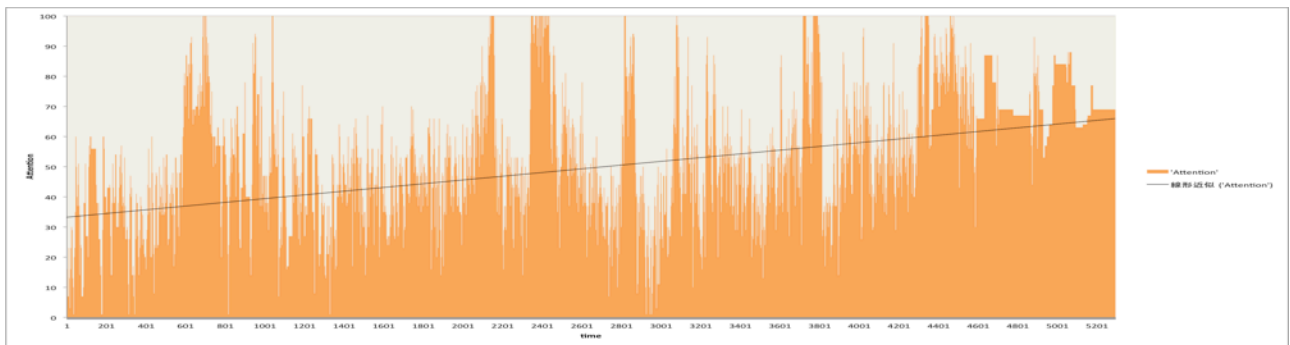


図84：被験者HのAttention

・ Meditation

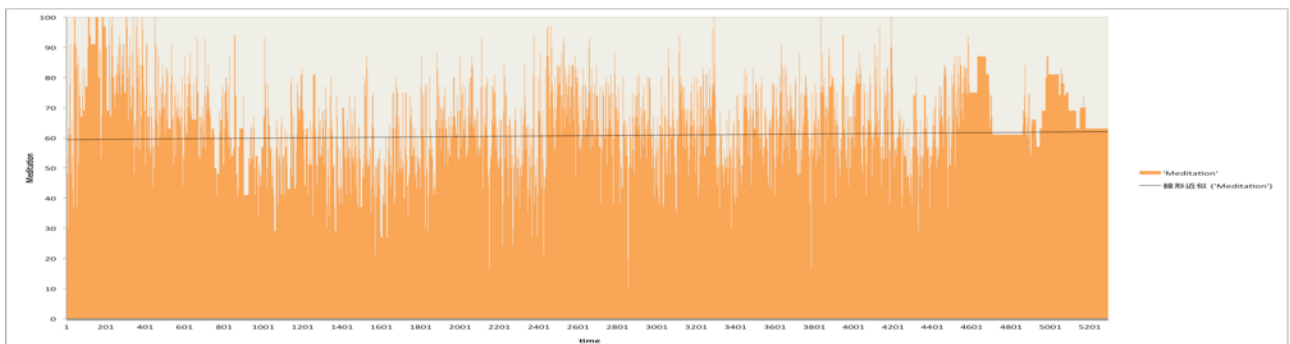


図85：被験者HのMeditation

・ Zone



図86：被験者HのZone

8-4、脳波計測実験後のアンケート

質問項目

- 1、年齢を教えてください
- 2、普段の舞台鑑賞（演劇、ミュージカルなど）の頻度をお聞きします。該当するものを丸で囲んで下さい。

3、どんなシーンが印象に残りましたか？ ご自由に感想をお書きください。

被験者A

- 1、21才
- 2、一年に二〜三回
- 3、・じゃんけん無一  
・お父さんとお母さんが類似した内容を話しながら回る  
・月ちゃんの手紙  
・おばあちゃんのハッピーデスデー  
・ちーちゃんと月ちゃんのみまごと（人生編）  
・全員で手をつないでダンス（特にラスト）

被験者B

- 1、21才
- 2、一ヶ月に一回程度
- 3、・地球と星の邂逅  
・最後の方の、お父さんとお母さんが回るシーン

被験者C

- 1、18才
- 2、一ヶ月に一回程度
- 3、月ちゃんとちいちゃんが語り合う場面。

被験者D

- 1、18才
- 2、一ヶ月に一回程度
- 3、最後周りで、一人ずつ輪から抜けていく所が印象に残りました。

被験者E

- 1、21才
- 2、一週間に一回程度
- 3、円を描きながら、次々に言葉をつむいでいく演出が最初と最後にあって、最初は理解するのが難しかったが、最後にはなんとなくではあるが理解できて、嬉しかった。でも、時間を置いて何回か見たいと思いました。

被験者F

- 1、19才
- 2、一週間に一回程度
- 3、死んでく私が見ているの  
でももし  
お婆ちゃん寿命なんですか？  
みまごと  
チャリ

被験者G

- 1、21才
- 2、一年に一回程度
- 3、出演者の方全員が列になって円の外側をまわるシーン。又、中央に集まって歌うシーン。

被験者H

1、21才

2、一年に一回程度

3、すべてが印象的でしたけれど、1つ書くとしたら、“ポッポッ”という音に対して皆さんがリズムに合わせてどんどん台詞をリズミカルに言うところが印象に残りました！

あと、ぐるぐる皆で回っているところもです！

## 8-5、Attention、Meditation、Zoneデータのまとめ、色分け

Attentionデータのまとめ、色分け

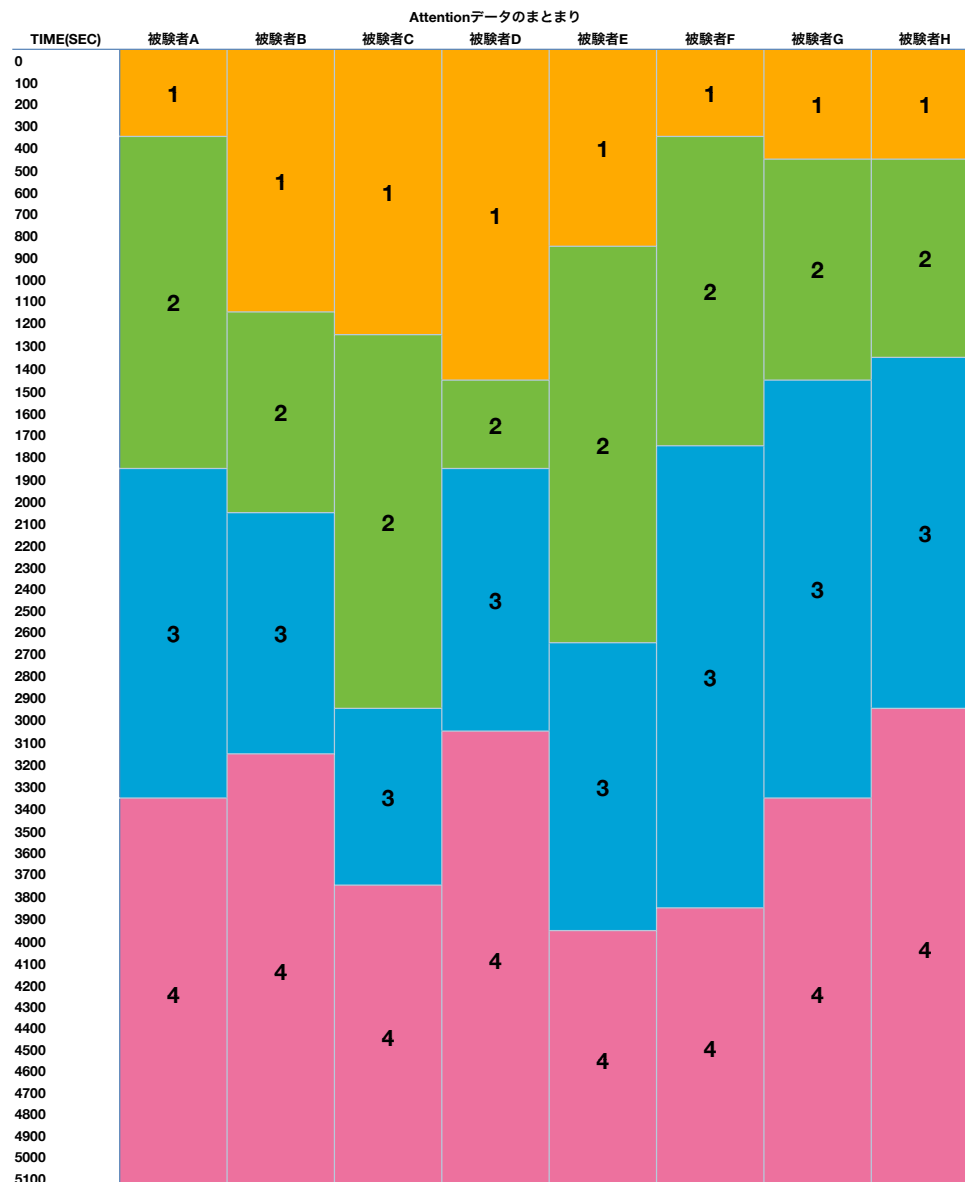


図87：Attentionデータのまとめ

Meditationデータのまとめ、色分け

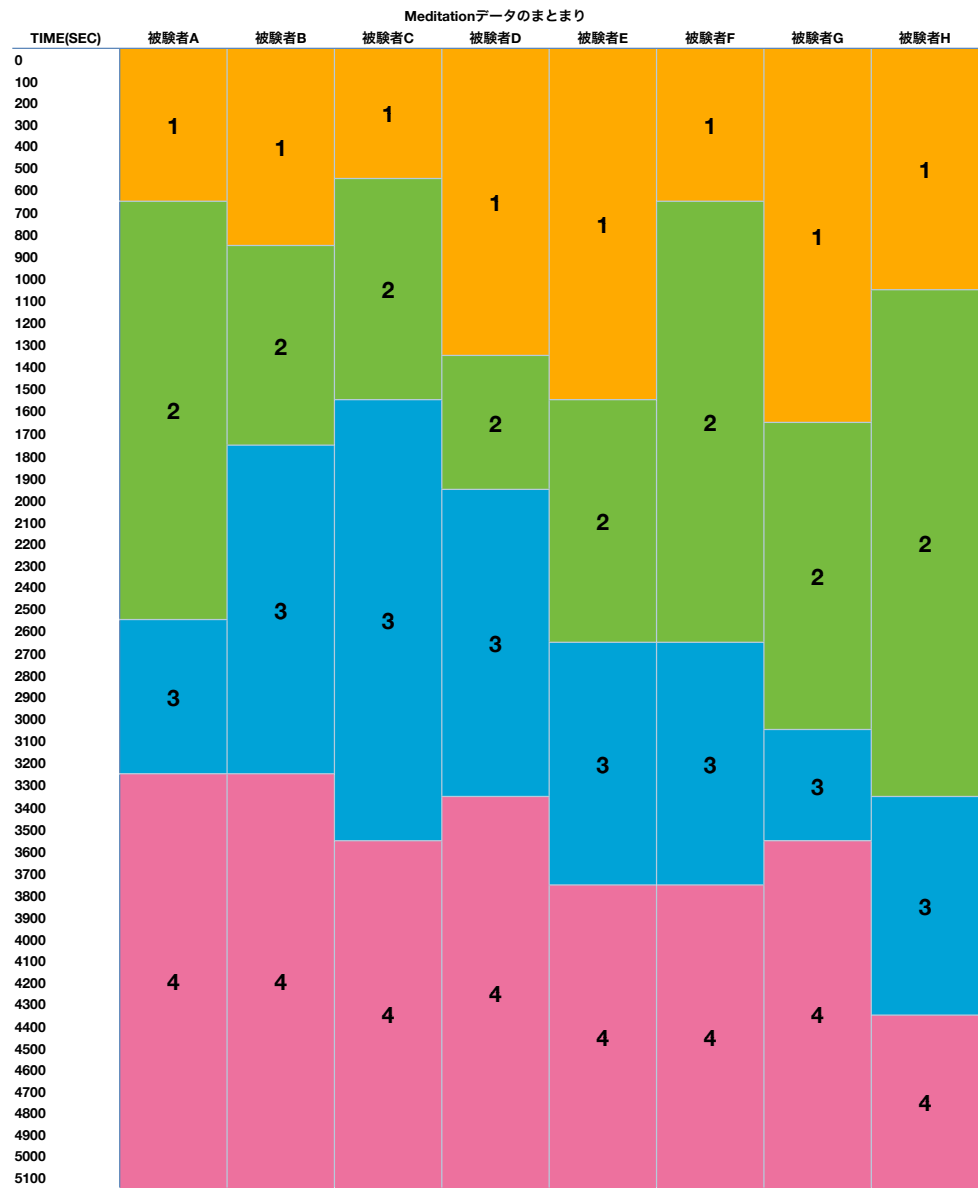


図88：Meditationデータのまとめ

Zoneデータのまとめ、色分け

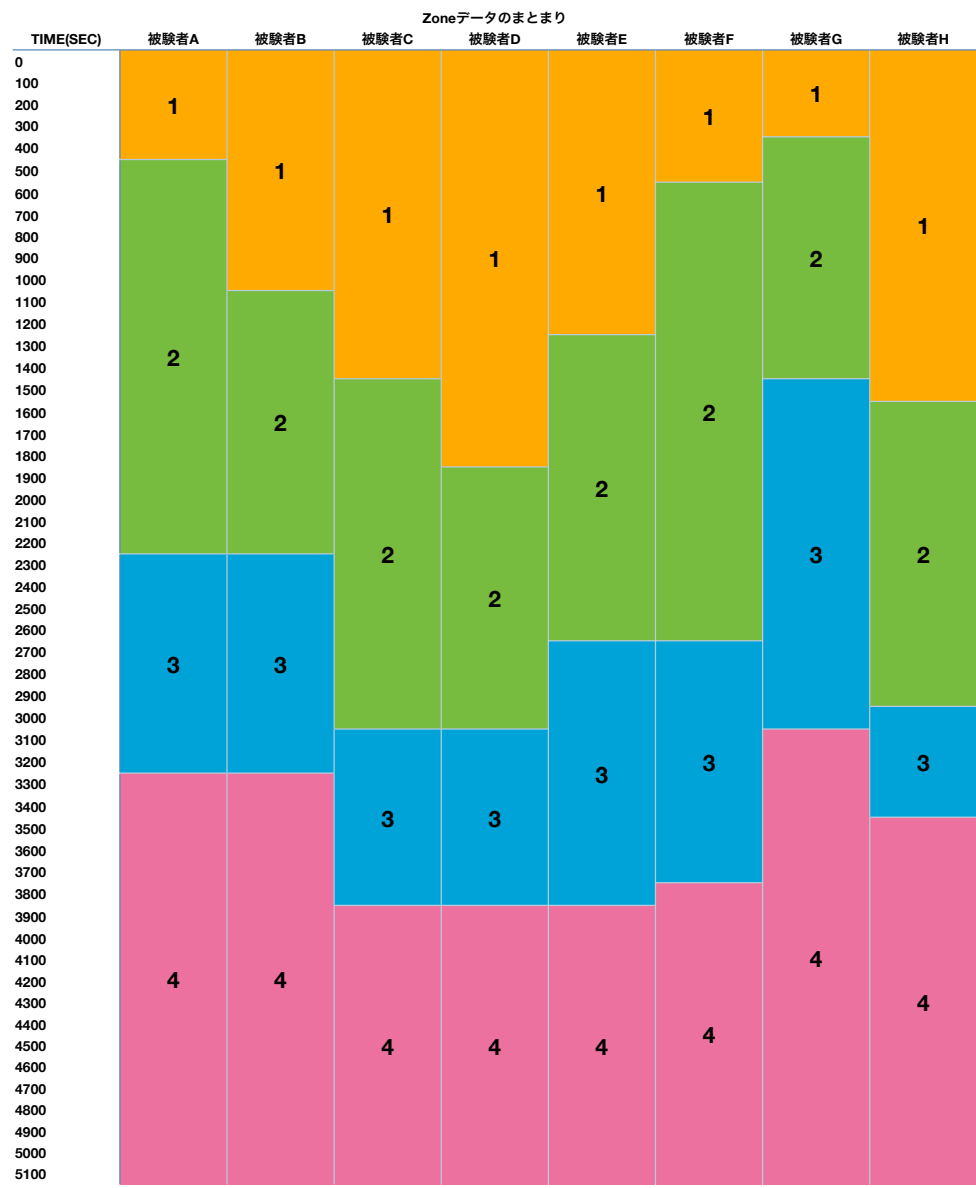


図89 : Zoneデータのまとめ

8-6、『わが星』章立てと該当ページ、経過時間

| SCENE | TITLE    | PAGE | TIME(SEC) |
|-------|----------|------|-----------|
| 0     | 開演       | 10   | 0~        |
| 1     | ビックバン    | 10   | 77~       |
| 2     | 宇宙誕生     | 13   | 135~      |
| 3     | 携帯電話     | 17   | 183~      |
| 4     | 団地       | 21   | 243~      |
| 5     | 星舞       | 41   | 600~      |
| 6     | 望遠鏡      | 43   | 670~      |
| 7     | ちゃぶ台     | 53   | 834~      |
| 8     | 自転       | 58   | 943~      |
| 9     | 公転       | 63   | 1063~     |
| 10    | グルグル     | 72   | 1307~     |
| 11    | 逆回転      | 78   | 1455~     |
| 12    | 引越し      | 87   | 1745~     |
| 13    | 月ちゃん     | 92   | 1830~     |
| 14    | ままごと     | 99   | 2061~     |
| 15    | タイムカプセル  | 104  | 2225~     |
| 16    | 光速       | 119  | 2717~     |
| 17    | 家庭訪問     | 124  | 2869~     |
| 18    | 流星       | 129  | 2996~     |
| 19    | スイングバイ   | 142  | 3332~     |
| 20    | 二段ベッド    | 149  | 3513~     |
| 21    | わが星      | 155  | 3752~     |
| 22    | 明日       | 161  | 3997~     |
| 23    | 電話       | 164  | 4105~     |
| 24    | ミラーボール   | 167  | 4168~     |
| 25    | 手紙       | 170  | 4245~     |
| 26    | カウントダウン  | 172  | 4354~     |
| 27    | 地球滅亡     | 175  | 4479~     |
| 28    | AM000000 | 179  | 4527~     |
| 29    | 惑星消滅     | 198  | 4859~     |

図90：『わが星』章立てと該当ページ、経過時間